

加 原 遺 跡

一般国道57号大野竹田道路建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (1)

2014

大分県教育庁埋蔵文化財センター

加 原 遺 跡

一般国道57号大野竹田道路建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (1)



中央やや右側が加原遺跡(東から)



B・C区完掘状況(北から)



B・C区空中写真(上が南)

序 文

本書は、国土交通省九州地方建設局大分河川国道事務所が実施している一般国道57号大野竹田道路の建設工事に伴って行われた加原遺跡の発掘調査報告書です。発掘調査は用地買収の進捗具合などから平成21年度から平成24年度にかけて4回に分けて実施しました。その結果、本書に収録されているように、縄文時代から中世に至る各時代の遺物・遺構が確認されました。なかでも、古代の遺構・遺物は大野川流域ではこれまで類例がない「官衙」を彷彿とさせるものでした。

大野川中流域の従前の発掘調査は、農地の改良事業などに伴って台地上で行われることが多く、遺構の時代や種類も限られたものでしたが、今回の調査では、従来あまり知られていなかった谷間の斜面部で、新たな知見を得ることができました。

今回の調査結果が地域の歴史を解明する資料となり、また文化財に対する意識を高める一助となることを願うとともに、調査全般にわたりまして御協力頂いた地元教育委員会や地域の方々に対しまして、心より御礼申し上げます。

平成26年3月31日

大分県教育庁埋蔵文化財センター
所長 宮内 克己

例 言

- 1 本書は、国土交通省九州地方建設局大分河川国道事務所より委託を受け大分県教育委員会が実施した、一般国道57号大野竹田道路建設工事に伴う発掘調査の調査報告書第1集である。
- 2 本書には、平成21年度から同24年度にかけて実施した加原遺跡1次～4次調査の調査成果を収載している。
- 3 調査は平成21年度が(株)パスコ、平成22年度が(株)埋蔵文化財サポートシステム、平成23年度と平成24年度が(株)島田組にそれぞれ一部業務を委託して実施した。
- 4 出土遺物の整理作業については、平成22年度と同24年度、同25年度は(株)九州文化財総合研究所に、平成23年度は(株)イビソクに委託して実施した。また、一部の実測については五十川育子(大分県教育庁埋蔵文化財センター)が行った。
- 5 遺物については、大庭康時(福岡市埋蔵文化財センター)、塩地潤一・長直信(ともに大分市文化財課)、小林昭彦・吉田寛(ともに大分県教育庁埋蔵文化財センター)の各氏に実見頂き、貴重なご意見を頂いた。
- 6 出土遺物はすべて大分県教育庁埋蔵文化財センター(大分市中判田)で保管している。
- 7 本書の執筆は第4章を除き小柳和宏(大分県教育庁埋蔵文化財センター)が行い、第4章はパリノ・サーベイ株式会社が行った。
- 8 本書の編集は小柳が行った。

目 次

巻頭図版

序文

例言

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
第3節 調査組織の構成	3

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要	8
第2節 遺構と遺物	13
(1) A区	13
1 竪穴建物	14
2 掘立柱建物	38
3 土坑	40
4 ピット出土遺物	40
5 包含層出土遺物	40
6 土層説明	43
7 小結	44
(2) B区	45
1 竪穴建物	46
2 掘立柱建物	48
3 溝	61
4 古墳	62
5 柱穴列	65
6 土坑	66
7 焼土面	72
8 ピット出土遺物	73
9 包含層出土遺物	76
10 土層説明	84
11 小結	89
(3) C区	90
1 竪穴建物	92
2 掘立柱建物	96

3 溝	114
4 墓	115
5 土坑	117
6 ピット出土遺物	122
7 包含層出土遺物	127
8 土層説明	130
9 小結	132
(4) D区	133
1 溝	133
2 小結	134
(5) E区	135
1 竪穴建物	135
2 掘立柱建物	139
3 溝	141
4 柱穴列	143
5 墓	145
6 土坑	146
7 ピット出土遺物	149
8 土層説明	149
9 小結	151
第3節 その他の遺物	151

第4章 自然科学分析の成果

はじめに	153
第1節 放射性炭素年代測定	153
(1) 試料	153
(2) 分析方法	153
(3) 結果	153
(4) 考察	155
第2節 植物珪酸体分析	156
(1) 試料	156
(2) 分析方法	156
(3) 結果	156
(4) 考察	159
第3節 樹種同定	159
(1) 試料	159
(2) 分析方法	159
(3) 結果	160
(4) 考察	160

第5章 総括

第1節 遺物	164
第2節 遺構	169

挿 図 目 次

第1図	大野竹田道路と調査遺跡……………	1	第48図	SH17……………	46
第2図	周辺の遺跡……………	5	第49図	SH18……………	47
第3図	加原遺跡周辺地形図(3,000分の1)……………	10	第50図	SB04……………	48
第4図	加原遺跡周辺地形図(1,500分の1)……………	11	第51図	SB05……………	49
第5図	遺構配置とグリッド番号……………	12	第52図	SB06……………	50
第6図	A区遺構配置図……………	13	第53図	SB07……………	51
第7図	SH01……………	14	第54図	SB07出土遺物……………	51
第8図	SH01竈の状況……………	15	第55図	SB08……………	52
第9図	SH01出土遺物……………	16	第56図	SB09……………	53
第10図	SH02……………	17	第57図	SB09出土遺物……………	53
第11図	SH03……………	18	第58図	SB10……………	54
第12図	SH03竈の状況……………	19	第59図	SB11……………	55
第13図	SH03出土遺物……………	20	第60図	SB12……………	56
第14図	SH04……………	21	第61図	SB12出土遺物……………	56
第15図	SH04竈の状況……………	22	第62図	SB13……………	58
第16図	SH04出土遺物……………	23	第63図	SB13出土遺物……………	59
第17図	SH05……………	24	第64図	SB14……………	60
第18図	SH05出土遺物……………	25	第65図	SD01、SD02、SD03、SD04……………	61
第19図	SH06……………	26	第66図	SD02、SD04出土遺物……………	61
第20図	SH06出土遺物……………	26	第67図	SO01……………	62
第21図	SH07……………	27	第68図	SO01土層……………	63
第22図	SH07出土遺物……………	28	第69図	SO01出土遺物……………	63
第23図	SH08……………	28	第70図	SO02……………	64
第24図	SH09……………	29	第71図	SA01……………	65
第25図	SH09出土遺物……………	30	第72図	SK02……………	66
第26図	SH10……………	30	第73図	SK02出土遺物……………	66
第27図	SH10出土遺物……………	31	第74図	SK03……………	67
第28図	SH11出土遺物……………	31	第75図	SK03出土遺物(1)……………	68
第29図	SH11……………	32	第76図	SK03出土遺物(2)……………	69
第30図	SH12……………	33	第77図	SK04……………	70
第31図	SH13……………	33	第78図	SK04出土遺物……………	71
第32図	SH14……………	34	第79図	焼土面……………	72
第33図	SH14出土遺物……………	35	第80図	B区ピット出土遺物(1)……………	73
第34図	SH15……………	36	第81図	B区ピット出土遺物(2)……………	74
第35図	SH16……………	37	第82図	B区ピット出土遺物(3)……………	75
第36図	SH16出土遺物……………	37	第83図	包含層出土遺物(1)……………	77
第37図	SB01……………	38	第84図	包含層出土遺物(2)……………	78
第38図	SB02……………	38	第85図	包含層出土遺物(3)……………	79
第39図	SB03……………	39	第86図	包含層出土遺物(4)……………	80
第40図	SK01……………	40	第87図	包含層出土遺物(5)……………	81
第41図	SK01出土遺物……………	40	第88図	包含層出土遺物(6)……………	82
第42図	A区ピット出土遺物……………	40	第89図	包含層出土遺物(7)……………	83
第43図	A区包含層出土遺物(1)……………	41	第90図	包含層出土遺物(8)……………	84
第44図	A区包含層出土遺物(2)……………	42	第91図	Aトレンチ土層図……………	85
第45図	A区土層……………	43	第92図	Bトレンチ土層図……………	86
第46図	B区遺構配置図(1)……………	45	第93図	Cトレンチ土層図……………	87
第47図	B区遺構配置図(2)……………	46	第94図	Dトレンチ土層図……………	88

第95図	C区遺構配置図(1)……………	90	第145図	C区ピット出土遺物(4)……………	126
第96図	C区遺構配置図(2)……………	91	第146図	C区包含層出土遺物(1)……………	127
第97図	SH19、SH20……………	92	第147図	C区包含層出土遺物(2)……………	128
第98図	SH19出土遺物……………	93	第148図	C区包含層出土遺物(3)……………	129
第99図	SH21、SH22……………	94	第149図	C区土層(1)……………	130
第100図	SH21出土遺物……………	95	第150図	C区土層(2)……………	131
第101図	SH22出土遺物……………	95	第151図	D区遺構配置図……………	133
第102図	SB15……………	96	第152図	SD07……………	133
第103図	SB16……………	97	第153図	SD07出土遺物……………	133
第104図	SB16出土遺物……………	98	第154図	E区遺構配置図……………	135
第105図	SB17……………	99	第155図	SH23……………	136
第106図	SB17出土遺物……………	99	第156図	SH24……………	137
第107図	SB18……………	100	第157図	SH24出土遺物……………	138
第108図	SB18出土遺物……………	101	第158図	SB27……………	138
第109図	SB19出土遺物……………	101	第159図	SB27出土遺物……………	139
第110図	SB19……………	102	第160図	SB28……………	140
第111図	SB20……………	103	第161図	SD09出土遺物……………	141
第112図	SB20出土遺物……………	104	第162図	SD10出土遺物……………	141
第113図	SB21……………	104	第163図	SD11出土遺物……………	141
第114図	SB21出土遺物……………	105	第164図	SD11……………	142
第115図	SB22出土遺物……………	105	第165図	SA04……………	143
第116図	SB22……………	106	第166図	SA05出土遺物……………	143
第117図	SB23……………	107	第167図	SA05……………	144
第118図	SB23出土遺物……………	108	第168図	ST02……………	145
第119図	SB24出土遺物……………	108	第169図	ST02出土遺物……………	145
第120図	SB24……………	109	第170図	SK12……………	146
第121図	SB25出土遺物……………	110	第171図	SK12出土遺物……………	146
第122図	SB25……………	111	第172図	SK13……………	147
第123図	SB26出土遺物……………	112	第173図	SK14出土遺物……………	147
第124図	SB26……………	113	第174図	SK15出土遺物……………	148
第125図	SD05……………	114	第175図	SK16……………	148
第126図	SD06出土遺物……………	114	第176図	SK18出土遺物……………	148
第127図	ST01……………	115	第177図	E区ピット出土遺物……………	149
第128図	ST01出土遺物……………	116	第178図	E区土層図……………	150
第129図	SK05……………	117	第179図	縄文土器・弥生土器……………	152
第130図	SK05出土遺物……………	117	第180図	試料採取位置……………	154
第131図	SK06……………	117	第181図	暦年較正結果……………	155
第132図	SK06出土遺物……………	117	第182図	植物珪酸体含量……………	158
第133図	SK07……………	118	第183図	土師器坏の大きさ……………	164
第134図	SK07出土遺物……………	118	第184図	土師器坏の型式(1)……………	164
第135図	SK08……………	118	第185図	土師器坏の型式(2)……………	165
第136図	SK08出土遺物……………	119	第186図	加原遺跡出土遺物の変遷(1)……………	167
第137図	SK09……………	120	第187図	加原遺跡出土遺物の変遷(2)……………	168
第138図	SK09出土遺物……………	120	第188図	加原遺跡の遺構の変遷(1)……………	170
第139図	SK10出土遺物……………	120	第189図	加原遺跡の遺構の変遷(2)……………	171
第140図	SK11……………	121	第190図	側柱建物の規模比較……………	172
第141図	SK11出土遺物……………	121	第191図	倉庫の規模比較……………	173
第142図	C区ピット出土遺物(1)……………	123	第192図	加原遺跡の横断面と古代遺跡の推定範囲……………	174
第143図	C区ピット出土遺物(2)……………	124	第193図	遺跡周辺の歴史的環境……………	175
第144図	C区ピット出土遺物(3)……………	125			

表 目 次

第1表	大野竹田道路分布調査結果表……………	1	第11表	出土遺物一覽表(土器・陶磁器③)……	183
第2表	周辺の遺跡……………	7	第12表	出土遺物一覽表(土器・陶磁器④)……	184
第3表	遺構一覽表(1)……………	8	第13表	出土遺物一覽表(土器・陶磁器⑤)……	185
第4表	遺構一覽表(2)……………	9	第14表	出土遺物一覽表(土器・陶磁器⑥)……	186
第5表	放射性炭素年代測定結果……………	155	第15表	出土遺物一覽表(土器・陶磁器⑦)……	187
第6表	植物珪酸体分析試料……………	156	第16表	出土遺物一覽表(土器・陶磁器⑧)……	188
第7表	植物珪酸体含量……………	157	第17表	出土遺物一覽表(土器・陶磁器⑨)……	189
第8表	樹種同定結果……………	160	第18表	出土遺物一覽表(石製品)……………	189
第9表	出土遺物一覽表(土器・陶磁器①)……	181	第19表	出土遺物一覽表(金属製品)……………	190
第10表	出土遺物一覽表(土器・陶磁器②)……	182			

写 真 図 版

卷頭図版1
卷頭図版2

図版1	A区 空中写真(北東・西)	図版19	ST01
図版2	A区 完掘状況(北・南)	図版20	SH19 / SB25 / SB26 SD05 / SD06 / ST01 / SK06 /
図版3	SH01 / SH03	図版21	SK07
図版4	SH04 / SH05 / SH06	図版22	SK08 / SK09 / SK10 / SK11 / C区 焼土
図版5	SH07 / SH08 / SH09 / SH10 / SH11	図版23	SK08 / C区(北壁・北・南・南東・東・調査状況)
図版6	SH11 / SH14 / SH15 / SB01 / SB02 / SB03 / SH01	図版24	D, E区 / SD07 / D区 完掘状況(西)
図版7	B区 空中写真(南・東)	図版25	E区 完掘状況(北・南)
図版8	B区 完掘状況 / SO01	図版26	E区(中央) / SA05 / SK15 / SK16
図版9	B区 空中写真(南西・北西・南東)	図版27	SH24周辺 / ST02
図版10	B区 SO01 / SB13 / SB14	図版28	SH23 / SH24周辺 / SD10 / SA05 / SB27 / SK18
図版11	SK02 / B区(東・中央)	図版29	出土遺物
図版12	B区 完掘状況(西・東) / SH18	図版30	出土遺物
図版13	SH17 / SO01 / SO02 / SK03 / B区 焼土面	図版31	出土遺物
図版14	B区 焼土面・包含層 / SK04 / SK02 / SB13	図版32	出土遺物
図版15	C区 完掘状況(西)	図版33	出土遺物
図版16	C区(南東)・C区 完掘状況(南)	図版34	出土遺物
図版17	C区 完掘状況(北・南)	図版35	出土遺物
図版18	C区(中央・南) / SB18・SB19		

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

一般国道57号大野竹田道路は、中九州横断道路の一部として、平成19年度に事業着手がなされた。平成19年5月には、国土交通省九州地方整備局大分河川国道事務所から「埋蔵文化財の分布調査」依頼が大分県教育委員会あてになされ、同年6月と12月には埋蔵文化財センターで分布調査を行った（この段階では計画路線幅200mで分布調査）。

第1表がその時の分布調査結果である。地点番号1から26までの26箇所が、周知の埋蔵文化財包蔵地（A）及びその可能性が高い地区（B）と判断された（その内、今回の報告書で扱う「大野IC～朝地間IC」間は、地点番号1から18が該当する）。

その内、豊後大野市指定史跡である19・27の大恩寺稻荷洞穴については、工法の変更により現状で保護されることとなった。その他、2・5・8・10・12・13・17・24・25・26の10箇所については、路線幅が確定することによ

第1表 大野竹田道路分布調査結果表

路線	地点番号	場所	遺跡名	路線	地点番号	場所	遺跡名
大野～朝地	1	豊後大野市大野町大字田中		大野～朝地	15	豊後大野市朝地町大字池田字下津留	下津留遺跡
	3	豊後大野市大野町大字屋原	辻台遺跡		16	豊後大野市朝地町大字下野字姉井迫	姉井迫横穴墓群
	4	豊後大野市大野町大字屋原字廣峯	廣峯遺跡		18	豊後大野市朝地町大字板井迫	
	6	豊後大野市大野町大字桑原	加原遺跡	朝地～竹田	19/27	豊後大野市朝地町大字板井迫	板井迫横穴墓群
	7	豊後大野市大野町大字北園			20	豊後大野市朝地町大字板井迫	
	9	豊後大野市大野町大字桑原			21	豊後大野市朝地町大字上尾塚	丸山遺跡群
	11	豊後大野市朝地町大字市万田字まつびら	まつびら遺跡		22	豊後大野市朝地町大字上尾塚字赤嶽	
14	豊後大野市朝地町大字市万田字古市	古市下遺跡/古市上遺跡	23		豊後大野市朝地町大字上尾塚		



第1図 大野竹田道路と調査遺跡

国土交通省九州地方整備局
大分河川国道事務所作成資料に加筆

り対象から外れることになった。その結果、16箇所が調査対象遺跡となった。

用地買収状況に応じて、平成20年4月に地点番号1の試掘調査を行ったのを皮切りに、平成25年2月の地点番号3まで、計12回の試掘（確認）調査を実施した。その結果、地点番号6・14の2箇所が本調査の対象となった。

第2節 調査の経過

1 加原遺跡

(1) 第1次調査（A区）

平成22年1月18日 重機による表土剥ぎ開始
平成22年1月25日 作業員による遺構検出作業開始
平成22年1月26日 土層を確認するためトレンチを8箇所設定し、掘下げ
平成22年1月28日 焼土（竈）を伴う竪穴遺構6箇所確認
平成22年1月29日 重機による2回目の掘下げを行う
平成22年2月2日 重機による3回目の掘下げを行う
平成22年2月5日 竪穴遺構掘下げ開始
平成22年2月25日 空中写真撮影
平成22年3月5日 掘削作業終了

この段階で、下層の遺構等が年度内に完掘出来ないことが明らかとなったため、一旦発掘調査を終了し、あらためて次年度に下層の調査を行うこととなった。

(2) 第2次調査（A区）

平成22年4月27日 重機による表土剥ぎ開始
平成22年5月6日 作業員による遺構検出作業開始
平成22年5月13日 遺構掘削作業開始
平成22年6月3日 空中写真撮影
平成22年6月10日 発掘作業終了

(3) 第3次調査（D区、E区）

平成23年12月21日 重機によるE区表土剥ぎ開始
平成24年1月6日 作業員によるE区遺構検出作業開始
平成24年1月13日 E区土坑墓や柱穴列検出、掘下げ開始
平成24年2月1日 重機によるD区表土剥ぎ開始
平成24年2月3日 作業員によるD区遺構検出・掘下げ開始
平成24年2月18日 空中写真撮影
平成24年2月22日 発掘調査終了

(4) 第4次調査（B区、C区）

平成24年5月15日 重機によるB区、C区表土剥ぎ開始
平成24年5月17日 作業員によるC区遺構検出作業開始
平成24年5月29日 C区で掘立柱建物群を確認
平成24年6月1日 作業員によるC区遺構掘下げ作業開始
平成24年6月11日 C区において重機による2度目の掘下げ実施

平成24年6月19日から27日まで、盛土が雨による崩壊の危険があるため作業中断	
平成24年6月28日	再開
平成24年7月27日	C区空中写真撮影
平成24年8月4日	重機により、C区の中世段階の堆積土を除去
平成24年8月21日	C区S-003のレーザー測量
平成24年8月22日	C区S-003 断ち割り作業、B区遺構検出作業
平成24年9月5日	B区重機による中世段階の堆積土除去
平成24年10月4日	B区空中写真撮影
平成24年10月10日	B区にて水田層らしき土層を確認
平成24年10月31日	遺構をレーザー測量
平成24年11月14日	B区にて古墳確認
平成24年11月30日	遺構掘削完了、遺構をレーザー測量
平成24年12月10日	埋戻し完了

第3節 調査組織の構成

(平成21年度)

埋蔵文化財センター	所長 佐藤英一
〃	管理予算班主幹(総括) 宮永敬三
〃	管理予算班副主幹 徳脇仁志
〃	受託事業班主幹(総括) 小柳和宏(調査担当)

(平成22年度)

埋蔵文化財センター	所長 山口博文
〃	管理予算班課長補佐(総括) 春山義光
〃	管理予算班副主幹 徳脇仁志
〃	受託事業班主幹(総括) 小柳和宏
〃	一般事業班主幹 田中裕介(調査担当)

(平成23年度)

埋蔵文化財センター	所長 山口博文
〃	管理予算班課長補佐(総括) 春山義光
〃	管理予算班副主幹 徳脇仁志
〃	受託事業班課長補佐(総括) 小柳和宏
〃	一般事業班主幹 田中裕介(調査担当)

(平成24年度)

埋蔵文化財センター	所長 山口博文
〃	管理予算班課長補佐(総括) 春山義光
〃	管理予算班主査 山村光広
〃	受託事業班課長補佐(総括) 小柳和宏(調査担当)
〃	資料管理班副主幹 染矢和徳(調査担当)

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

加原遺跡は豊後大野市大野町桑原字加原に位置する。旧朝地町や旧大野町を含む現在の豊後大野市（旧大野郡域の一部）は、阿蘇山の噴火による火砕流台地が広く展開し、台地が卓越する地形を形成している。それらは大野原や三重原などと呼ばれており、高原状の台地となっている。この火砕流台地は浸食によって大野川本流では幅300から400m近い平野を形成するが、他の支流は100から200m、さらに上流に行けばさらに幅の狭い平野となる。今回報告する加原遺跡も、大野川の支流が形作る樹枝状に展開する狭い谷底平野に立地している。

加原遺跡は、神角寺周辺に源を発する酒井寺川の一支流で、酒井寺川との合流点まで2kmほどの短い河川沿いに開けた平野に立地する。遺跡が立地するのは、合流点から500mほど上流に遡った右岸になる。遺跡の立地する箇所は、全体的に川に向けて約10度の緩斜面で、背後にはすぐ比高差30mの丘陵が迫る。

今回調査対象となった加原遺跡が立地する場所は、今まであまり調査対象となることがないような地形の場所であった。周知遺跡の多くも高原状の台地に立地するものであった。このことは、高原状台地から遺跡が姿を消す古墳時代前期以降の遺跡立地が、加原遺跡のような、小河川沿いに展開する谷底平野の緩斜面上に移ってきたことを具体的に示すものとして注意されよう。

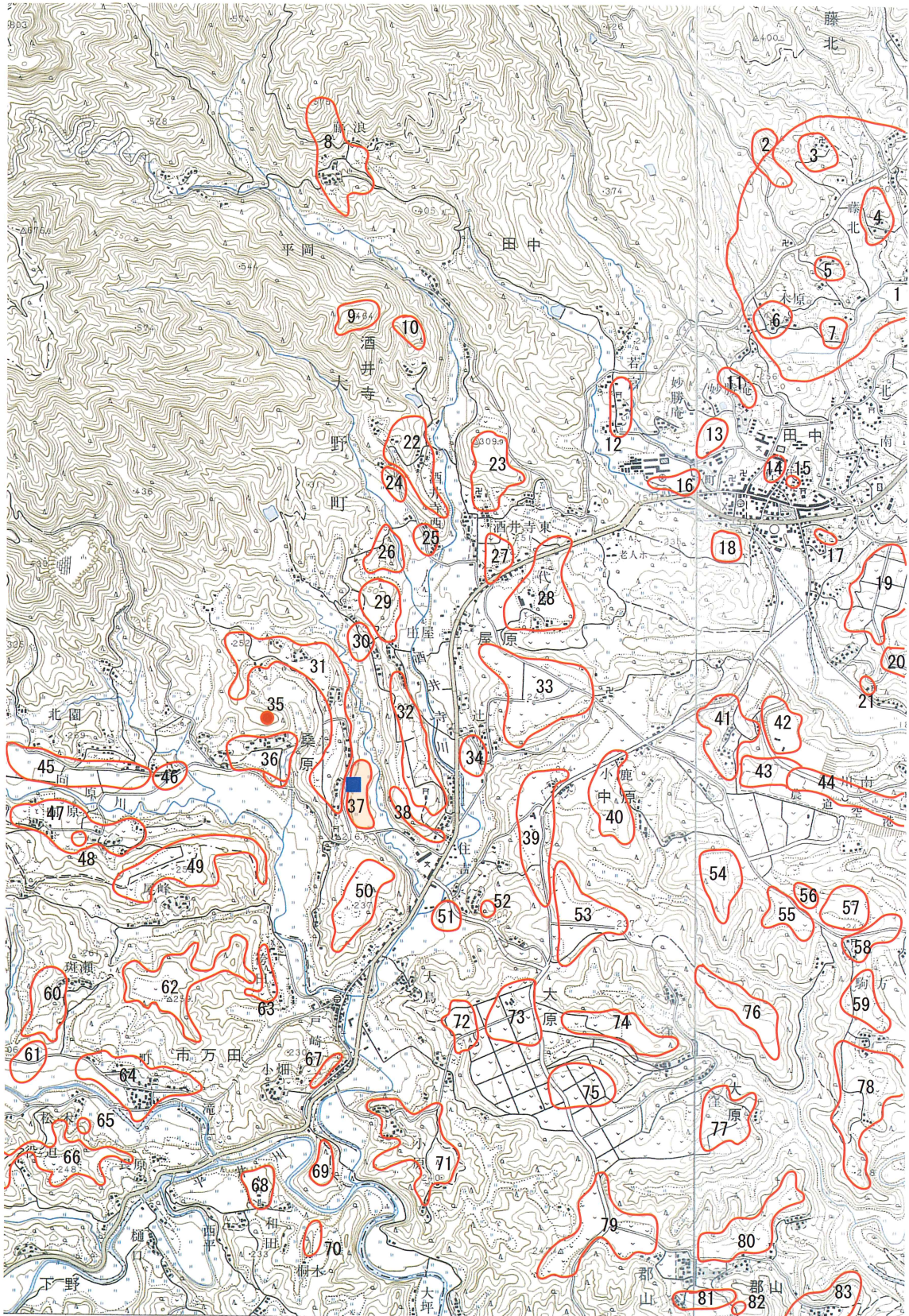
第2節 歴史的環境

加原遺跡が所在する大野川流域は、県下でも遺跡が集中する場所として知られている。阿蘇火砕流によって形成された台地上は厚いクロボク土で覆われているが、その下の黄褐色ローム土からは旧石器時代の遺跡が、クロボク土の下層に挟まれるアカホヤ火山灰の下からは縄文時代早期の、アカホヤ火山灰の上からは縄文時代前期から晩期の遺跡がしばしば確認される。また、クロボク土の上面では弥生時代中期から後期の遺跡が多く確認されている。ところが、古墳時代になると台地上から集落遺跡は姿を消し、5世紀後半になると阿蘇溶結凝灰岩に穿った横穴墓が各所で作られるようになる。

加原遺跡は、古代には「大野郡」に属する。『豊後国風土記』によれば大野郡には四郷、二駅が知られ、それらは『和名抄』によると「大野郷」、「三重郷」、「田口郷」、「緒方郷」と、「三重駅」、「小野駅」である。旧朝地町と旧大野町は「大野郷」に属すとされるので、今回の三遺跡の場所は古代では「大野郷」にあたることになる。

ところで、大野郡衙の所在地については二説ある。一つは旧三重町の大字市場あたりに比定するもので、もう一つは旧大野町の大字郡山あたりに比定するものである。前者は、駅のひとつが「三重駅」であり、駅に近いこと、また小字名で「郡田」があり、郡家との関連が考えられる事による。後者は、「郡山」という地名がしばしば郡衙所在地に残されることによる。いずれも決定的な証拠はないので、推測の域を出ない。そこで古代以前の古墳時代の状況を見ると、三重町に前方後円墳が集中的に築かれてはいるが、いずれも中期までであり、後期の石室墳は知られていない。一方、後者では中期と考えられる前方後円墳が加原遺跡背後の丘陵上に作られており、さらに大字郡山に近い大字片島では小型ながら6世紀後半の石室墳（尾崎古墳）が確認されている。このことが直ちに古代直前に後者が優位であったことを示すものではないが、古代の「道」のルートを合わせて考えると後者の優位性が浮かび上がる。

国府所在地の大分郡から大野郡へ至るには、「高坂駅」→「丹生駅」→「三重駅」というルートが想定されている。これは大野川に沿って遡って来るというルートである。しかし、ところどころ峡谷状の切り立った崖をなす大野川沿いを行くためには台地や丘陵上を迂回し、さらに大野川に流れ込む支流を幾筋も越えることを意味する。その困難さに比べると、現在の県道大分大野線のルートは、標高420mの峠を越える必要はあるものの、大分郡と大野郡をほぼ直線で結び、河川を越えることもない。このルート（以下では「峠越えルート」と仮称）で山



■ 調査地点

第2図 周辺の遺跡

(国土地理院 1/25,000 「田中」・「朝地」)

を下ってきたところが現在の大野町田中で、周辺には「郡山」、尾崎古墳、加原遺跡や、大野八幡社と総称され、天長年間（9世紀前葉）の勸請伝承を持つ上津八幡社、浅草八幡社、深山八幡社などが所在する。これらが田中から3km内に集中しているのは、このルートが古代、あるいはそれ以前から大分郡と大野郡を結ぶ主要ルートであったことを示すものと考えられる。この峠越えルートの大分郡側の入口の植田には豊後一宮とも言われる*1 西寒田神社と霊山寺*2があり、その先には国府がある。このことからしても、この峠越えルートの重要度は高かったと考えられる。

そのように考えられるとすると、「駅」の所在が問題となる。現在の定説では、「三重駅」と「小野駅」がそれぞれ旧三重町市場付近と旧宇目町小野市となっている。「三重駅」が三重郷にあったことは、ピンポイントで比定は出来ないものの、動かないと考えられるが、「小野駅」が同じ三重郷の小野市にあったとするのは、地名と日向への中継地としての立地から言われているもので、やや根拠が薄いように思える。先の峠越えルートが古代官道で、大野郷側の「郡山」に郡衙があったとすれば、その出口であった大野町田中周辺に駅があったと考えるのは自然であろう。「小野駅」が「大野駅」の誤記である可能性もあるのではなからうか。今後の発掘調査の進展に期待したい。

中世になると、今回報告の遺跡がある地は「大野荘」として立券され、在地領主であった大神系大野氏によって建久9（1198）年には山城国三聖寺に寄進された。大野氏はその後、鎮西奉行中原親能に対して謀反を起こして滅ぼされ、所領は没官された。その没官領の地頭職は、承元2（1208）年までに親能の猶子大友能直に与えられた。ここに豊後国守護大友家の重要な所領が確立することになる。交通の要衝でもあった「田中」には、大友能直の墓とされる五輪塔がある常忠寺や、能直の法号「勝光寺殿豊州能蓮大禅定門」から、その墓所であったとされる勝光寺がある。その後も大野荘は、大友氏の庶子家である一万田氏、志賀氏、詫間氏などに分割所有され、戦国期まで維持された。このように、この地は隣接する直入郡とともに「南郡」と呼ばれ、中世を通して豊後における大友氏の根本所領として推移していった。

*1 文書では確認出来ない。確実な豊後一宮は由原八幡宮であり、この神社が速見郡から大分郡に入る場所にあることを考えると、大分郡から南に展開する植田にある西寒田神社と対照をなしていたとも言える。その西寒田神社が豊後一宮とされるのも故無いことではないのであろう。植田に小字「印鑰社」があることも古国府地区にあったとされる国府とは別に、何らかの施設が植田地区にあったことも考えられるのではなからうか。国分寺が近いこともこの地区の重要性を示している。

*2 伝承では推古朝の末に来朝した那伽が開基という。

第2表 周辺の遺跡

番号	遺跡名	所在地	内容
1	藤北遺跡群	豊後大野市大野町藤北	縄文時代ほか包含層
2	藤北館跡	豊後大野市大野町藤北字堀	中世の館跡
3	常忠寺遺跡	豊後大野市大野町藤北	中世の寺と周辺の包蔵地
4	東阿弥陀堂跡	豊後大野市大野町藤北字お東	鎌倉時代の文書に見える「東西阿弥陀堂」の跡か
5	西阿弥陀堂跡	豊後大野市大野町藤北字お西	鎌倉時代の文書に見える「東西阿弥陀堂」の跡か
6	勝光寺遺跡	豊後大野市大野町藤北	大友能直の諡号「勝光寺殿」を寺号とする寺院。能直の墓堂
7	泊寺跡	豊後大野市大野町藤北字とまりごう	鎌倉時代の文書に見える寺跡。鎌倉時代の文書に見える寺跡
8	藤浪遺跡群	豊後大野市大野町田中	中世ほか包蔵地
9	高城(大城)	豊後大野市大野町酒井寺	中世山城。主に切岸による備え。15世紀代か
10	高城(小城)	豊後大野市大野町酒井寺	中世山城
11	妙勝庵遺跡	豊後大野市大野町田中文字妙勝庵	中世包蔵地
12	若宮神社遺跡	豊後大野市大野町田中文字丸山	古墳時代、中世包蔵地
13	製糸工場前遺跡	豊後大野市大野町田中	旧石器包蔵地
14	旧最乗寺跡	豊後大野市大野町田中文字寺屋敷	中世ほか寺院跡
15	最乗寺遺跡	豊後大野市大野町田中	伝戸次氏館跡
16	旧大野高校遺跡	豊後大野市大野町田中	旧石器包蔵地
17	観音堂遺跡	豊後大野市大野町田中	中世包蔵地
18	田中城跡	豊後大野市大野町田中	中世の館跡
19	千仏南遺跡	豊後大野市大野町田中	旧石器ほか包蔵地
20	川北遺跡	豊後大野市大野町田代字川北	旧石器ほか包蔵地
21	杵築社遺跡	豊後大野市大野町田代字礼柁ノ木	室町時代の神社
22	酒井寺西遺跡	豊後大野市大野町酒井寺	旧石器ほか包蔵地
23	酒井寺跡	豊後大野市大野町酒井寺	古墳時代・中世包蔵地、寺跡
24	湖口遺跡	豊後大野市大野町酒井寺	旧石器ほか包蔵地
25	酒井寺西公民館前遺跡	豊後大野市大野町酒井寺	旧石器ほか包蔵地
26	湖口南遺跡	豊後大野市大野町酒井寺	旧石器ほか包蔵地
27	門前遺跡門前遺跡	豊後大野市大野町酒井寺字門前	旧石器ほか包蔵地
28	代ノ原遺跡群	豊後大野市大野町酒井寺	旧石器ほか包蔵地
29	庄屋C遺跡	豊後大野市大野町屋原	弥生時代・中世包蔵地
30	庄屋B遺跡	豊後大野市大野町屋原	弥生時代・中世包蔵地
31	ナギ迫原遺跡群	豊後大野市大野町北園	縄文時代包蔵地
32	庄屋A遺跡群	豊後大野市大野町屋原字廣峯	旧石器ほか包蔵地
33	辻台遺跡群	豊後大野市大野町屋原	旧石器ほか包蔵地
34	辻遺跡	豊後大野市大野町屋原	旧石器ほか包蔵地
35	坊ノ原古墳	豊後大野市大野町桑原字羽部	古墳時代中期の前方後円墳
36	羽部遺跡	豊後大野市大野町北園	旧石器ほか包蔵地
37	加原遺跡	豊後大野市大野町桑原字加原	縄文～中世の集落跡
38	住吉横穴	豊後大野市大野町大原字住吉	古墳時代後期の横穴墓群
39	二本木遺跡	豊後大野市大野町屋原・大原	縄文時代包蔵地、弥生時代集落跡
40	小鹿遺跡	豊後大野市大野町中原字小鹿	縄文時代晩期包蔵地
41	高土町遺跡	豊後大野市大野町田代字高土町	中世包蔵地
42	ガランバル遺跡	豊後大野市大野町田代字ガランバル	旧石器ほか包蔵地
43	神原遺跡	豊後大野市大野町田代字神原	旧石器ほか包蔵地
44	川南遺跡群	豊後大野市大野町田代字石仏	旧石器ほか包蔵地
45	一丁田遺跡	豊後大野市大野町北園	旧石器ほか包蔵地
46	北園神社前遺跡	豊後大野市大野町北園	縄文時代ほか包蔵地
47	梅園原遺跡	豊後大野市大野町向原	弥生時代、古墳時代包蔵地
48	下尾峰横穴	豊後大野市大野町向原	古墳時代後期の横穴墓群
49	尾峰遺跡	豊後大野市朝地町市万田字尾峰	弥生時代包蔵地
50	迫原遺跡	豊後大野市大野町桑原字迫原	弥生時代包蔵地
51	大鳥遺跡	豊後大野市大野町大原	古墳時代包蔵地
52	神松横穴	豊後大野市大野町大野字住吉	古墳時代後期の横穴墓群
53	近中遺跡	豊後大野市大野町大野字住吉	弥生時代集落跡
54	駒方西遺跡	豊後大野市大野町中原字ヲハネ	旧石器包蔵地
55	駒方遺跡B地点	豊後大野市大野町田代字上古屋	旧石器ほか包蔵地
56	駒方津室迫遺跡	豊後大野市大野町田代字津室迫	旧石器包蔵地
57	駒方神社遺跡C	豊後大野市大野町田代字古屋	旧石器ほか包蔵地
58	駒方寺畑遺跡	豊後大野市大野町中原寺畑	旧石器包蔵地
59	駒方上遺跡A	豊後大野市大野町中原	弥生時代包蔵地
60	長楽寺跡遺跡	豊後大野市朝地町市万田	中世包蔵地・伝寺院跡
61	古市遺跡	豊後大野市朝地町市万田	弥生時代集落、古代・中世包蔵地
62	宮迫遺跡	豊後大野市朝地町市万田字宮迫ほか	縄文時代ほか包蔵地
63	袴田横穴	豊後大野市朝地町市万田字袴田	古墳時代後期の横穴墓群
64	町遺跡	豊後大野市朝地町市万田字町	弥生時代包蔵地
65	七崩横穴群	豊後大野市大野町池田字七崩	古墳時代後期の横穴墓群
66	城遺跡城遺跡	豊後大野市大野町池田字城	縄文時代包蔵地
67	小畑横穴群	豊後大野市朝地町市万田字小畑	古墳時代後期の横穴墓群
68	深山遺跡	豊後大野市朝地町市万田	中世包蔵地
69	小牟礼城跡	豊後大野市朝地町市万田字小群	近世初頭の城郭跡
70	東昭寺跡遺跡	豊後大野市朝地町市万田字薬師様	中世包蔵地
71	尾原遺跡群	豊後大野市大野町大原	旧石器ほか包蔵地
72	横井遺跡	豊後大野市大野町大原	旧石器ほか包蔵地
73	おどりば遺跡	豊後大野市大野町大原字おどりば	旧石器包蔵地
74	窪原遺跡	豊後大野市大野町大原字窪	縄文時代ほか包蔵地
75	郡山原遺跡	豊後大野市大野町郡山字郡山	弥生時代包蔵地
76	窪北遺跡	豊後大野市大野町大原	旧石器ほか包蔵地
77	窪南遺跡	豊後大野市大野町大原	旧石器ほか包蔵地
78	仏窪遺跡群	豊後大野市大野町中原字台ノ原	弥生時代包蔵地
79	郡山西遺跡群	豊後大野市大野町郡山	旧石器ほか包蔵地
80	矢所遺跡群	豊後大野市大野町中原(郡山)	旧石器ほか包蔵地
81	郡山遺跡	豊後大野市大野町中原(郡山)	旧石器ほか包蔵地
82	郡山南遺跡	豊後大野市大野町中原字南	旧石器包蔵地
83	下原遺跡群	豊後大野市大野町中原字下原	旧石器ほか包蔵地

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

調査は、用地買収の関係から4年次にわたって行われたため、各調査ごとに遺構番号が重複するので、本報告書では北側の調査区からA区、B区、C区、D区、E区とし、遺構番号も全ての通し番号とする。そのため、遺構や調査区の名称など、本報告書の記載と調査時の図面上での名称や遺物への注記が異なるため、下にその対応表を掲げておく。

加原遺跡は、大野川本流から山間に入った支流沿いに開けた谷の斜面に位置している。そのため、遺跡は西側（川側）に向かって全体的に約10度の傾斜を持った斜面上に立地することとなっている。その斜面から縄文時代から中世にいたる各時代の遺物や、古墳時代から古代にかけての竪穴建物や掘立柱建物が検出された。特にB区とC区において検出された古代の掘立柱建物群は、柱穴掘方が方形で一辺1m近いものもあるなど、官衛的要素として注目された。これらの建物群が廃絶した後は、12世紀代に小規模な掘立柱建物群が築かれ、土葬墓が営まれた。一方、古代の掘立柱建物群以前には、6世紀後半から7世紀前半にかけて竪穴建物群が築かれている。さらにその下層からは、B区において方形墳2基が検出された。出土遺物が少なく時期決定に困難さを覚えるが、古墳時代の竪穴建物群以前で、5世紀を中心とした時期のものであろう。また、遺構は確認されなかったが、弥生時代早期・後期、縄文時代晩期の遺物が出土している。

一方、掘立柱建物群や竪穴建物群が検出出来る層のプラントオパール分析で、イネの機動細胞の存在が明らかになった。水田遺構は検出できなかったが、傾斜地での棚田のような水田を作っていたのか、あるいは傾斜地を平坦にするために大規模に水田耕作土を客土としたものかは判断できなかった。時期は、方形墳より後で、建物群以前、あるいは同時期と考えている。

第3表 遺構一覧表 (1)

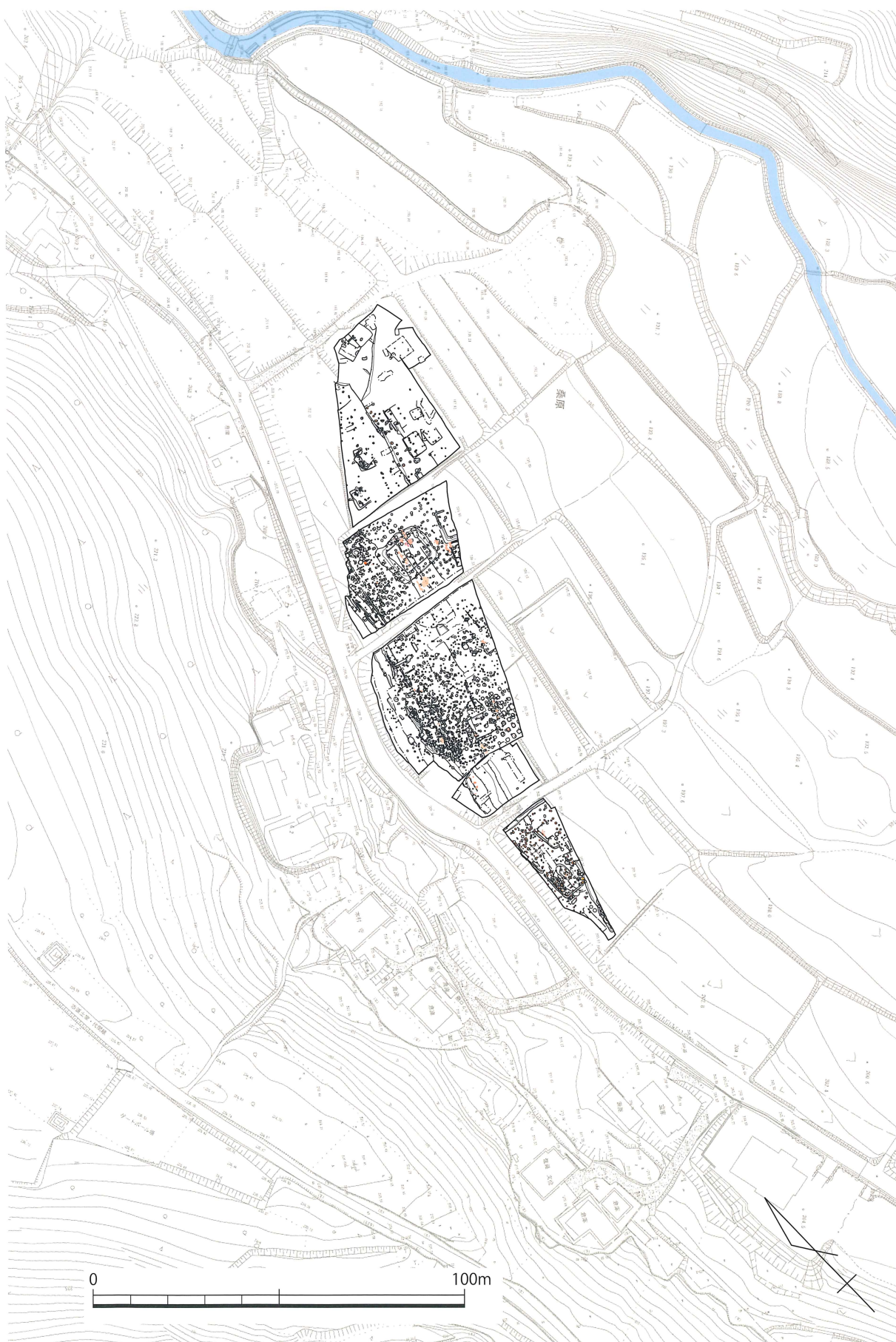
遺構番号	旧番号	調査区	グリット番号	種別	時期	備考
SH01	2次S007	A区	A-8	竪穴建物	古墳	SH02、SH03に切られる。
SH02	2次S066	A区	A-8	竪穴建物	古墳	SH01を切り、SH03に切られる。
SH03	2次S059	A区	A-8	竪穴建物	古墳	SH01とSH02を切る。
SH04	2次S060	A区	B-9	竪穴建物	古墳	
SH05	1次S005	A区	B-7	竪穴建物	古墳	
SH06	1次S004	A区	C/D-7	竪穴建物	古墳	半分調査区外に広がる。
SH07	1次S006	A区	C/D-7/8	竪穴建物	古墳	
SH08	1次S016	A区	D-8	竪穴建物	古墳	
SH09	1次S014	A区	D-6	竪穴建物	古墳	SH10に切られる。
SH10	1次S003	A区	D-6	竪穴建物	古墳	SH09を切る。
SH11	1次S009	A区	D/E-7	竪穴建物	古墳	
SH12	1次S012	A区	E-8	竪穴建物	古墳	
SH13	1次S013	A区	D-8	竪穴建物	古墳	
SH14	1次S002	A区	D/E-5	竪穴建物	古墳	
SH15	1次S001	A区	D/E-5	竪穴建物	古墳	
SH16	1次S010	A区	E-8	竪穴建物	古墳	
SH17	4次2171	B区	F-5	竪穴建物	古墳	竈のみ残存、SO01を切る。
SH18	4次S2172	B区	F/G-6	竪穴建物	古墳	大部分調査区外。
SH19	4次S249	C区	J-5	竪穴建物	古墳終末	SH20を切る。壁はごく僅か残存。
SH20	4次S248	C区	J-5	竪穴建物	古墳終末	SH19から切られる。壁はごく僅か残存。
SH21	4次S100	C区	K-3	竪穴建物	古墳終末	SH22に切られる。
SH22	4次S099	C区	K-3/4	竪穴建物	古墳終末	SH21を切る。
SH23	3次S070	E区	N-3	竪穴建物	古墳	
SH24	3次S012	E区	O/P-2	竪穴建物	古墳	

第4表 遺構一覧表(2)

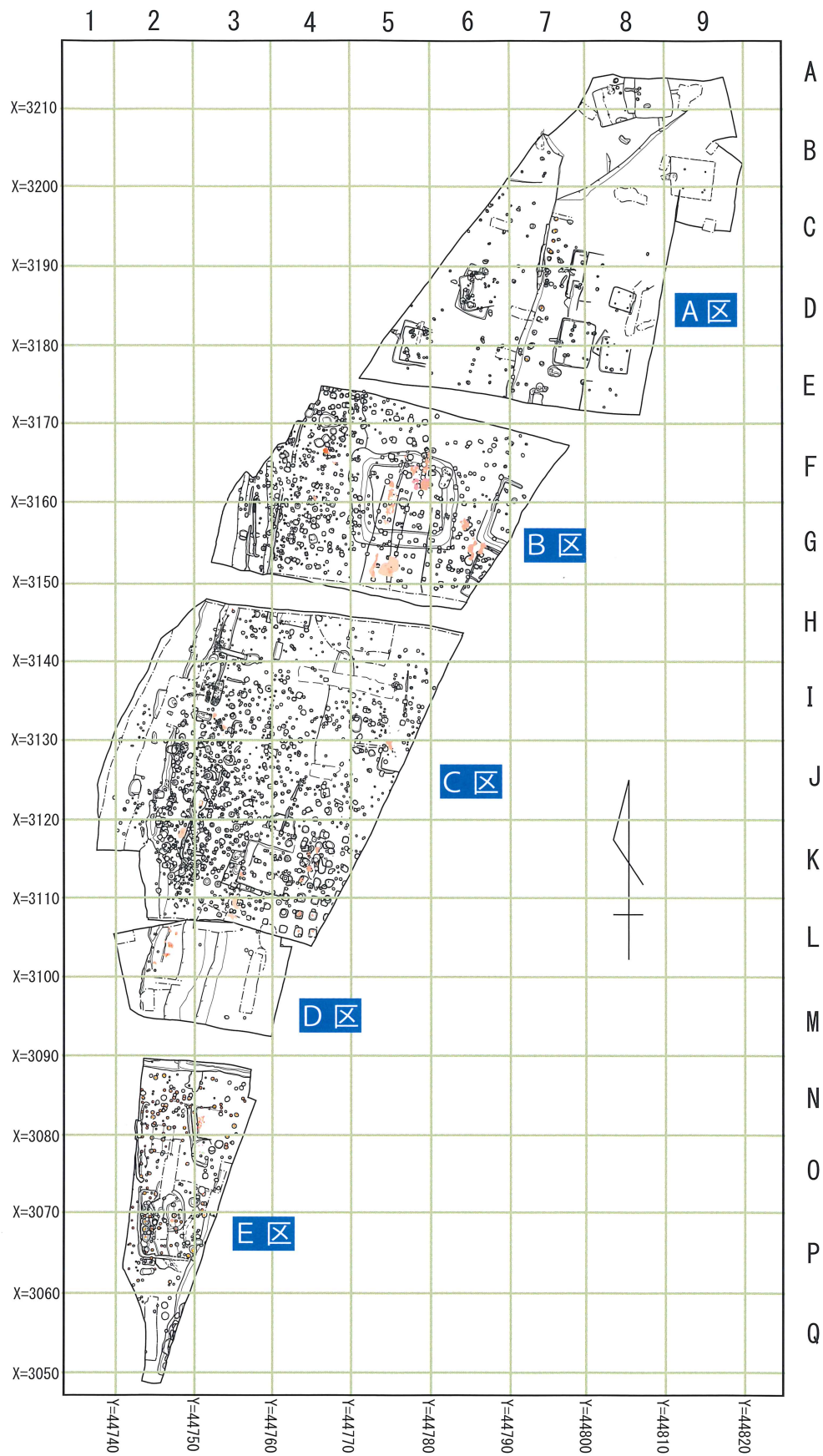
遺構番号	旧番号	調査区	グリット番号	種別	時期	備考
SB01	2次SB01	A区	C-7	掘立柱建物	古代	低い方(東側)の柱穴は未検出。
SB02	2次SB02	A区	C/D-7	掘立柱建物	古代	低い方(東側)の柱穴は未検出。
SB03	2次SB03	A区	D/E-7	掘立柱建物	古代	低い方(東側)の柱穴は未検出。
SB04	4次SB14	B区	E/F-4	掘立柱建物	古代	
SB05	4次SB23	B区	E-5	掘立柱建物	古代	北側は調査区外に広がる。
SB06	4次SB15B	B区	F-5	掘立柱建物	古代	
SB07	-	B区	F-5/6	掘立柱建物	古代	
SB08	-	B区	G-3	掘立柱建物	中世	
SB09	-	B区	F/G-4	掘立柱建物	古代	SB10と切り合い関係あり。
SB10	-	B区	F/G-4	掘立柱建物	古代	SB09と切り合い関係あり。
SB11	-	B区	G-4	掘立柱建物	古代	SB12と切り合い関係あり。
SB12	-	B区	G-4	掘立柱建物	古代	SB11と切り合い関係あり。
SB13	4次SB17	B区	G-5	掘立柱建物	古代	
SB14	4次SB16	B区	G-6	掘立柱建物	古代	
SB15	4次SB22	C区	H-3	掘立柱建物	中世	山側にSD05が廻る。
SB16	4次SB10	C区	J-3	掘立柱建物	古代	
SB17	4次SB24	C区	J-3	掘立柱建物	古代	
SB18	4次SB11	C区	I/J-3	掘立柱建物	古代	
SB19	4次SB12	C区	I/J-3	掘立柱建物	古代	
SB20	4次SB09	C区	K-3	掘立柱建物	古代	
SB21	4次SB07	C区	K-3	掘立柱建物	古代	
SB22	4次SB08	C区	K-3	掘立柱建物	古代	
SB23	4次SB06	C区	K/L-3	掘立柱建物	古代	
SB24	4次SB03	C区	K-4	掘立柱建物	古代	3×3間の総柱倉庫。
SB25	4次SB02	C区	K-4	掘立柱建物	古代	3×3間の総柱倉庫。
SB26	4次SB01	C区	L-4	掘立柱建物	古代	2×3間の総柱倉庫。
SB27	3次SB04	E区	N/O-2	掘立柱建物	中世	
SB28	3次SB03	E区	O/P-2	掘立柱建物	古代	
SD01	4次S2004	B区	F-4	溝	中世	
SD02	4次S2002	B区	G-3	溝	中世	
SD03	4次S2006	B区	G-3	溝	中世	
SD04	4次S2009	B区	G-4	溝	中世	
SD05	4次S014	C区	H-3	溝	中世	SB15の排水溝か。
SD06	4次S073	C区	K-2~J-3	溝	中世	SB20の排水溝か。
SD07	3次S301	D区	L/M-2	溝	中世	
SD08	3次S259-260	E区	N-2	溝	中世	
SD09	3次S240	E区	O-2	溝	中世	
SD10	3次S014	E区	O/P-2	溝	中世	
SD11	3次S067	E区	P/Q-2/3	溝	中世	
SA01	4次SA28	B区	F/G-4	柱穴列	中世	L字状に折れる。
SA02	3次S214	E区	N-2	柱穴列		
SA03	3次SB02	E区	O-2	柱穴列		建物の側柱の可能性もあり。
SA04	3次SA01	E区	N-2/3	柱穴列		
SA05	3次SB05	E区	P-2	柱穴列	中世	
SO01	4次S2169	B区	F/G-5/6	古墳	古墳	主体部不明、方形墳。
SO02	4次S2170	B区	F/G-6/7	古墳	古墳	1/2調査区外、方形墳。石製紡錘車出土。
ST01	4次S003	C区	I-3	墓	中世前期	上部に礫敷き詰める。青磁碗副葬。
ST02	3次S008	E区	N-2	墓	中世前期	短刀、土師器坏副葬。短刀、土師器坏副葬。
SK01	2次S050	A区	E-6/7	土坑	古墳	
SK02	4次S2012	B区	E/F-4	土坑	中世	
SK03	4次S2101	B区	F-6	土坑	古代	
SK04	4次S2138	B区	G-4	土坑	古代	
SK05	4次S148	C区	I-3	土坑	古代	
SK06	4次S122	C区	I-3	土坑	古代	地鎮に伴う遺構か
SK07	4次S147	C区	J-2	土坑	古代	鍛冶炉
SK08	4次S037	C区	J/K-2/3	土坑	古代	
SK09	4次S260	C区	K-4	土坑	古代	
SK10	4次S283	C区	K-4	土坑	古代	
SK11	4次S246	C区	K-4	土坑	古代	
SK12	3次S172	E区	O-2/3	土坑	中世	
SK13	3次S294	E区	O-2/3	土坑		
SK14	3次S241	E区	O/P-2	土坑	中世	
SK15	3次S232	E区	P-2	土坑	中世	
SK16	3次S085	E区	P-2	土坑		
SK17	3次S097	E区	Q-2	土坑		
SK18	3次S096	E区	Q-2	土坑	中世	



第3図 加原遺跡周辺地形図 (3,000分の1)



第4図 加原遺跡周辺地形図 (1,500分の1)



第5図 遺構配置とグリッド番号

第2節 遺構と遺物

(1) A区

A区は、調査区内、最も上流側（北側）に位置している。調査前は段々畑となっており、表土を除去すると山側（西側）は削られ、川側（東側）は二次堆積土が厚く堆積していた。特に山側は黄褐色ローム土が露出した状況であった。そのため、調査区の西側は比較的遺構検出が容易に行えたが、東側は遺構検出面を特定するのが困難なほど黒褐色粘質土が厚く堆積しており、その土中から古代から古墳時代にかけての遺物が出土するものの、遺構が確認できない状況であった。そのため、最終的には黒褐色粘質土を除去し、全面的に黄褐色ローム土まで下げて検出を行わざるを得なかった*3。その結果、竪穴建物16基、掘立柱建物3棟などが確認された。



第6図 A区遺構配置図

*3 隣接のB区およびC区の調査の際には黒褐色粘質土中から遺構検出が可能であった。それは遺構埋土に黄褐色ロームの粒子が混じっていることから判明したものであり、それが無かったA区では、黒褐色粘質土中の遺構は確認できなかった可能性がある。

1 竪穴建物

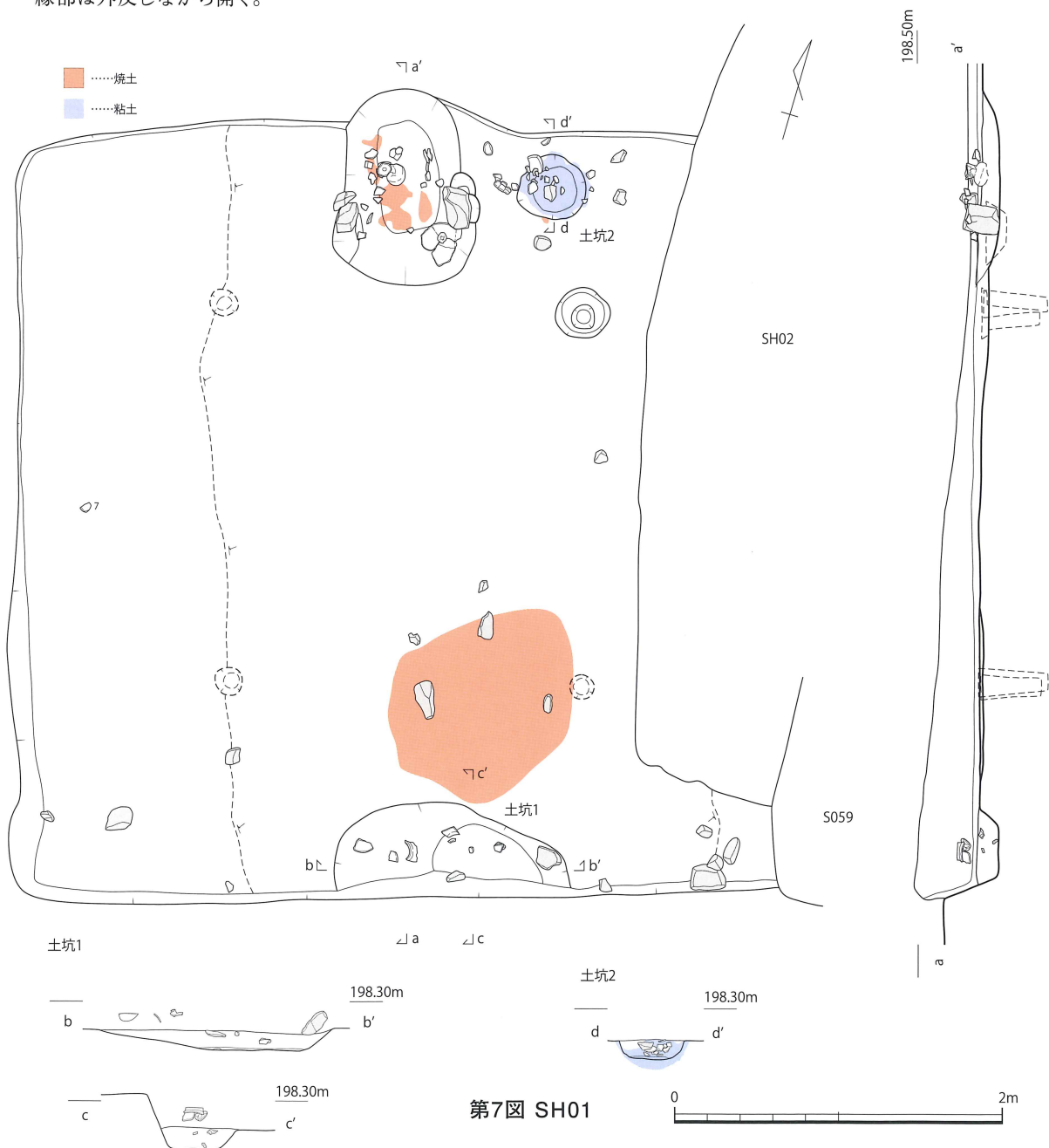
□SH01 (第7図)

調査区の北側で確認された竪穴建物で、SH02に切られている。東西4.7mで、南北は4.7+a mある。深さは、残りの良いところで0.3mほどであるが、北側は0.1mほどしか残っていない。北側のほぼ中央と思われる位置に竈が作り付けられており、その東側の床面には直径40cmほどの土坑がある。また、竈と反対側の壁に近い部分には直径1mほどの焼土があり、その壁際には深さ10cmほどの土坑がある。

竈は、大部分壊されていたが、凝灰岩製の袖石左右とも残されていた。竈構築の堀方は南北1.2m、東西0.7mの楕円形を呈し、床面は一部で焼けて赤化していた。

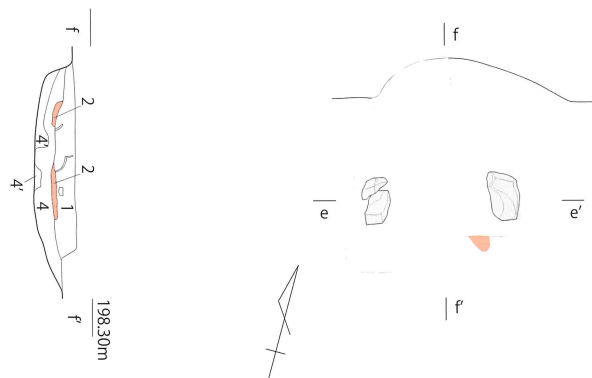
柱穴は4カ所で確認された。

出土遺物は第9図1から9で、1は須恵器坏蓋で、天井部は回転ヘラ調整である。2から9は土師器である。2と3、4は碗で、いずれも横方向に磨かれている。口縁端部で小さく内側に屈曲する。5は高坏の脚部で、裾部が「ハ」字形に開く。6は手づくねの小さな脚部で、製塩土器の脚台と考えられる。7は直口壺。8と9は甕である。口縁部は外反しながら開く。

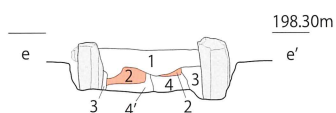


第7図 SH01

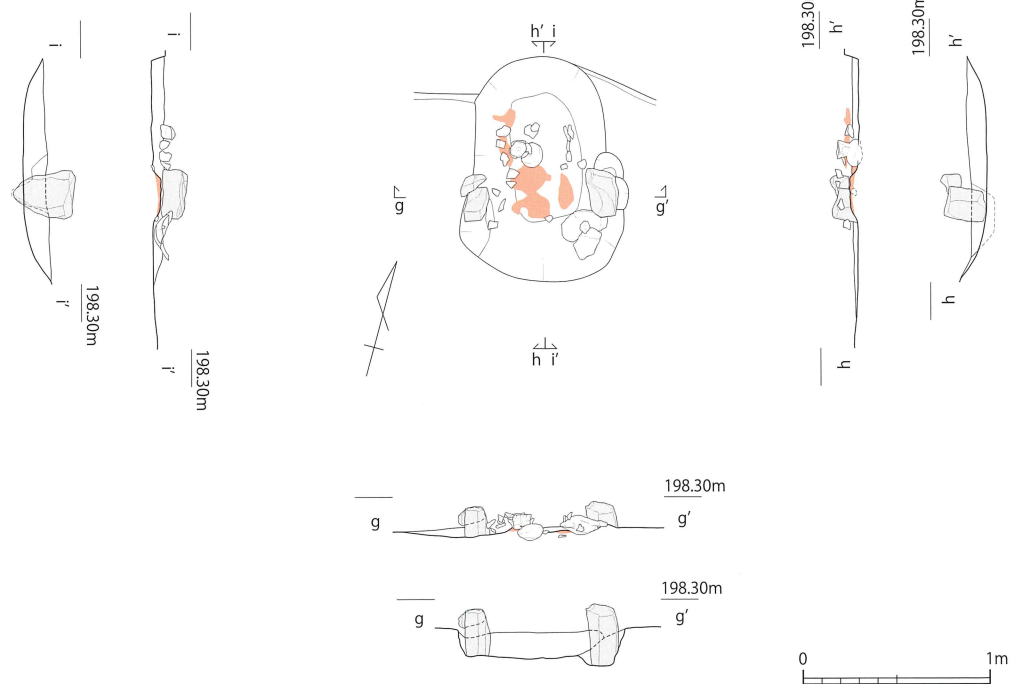
カマド検出状況



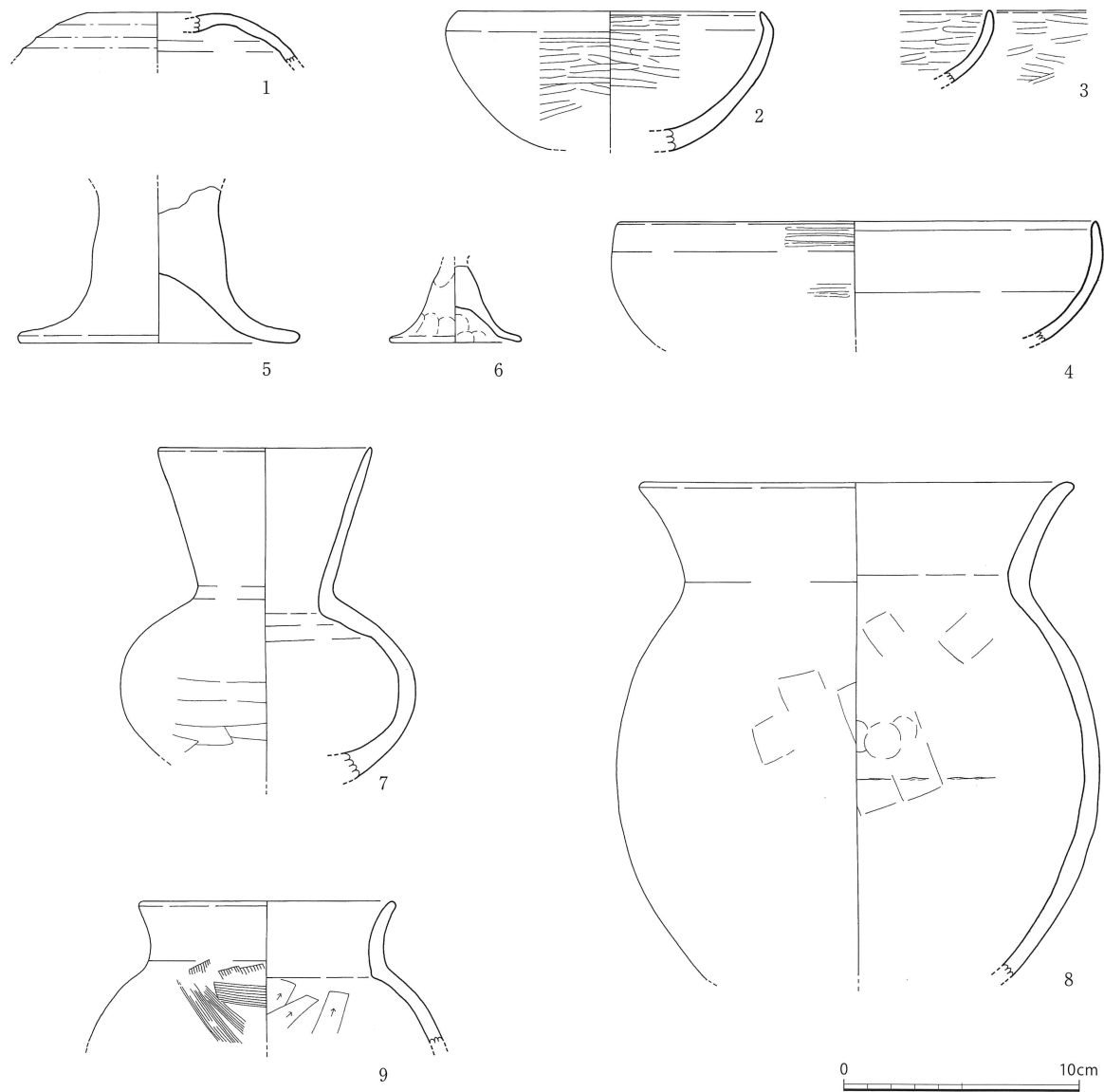
1. 暗茶褐色粘質土層 (2mm～2cm大の焼土片を多数と炭片含む)
この層中に多くの土器片含む、カマド破壊後の埋土
2. 赤色焼土硬化層
カマドの床を固めた土か
3. 暗褐色軟質砂質土 (くらい、炭・焼土片少ない)
4. 暗褐色軟質土 (0.5cmの焼土を多く含む)
土器片はほとんど含まない、カマドの床土



カマド完掘状況



第8図 SH01竈の状況

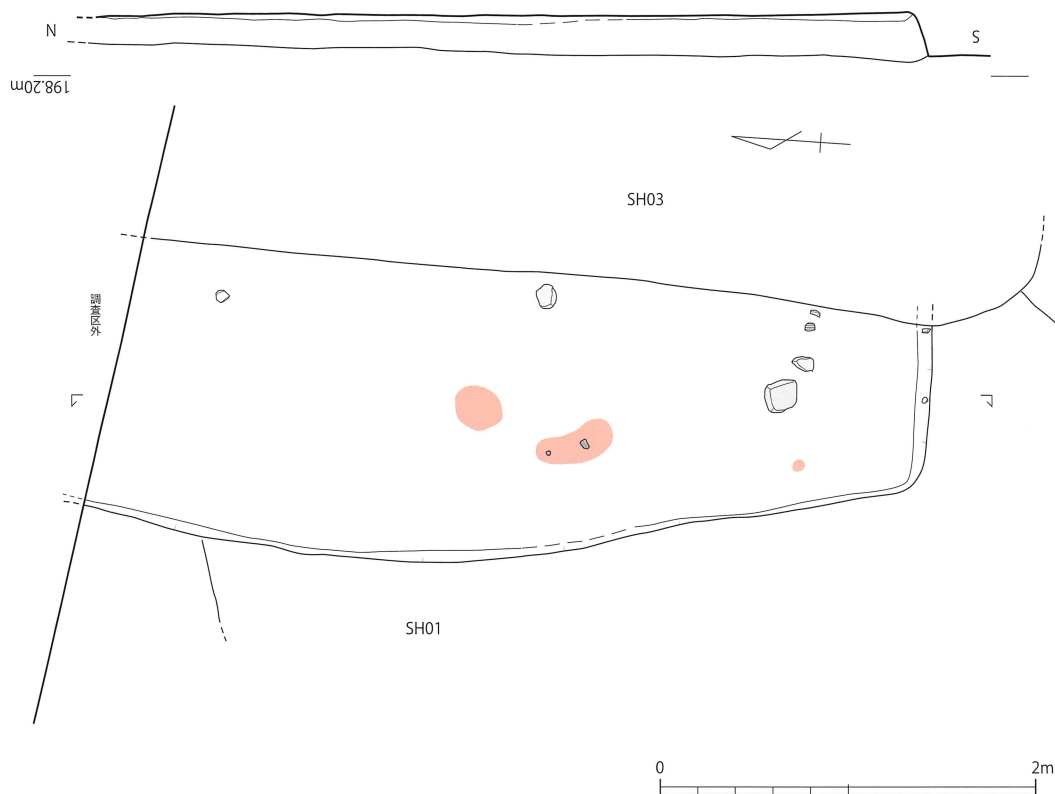


第9図 SH01出土遺物

□SH02 (第10図)

調査区の北側で確認された竪穴建物で、SH01を切っているが、SH03に切られているため、残りはわずかで、全形をうかがい知れない。南北方向に4.6m、東西方向で1.6mのみ残存している。竈などの施設も確認できず、床面でわずかに焼土が確認されたに過ぎない。深さは0.2mほどである。

出土遺物も図示できるものはなかった。



第10図 SH02

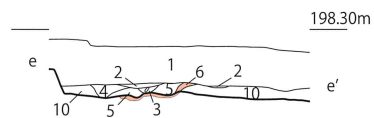
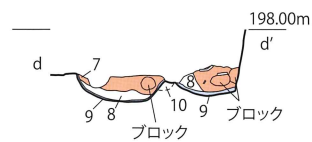
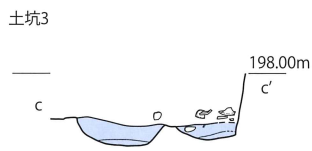
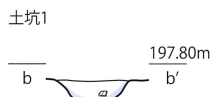
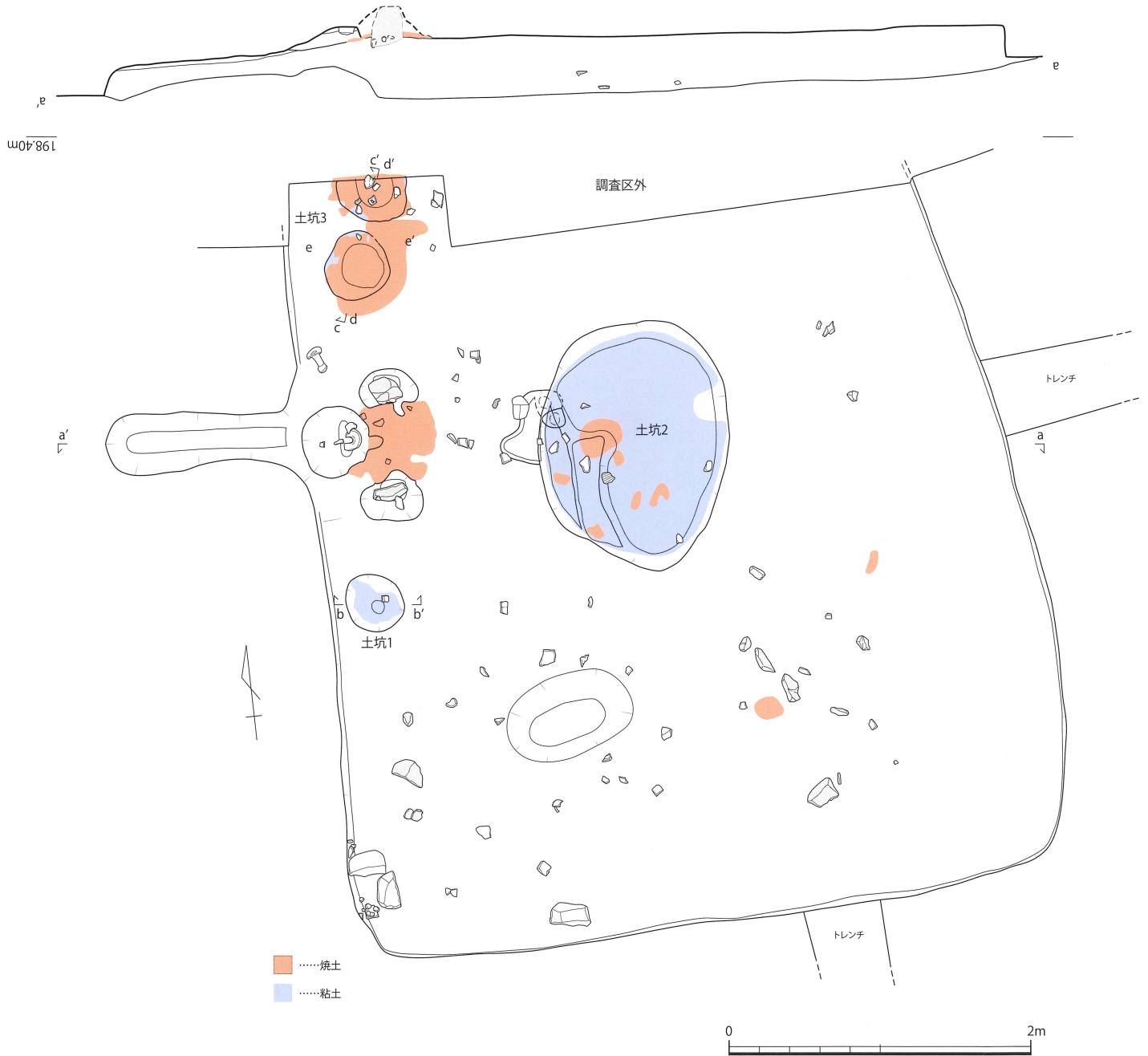
□SH03 (第11図)

調査区の北側で確認された竪穴建物で、SH02を切っている。また、北側の一边ははわずかに調査区外となる。東西方向に4.8m、南北方向には4.7+a mとなる。深さは残りの良いところで0.4mほどである。西側の壁際に煙道部を長く伸ばす竈が確認された。また、竈の南側には直径0.4m、深さ0.1mの土坑(土坑1)、床面のほぼ中央部の貼床下からは南北1.5m、東西1.2m、深さ0.3mの楕円形の土坑(土坑2)が確認された。また、竈の北側には竈のように被熱を受け赤化した部分が広がっており、あるいは別な竪穴建物が切り込んでいた可能性もあるが、プランとしては確認できなかった。

主柱穴も含め、柱穴はまったく確認できなかった。

竈は、凝灰岩製の袖石と、それに横架する架構材が残されていたが、大部分破壊された状況であった。焼き口部の床面は0.5m四方で硬く赤化しており、そこから西側に向けて約10°の傾斜を持ちながら幅0.6mで約1.2mの煙道が伸びていた。煙道部はつぶれており、焼土が部分的に堆積した状況であった。

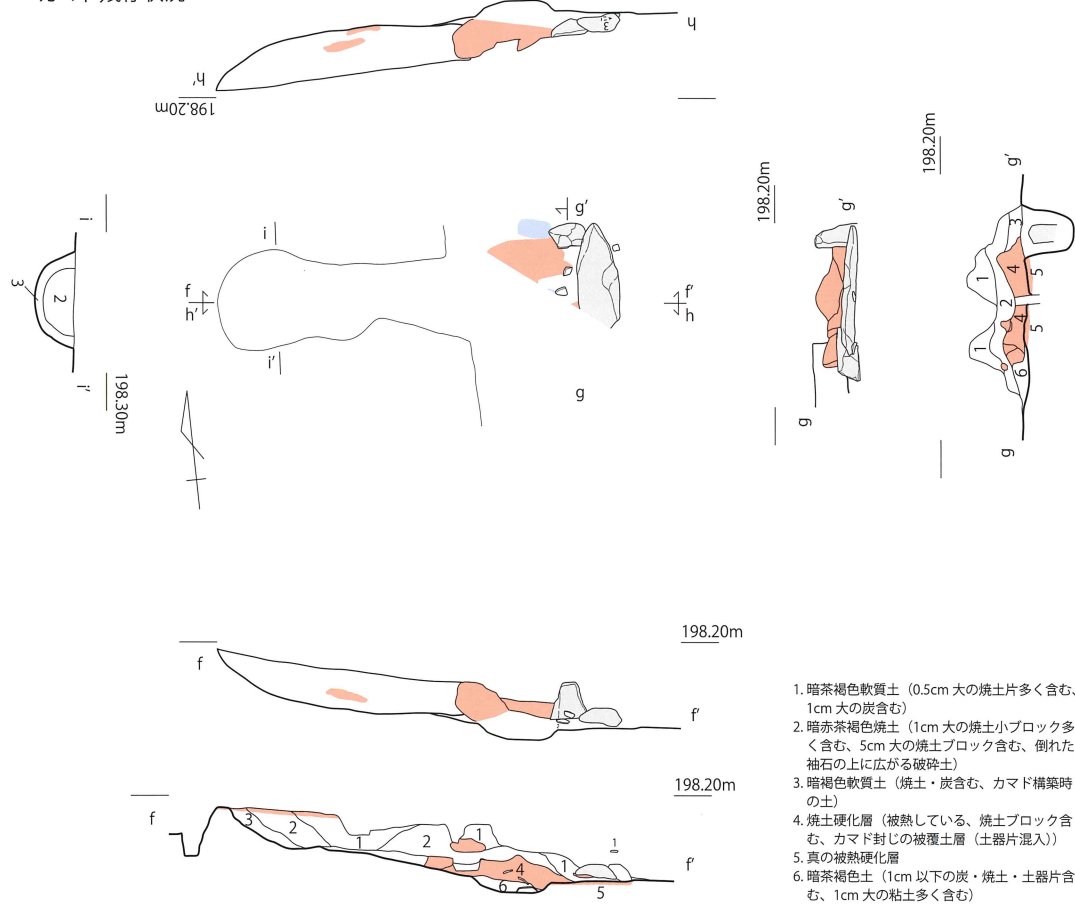
出土遺物は第13図10から24で、10から12は須恵器坏蓋、13と14は坏身である。10の天井部は回転ヘラ切り未調整。13の身も底部は回転ヘラ切り未調整。14はヘラ調整を行っている。15は須恵器の口縁部である。器種は不明。16から24は土師器である。16は口縁端部を小さくつまみ上げる椀。17と18は高坏である。須恵器高坏を模倣したもので、坏部には段を有し、裾部が大きく開く中実の長脚となる。19は在地の胎土で、内面にヘラミガキがある。鉢のような形になるものか。20から24は甕である。胴部内面はヘラ調整、あるいはヘラ削りとなる。



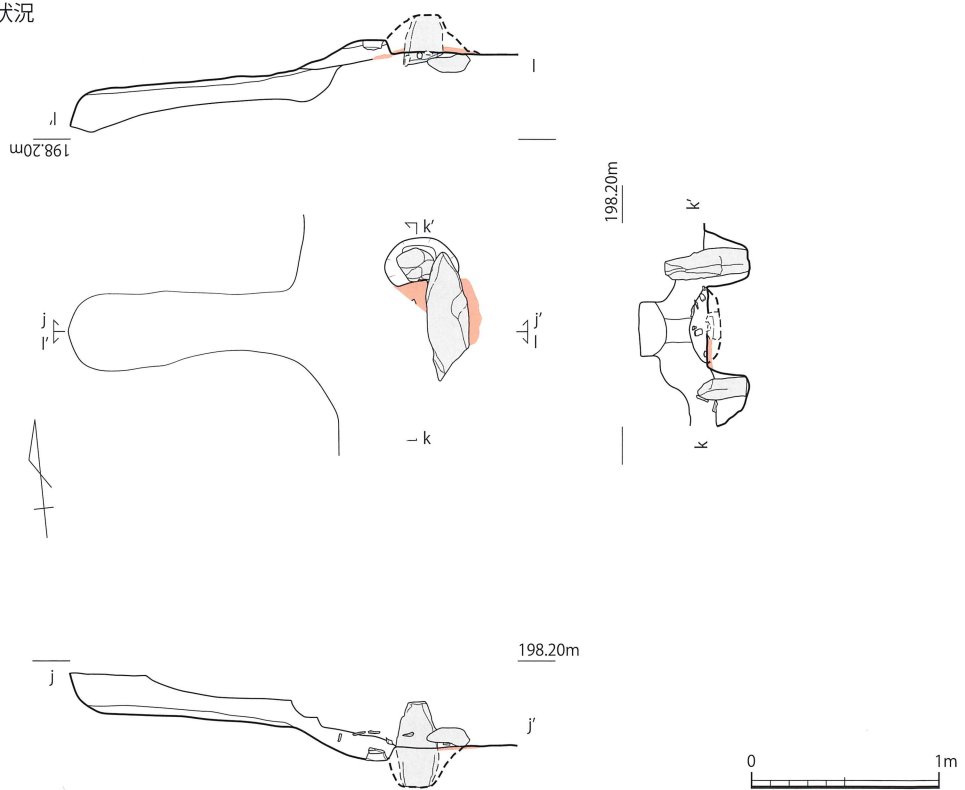
1. 暗茶褐色土 (粘質あり、微細な焼土 (赤色粒子)・白色粒子多く含む、地山レキ (小石) 含む)
2. にぶい黄褐色土 (粘質あり、微細な焼土 (赤色粒子)・白色粒子少量含む)
3. 褐色土 (粘質あり、微細な焼土 (赤色粒子)・炭・土器片含む)
4. 暗褐色土 (粘質あり、微細な焼土 (赤色粒子) 少量含む)
5. 暗褐色土 (粘質あり、1~10mm 大の焼土 (赤色粒子) 多く含む)
6. 褐色土 (粘質あり、1~3mm 大 (赤色粒子) 多く含む)
7. 暗褐色土 (粘質あり、硬くしまる、10cm 大の暗褐色ブロック土含む、1~10mm 大の焼土非常に多く含む、1~2mm 大の炭含む)
8. 暗褐色土 (粘質あり、1~5mm 大の焼土含む)
9. にぶい黄褐色土 (粘質つよい)
10. 暗褐色土 (粘質あり、1~2mm 大の焼土 (赤色粒子) 多く含む)

第11図 SH03

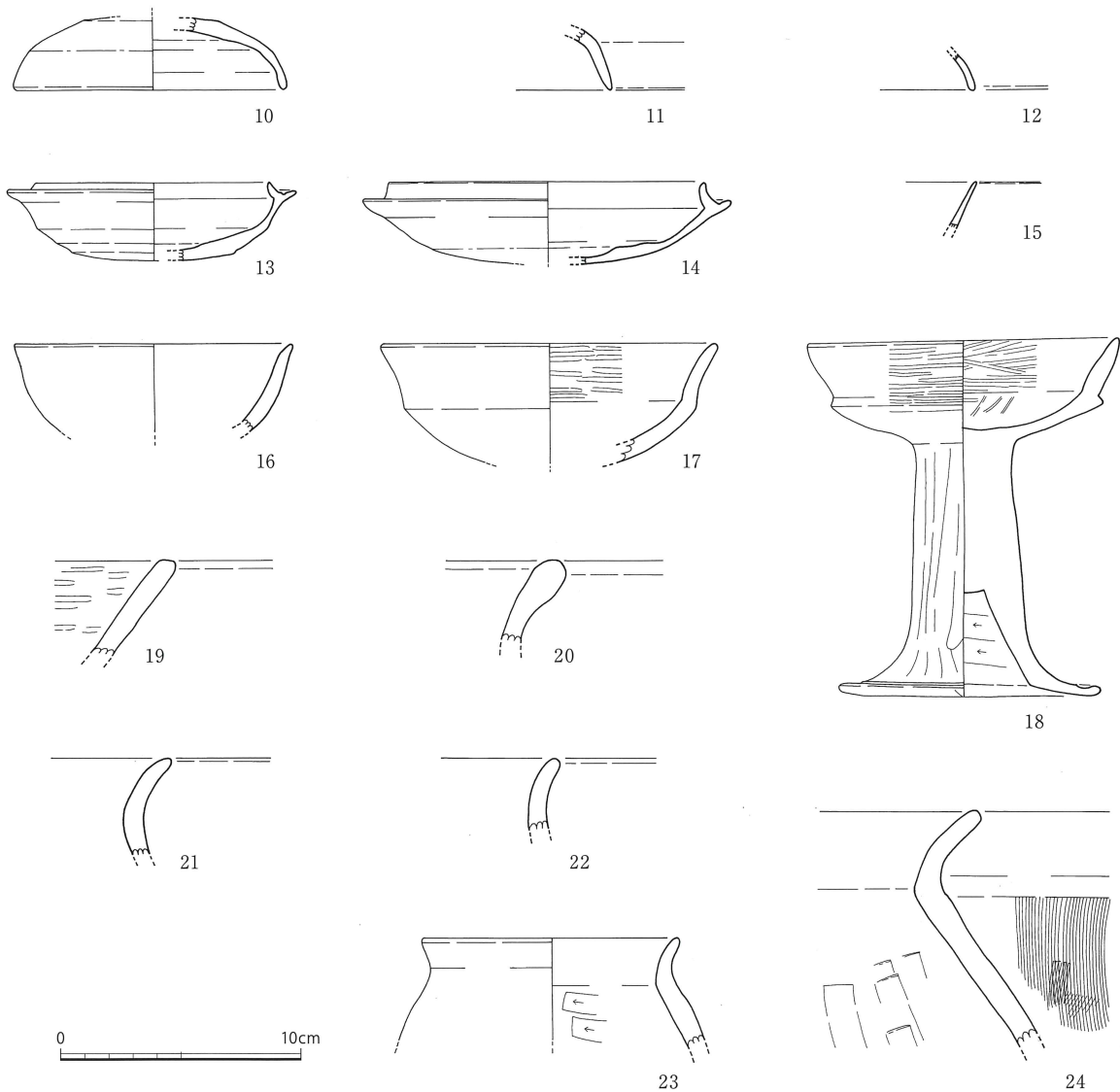
カマド残存状況



カマド完掘状況



第12図 SH03竈の状況



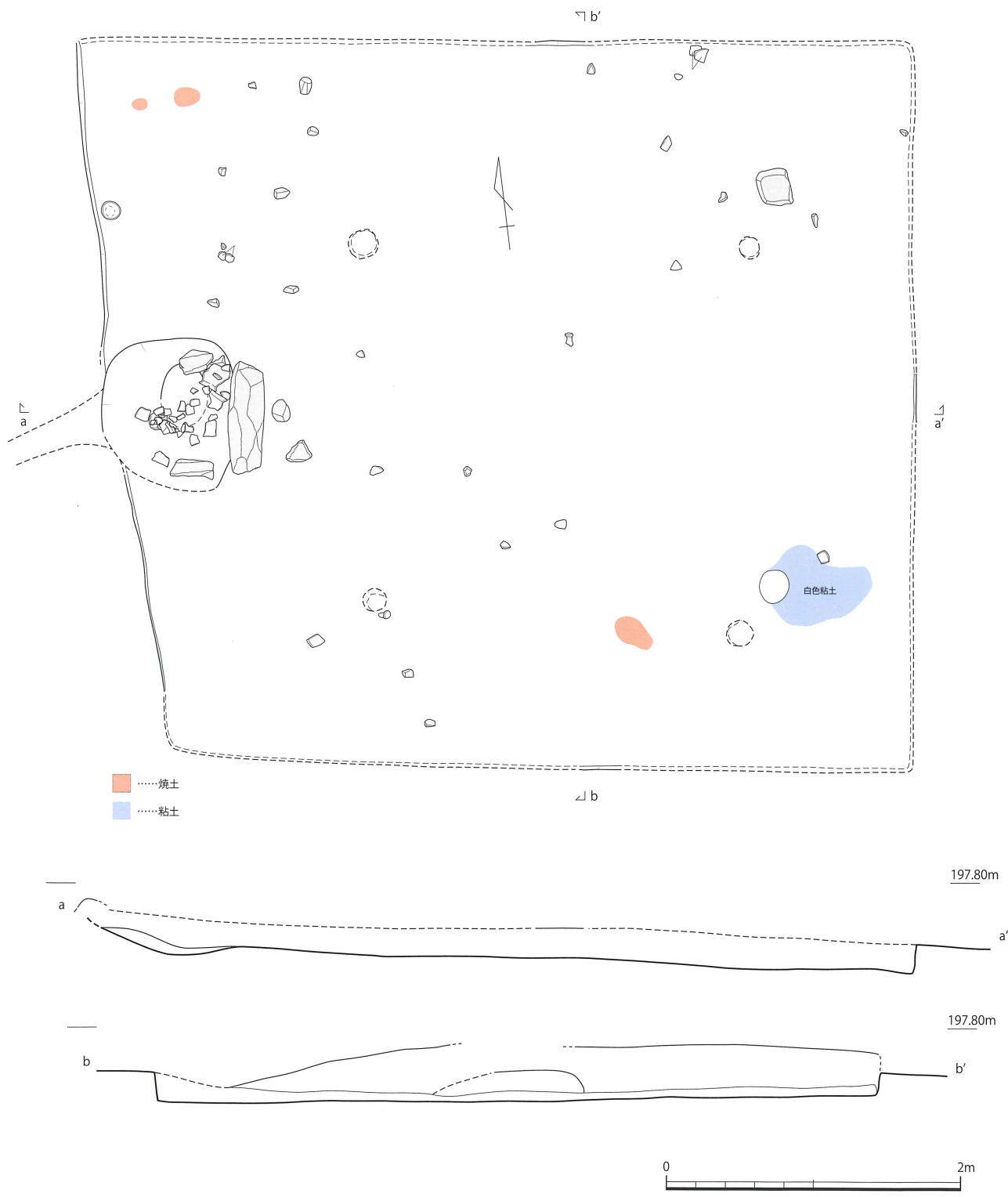
第13図 SH03出土遺物

□SH04 (第14図)

調査区の北東側で確認された竪穴建物である。竈があることによって竪穴建物の存在がわかったが、地山である黒褐色粘質土と遺構埋土の峻別ができず、プランの検出が困難を極めたため、掘方は推定ラインにならざるを得なかった(土層断面により推定)。推測で南北4.8m、東西5.3m、深さは0.15mとなる。西側には竈が敷設され、床面の南東側には白色粘土が置かれていた。

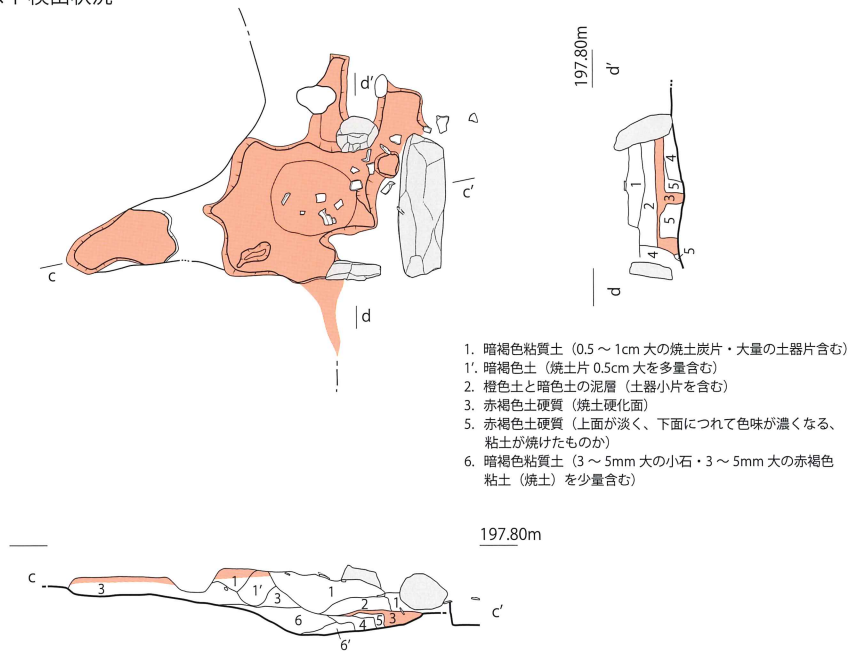
柱穴は確認できなかった。

出土遺物は16図25から35で、35を除きすべて土師器である。25は口縁部を小さく外反させる椀である。26も体部中程から外反する。27から29は高坏である。27は須恵器模倣の高坏で、28と29は前時期から系譜を追える高坏となる。30は甑の口縁部、31は胎土が在地系で、鉢のような形のなるものか。32と33は甕、34は甑の把手である。32は長胴と考えられるが、33は球形胴を呈している。35は結晶片岩製のもので、両刃となる石器である。弥生時代の混入品であろう。

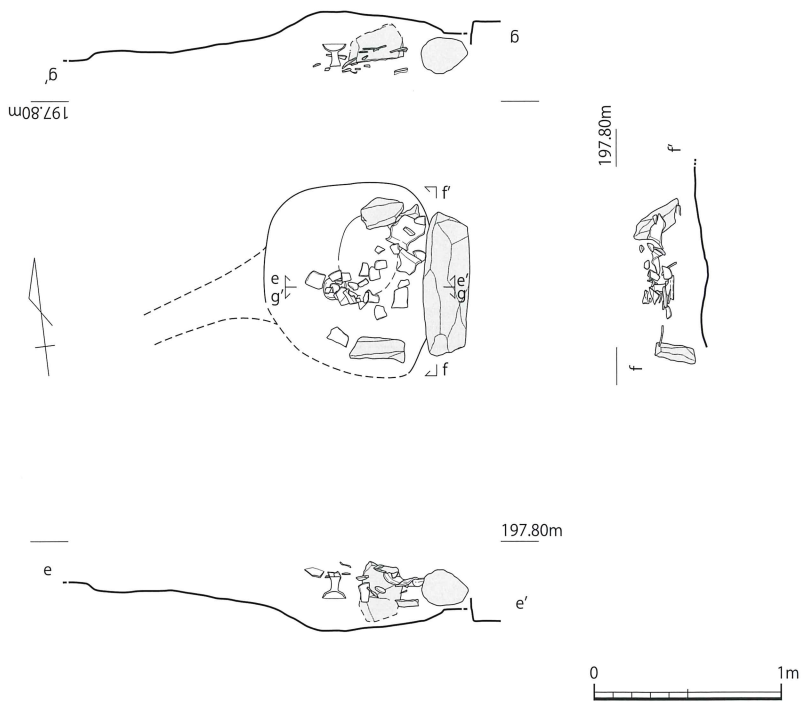


第14図 SH04

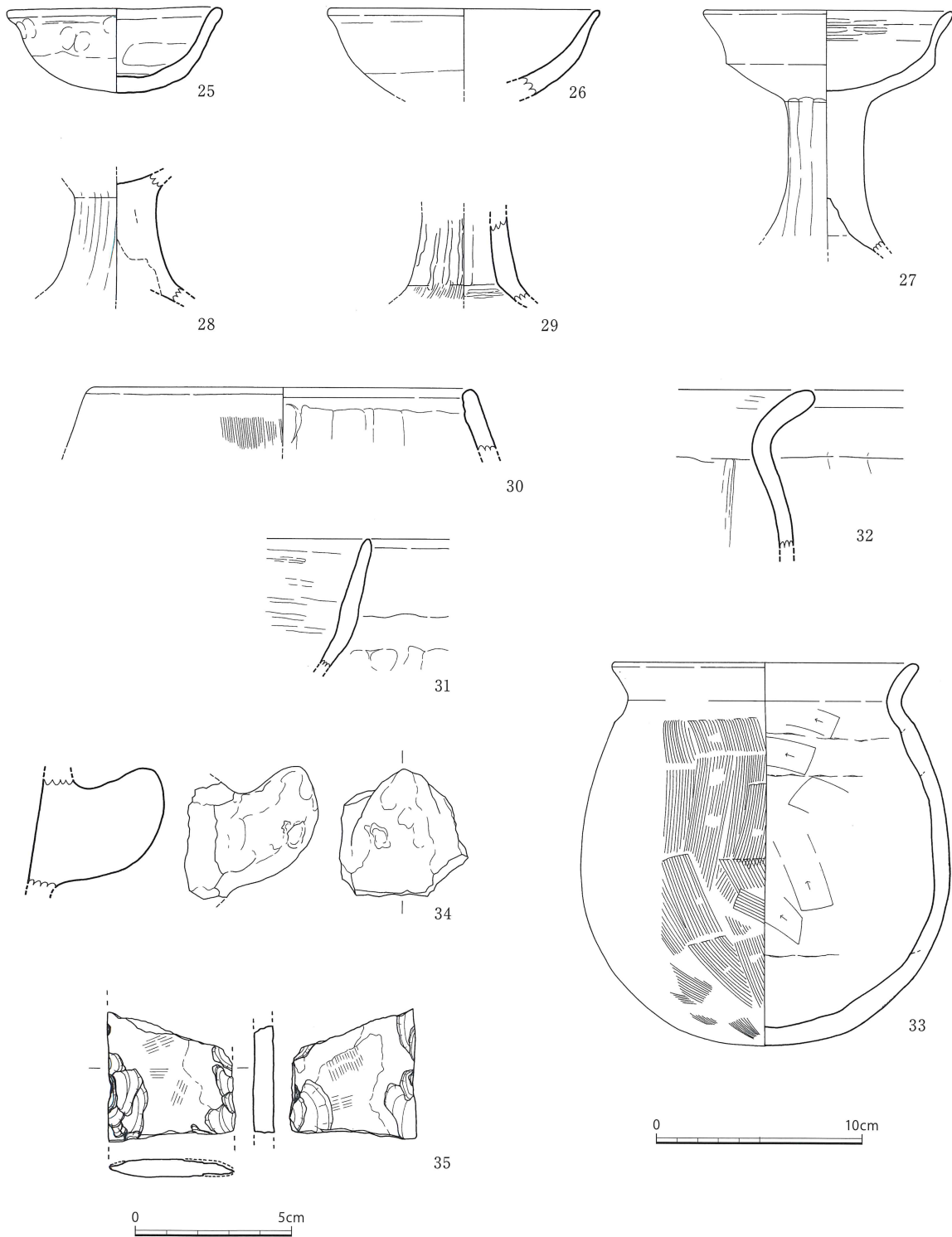
カマド検出状況



カマド完掘状況



第15図 SH04竈の状況

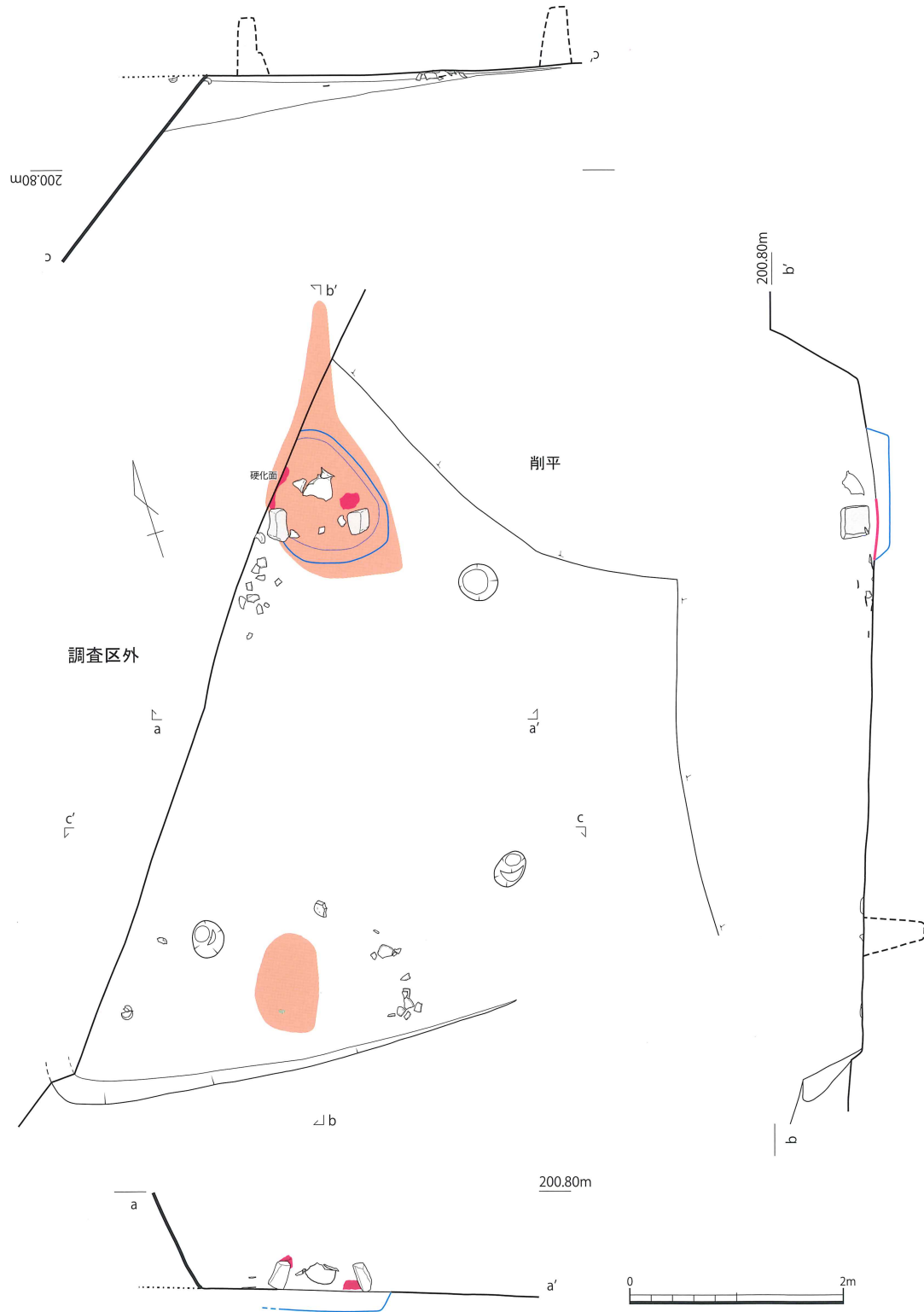


第16図 SH04出土遺物

□SH05 (第17図)

調査区の西壁に半分以上入り込む形で検出された竪穴建物である。南側の壁がごくわずかに残存していたが、南東のコーナー部から東壁は残っていない。北側には竈が残っていた。

竈は、ほぼ1m×1.4mの範囲に焼土が分布し、その下には1m×1.2mで、深さ0.2mほどの楕円形の掘方がある

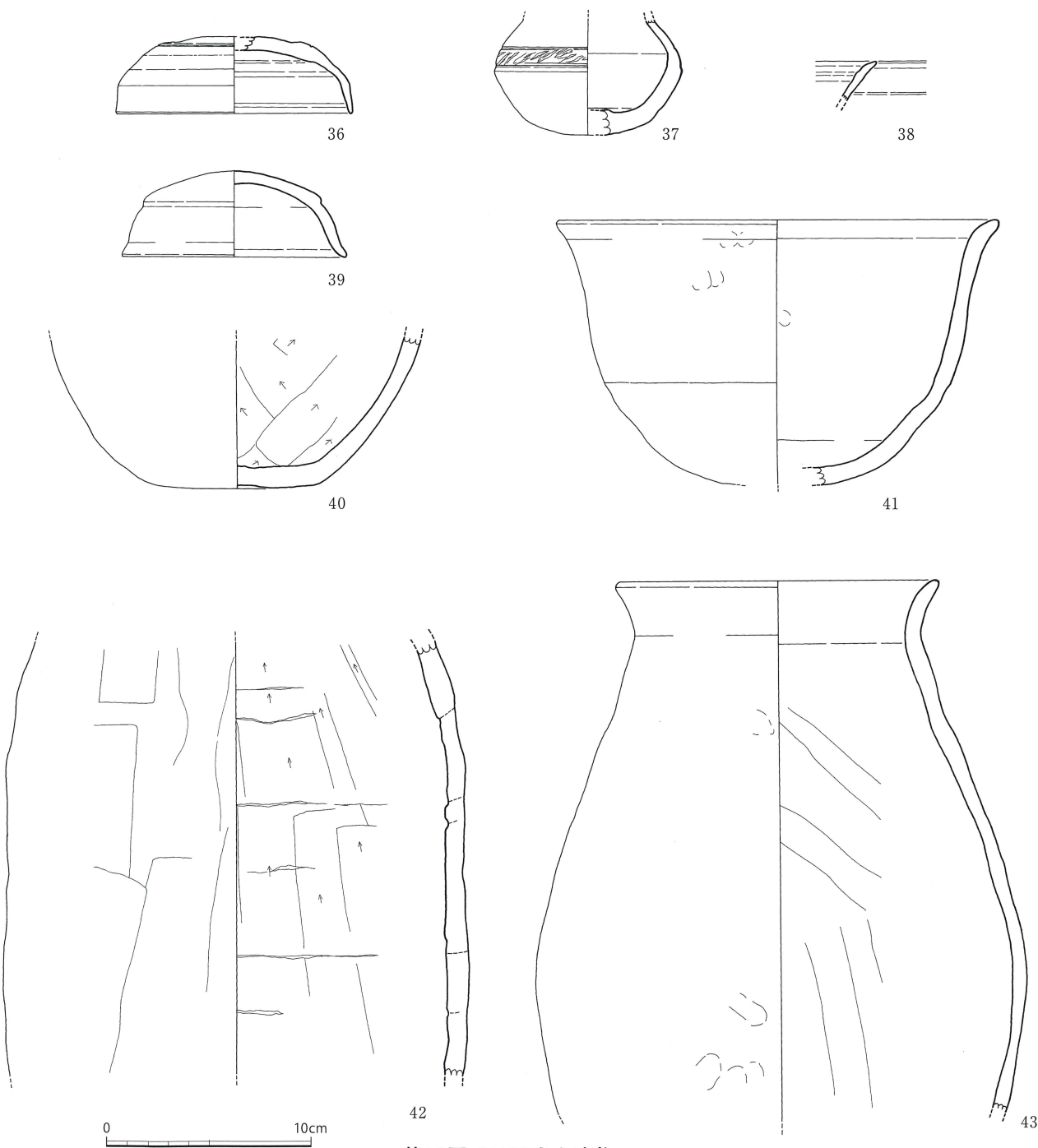


第17図 SH05

り、床面が一部被熱で硬化していた。また、凝灰岩が袖と考えられる位置に残されていたが、粘土などの構築材は確認されなかった。また、煙道部とみられる焼土が壁に伸びていたが、掘り下げはできなかつたため構造は不明である。

柱穴は3ヶ所で確認されたが、調査区外に1ヶ所あると考えられるので、4本柱穴の建物となろう。

出土遺物は第18図36から43で、36から38が須恵器、39から43が土師器である。36は口縁部内側にわずかに稜線を有し、天井部はヘラ切り離しのままの坏蓋である。37は甗で、胴部に櫛状工具による連続文がある。38は壺の口縁部か。39は須恵器模倣の土師器坏蓋で、天井部と口縁部の境に段を有する。41は鉢、42と43は長胴の甕である。40も甕の底部か。

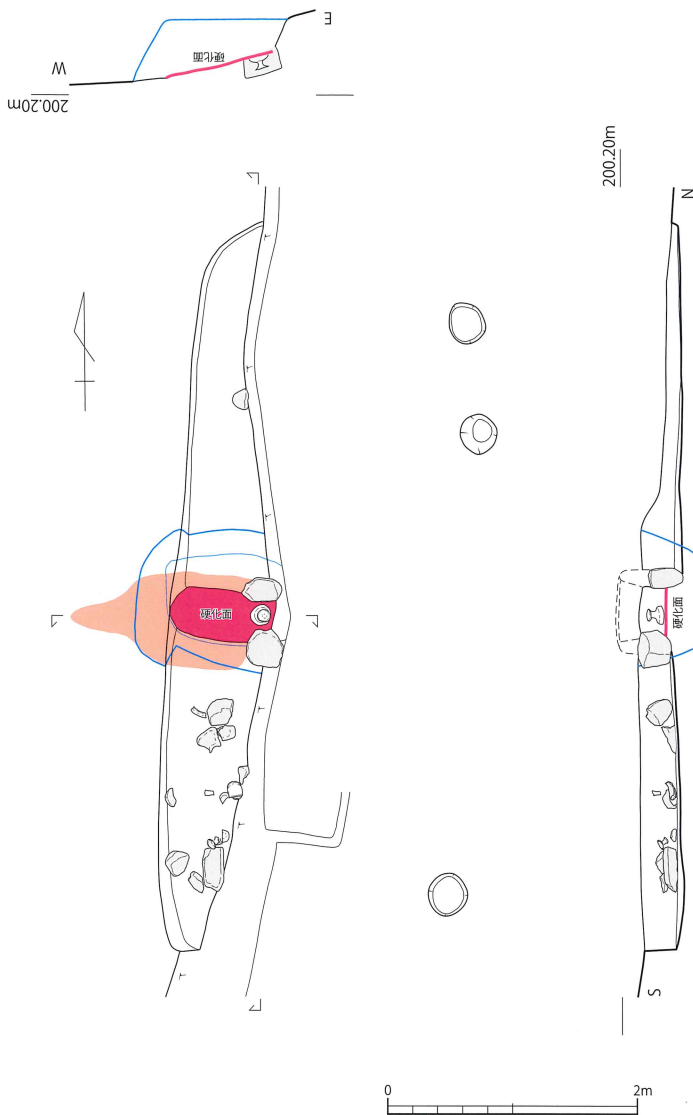


第18図 SH05出土遺物

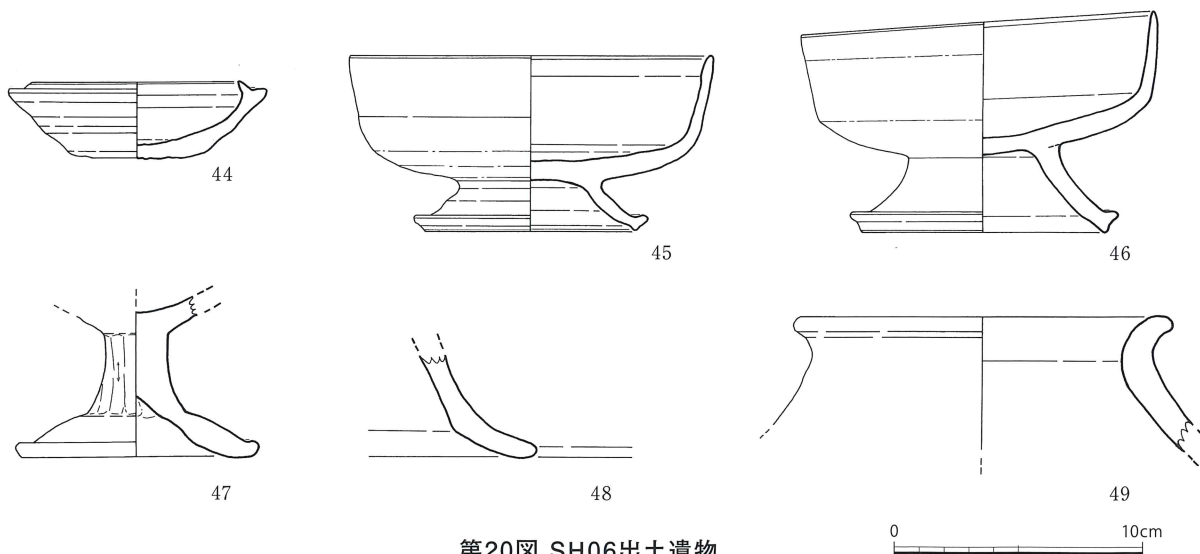
□SH06 (第19図)

調査区のほぼ中央で確認された竪穴建物である。後世の段落ち(おそらくは調査前まで存在した畑を造成した際の段)に大部分が削平され、竈と西壁が残されていただけであった。かろうじてコーナー部がとらえられ、それによると南北は6.0mほどの竪穴建物となる。竈は焚き口の手前まで削平されながら、上部は削られていたが本体は残されていた。袖石の一部が両側にあり、それに挟まれた0.4m×0.9mの範囲が被熱で硬化しており、そこに低脚の須恵器高坏が伏せて置かれていた。硬化面は徐々に上向きになり、煙道部につながっていた。ただし、煙道部は破壊されており、部分的に焼土が残っている状況であった。青のラインは竈構築時の掘方である。

僅かに残された床面からは、須恵器などの遺物が出土している。第20図44から49が出土遺物である。44から46須恵器、47から49が土師器である。44は坏身で、底部は回転ヘラ切りである。45と46は低脚の高坏である。脚部先端が、外上方に小さくつまみ上げられる。47と48は土師器の高坏。47は柱状の脚部で裾部が大きく開く。48は「ハ」字状に開く脚部である。49は口縁部が外反しながら小さく開く口縁部で、壺になると思われる。



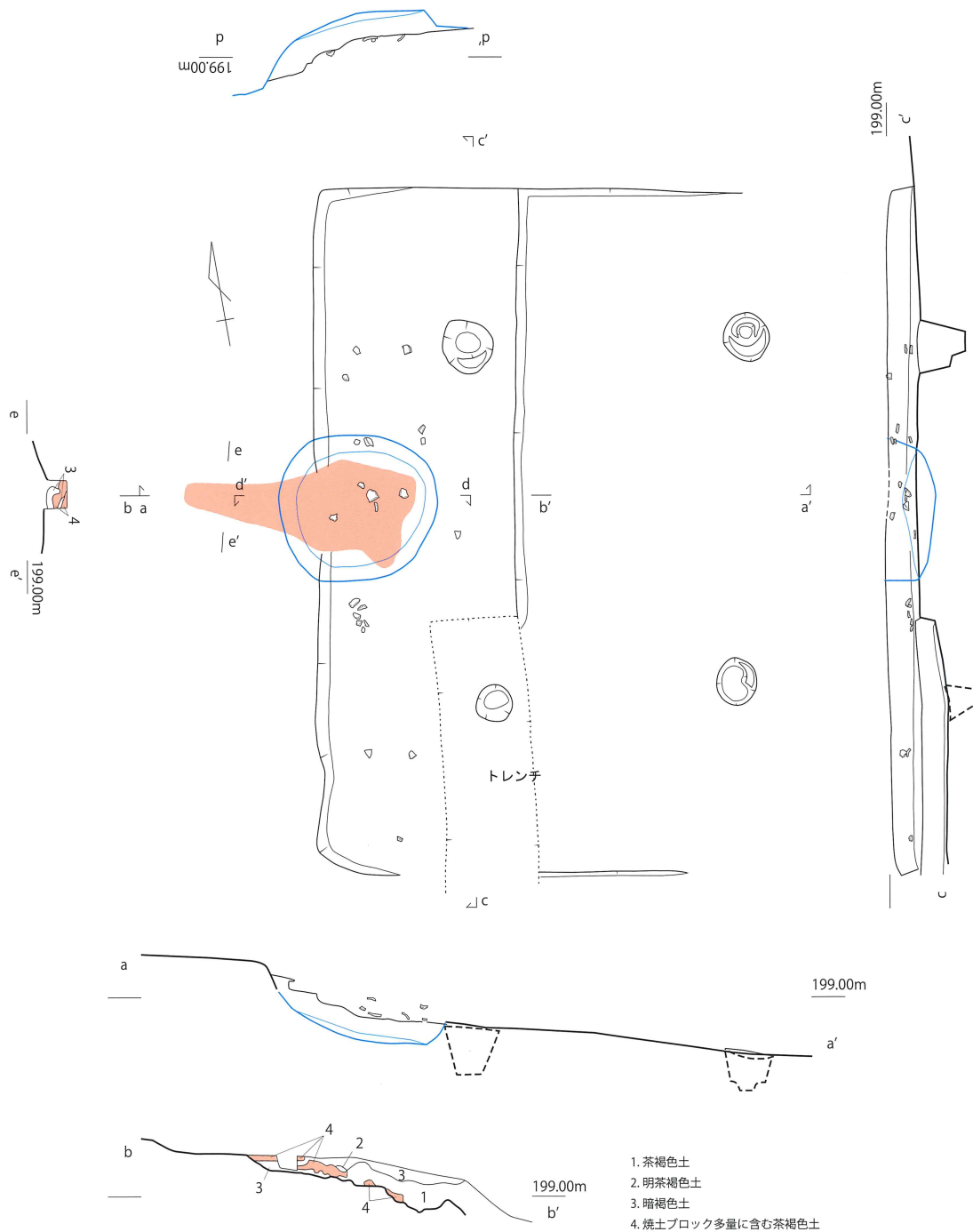
第19図 SH06



第20図 SH06出土遺物

□SH07 (第21図)

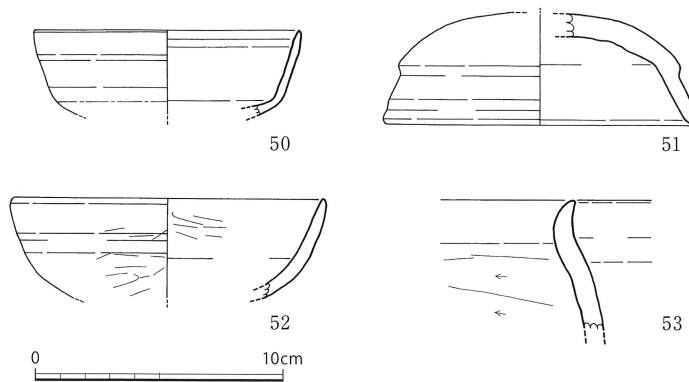
SH06の東側で確認された竪穴建物である。傾斜の下側(東側)は削られ、壁は残っていない。規模は南北方向は6.0mである。深さは0.25mほど残されている。西側の壁中央部には竈があるが、ほとんど壊されて焼土が図のように広がっているのみである。煙道部があるが、僅かに焼土が残されているのみであった。主柱穴は4カ所確認された。また、床面は西側の2本を含む部分が数cm高く、ベッド状になっていた。これは後述のSH11やSH14でも同様に認められた。



第21図 SH07



出土遺物は第22図50から53である。50は須恵器高坏の坏部で、口縁端部が細くなる。51は土師器坏の蓋である。天井部と口縁部の境に段差がある。52は土師器碗で、内外面ともミガキが見られる。53は甕の口縁部である。

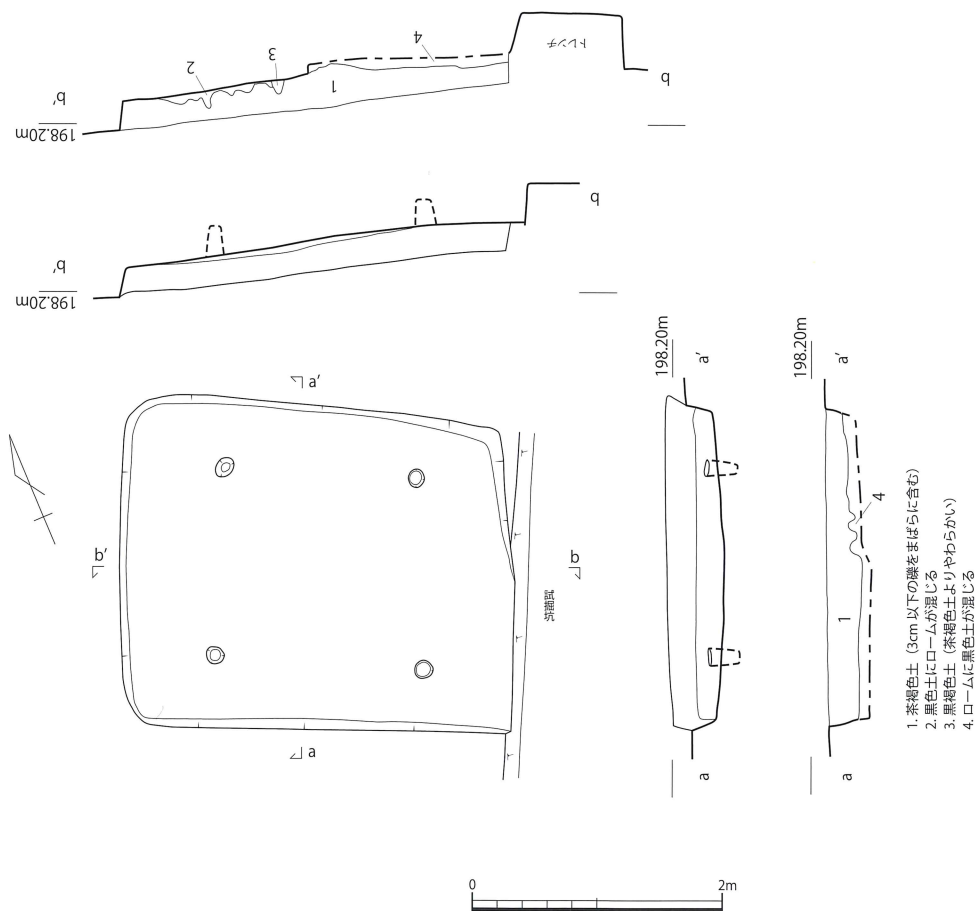


第22図 SH07出土遺物

□SH08 (第23図)

今回の調査では最も小型の竪穴建物である。長軸3.1m、短軸2.5mで、深さは0.2m程度である。床面には小さな柱穴が4カ所認められた。

この竪穴建物からは、図化できる遺物は出土しなかった。

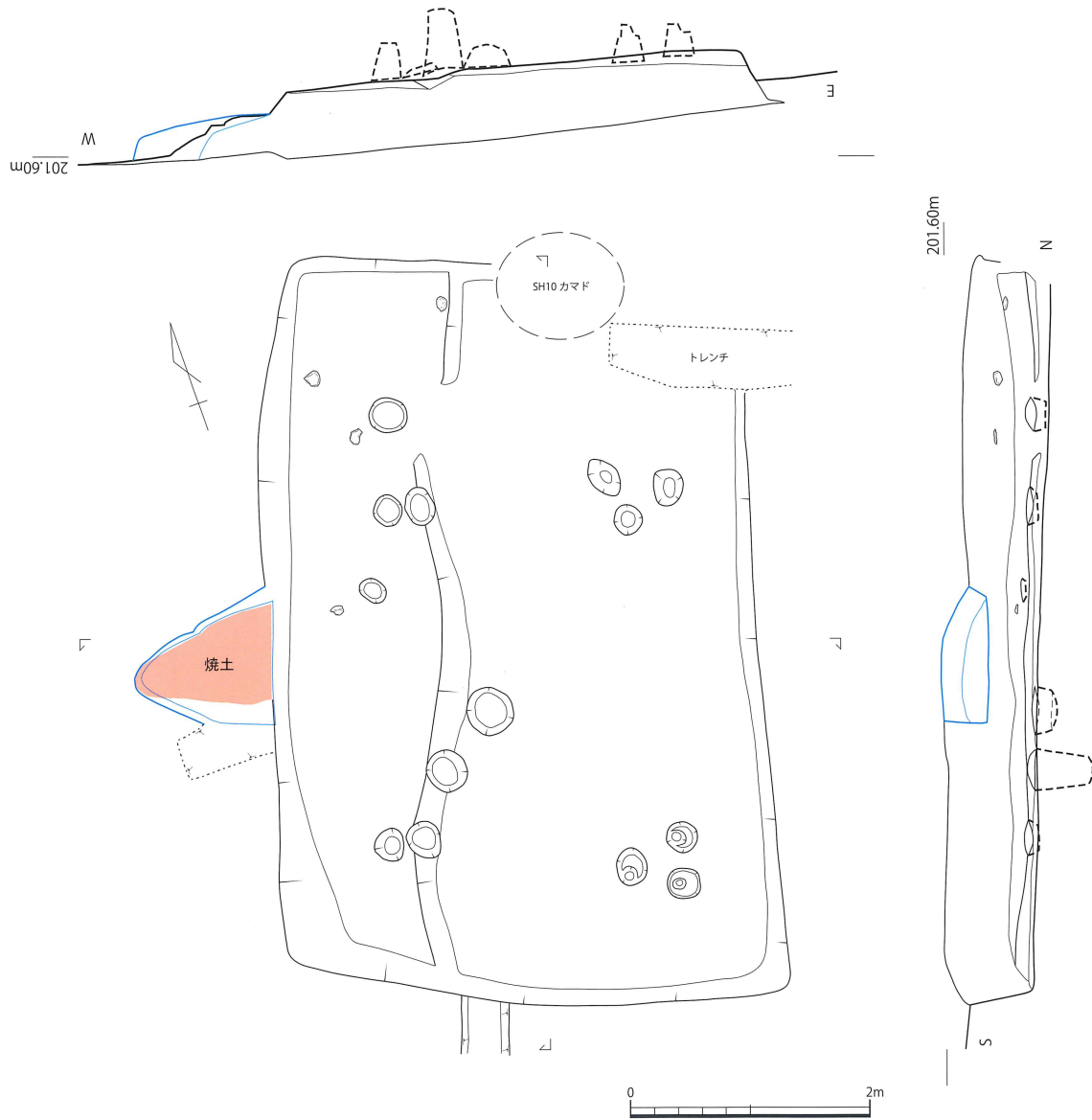


第23図 SH08

□SH09 (第24図)

調査区の南西部で確認された竪穴建物である。SH10によって大部分切られており、竈部分も焼土の広がりによってその存在が押さえられるほどであった。床面は、竈側（西側）が一段高いベッド状となっている。柱穴は多く確認されているが、明確に支柱穴と捉えられる深い柱穴は揃わない。

出土遺物は第25図54から56で、54は須恵器坏蓋、55は須恵器坏身で、底部はヘラ切り離し未調整である。56は土師器高坏の坏部である。口縁部と底部の間に段が付く。



第24図 SH09

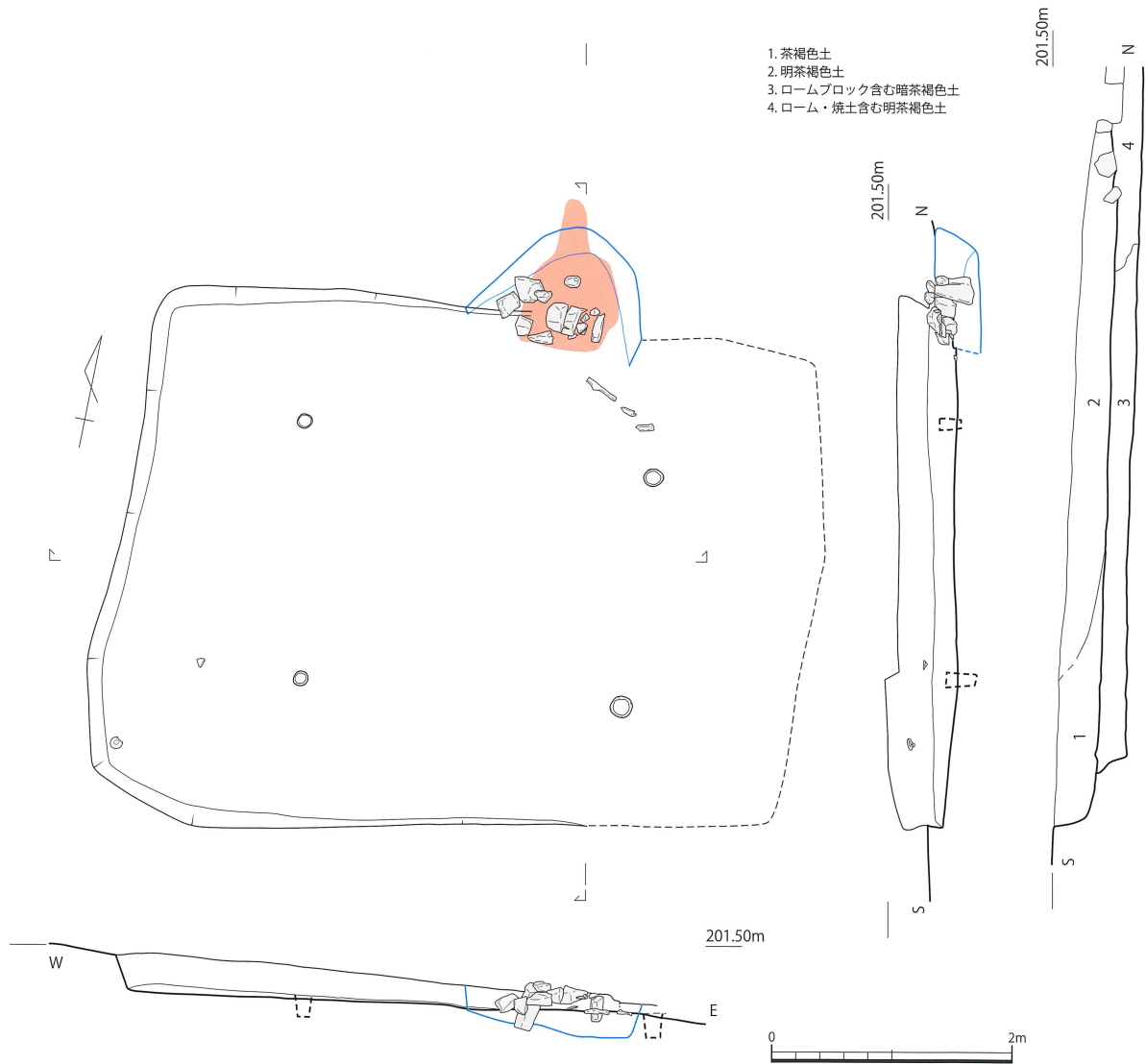


第25図 SH09出土遺物

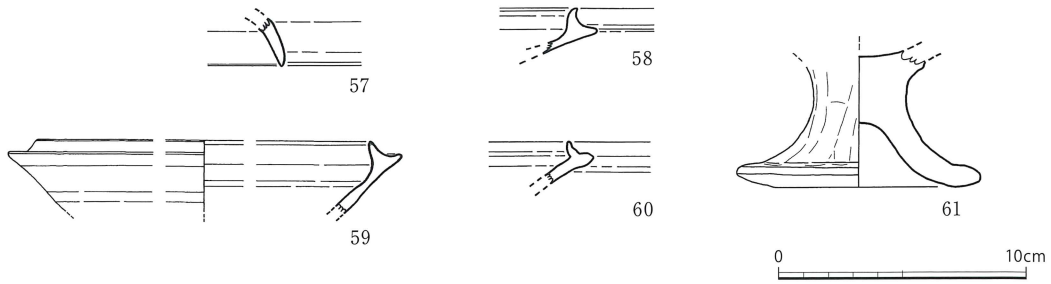
□SH10 (第26図)

SH09を大きく切って作られた竪穴建物である。北側の壁際に竈がある。この遺構はSH09と合わせ、竪穴部の掘り込みが当初は全く確認できず、サブトレンチを入れても明確ではなかった。竈と考えられた焼土と礫群は確認できたことから、その南側でやや強引に線を引いたところがある。床面も硬化面は無く、断面でもわずかな土色の違いで押さえている。柱穴も4カ所で確認したが、やや小さく主柱穴とは言いがたい。

出土遺物は第27図57から61である。57は須恵器坏蓋、58から60は須恵器坏身である。61は土師器の高坏脚部である。



第26図 SH10



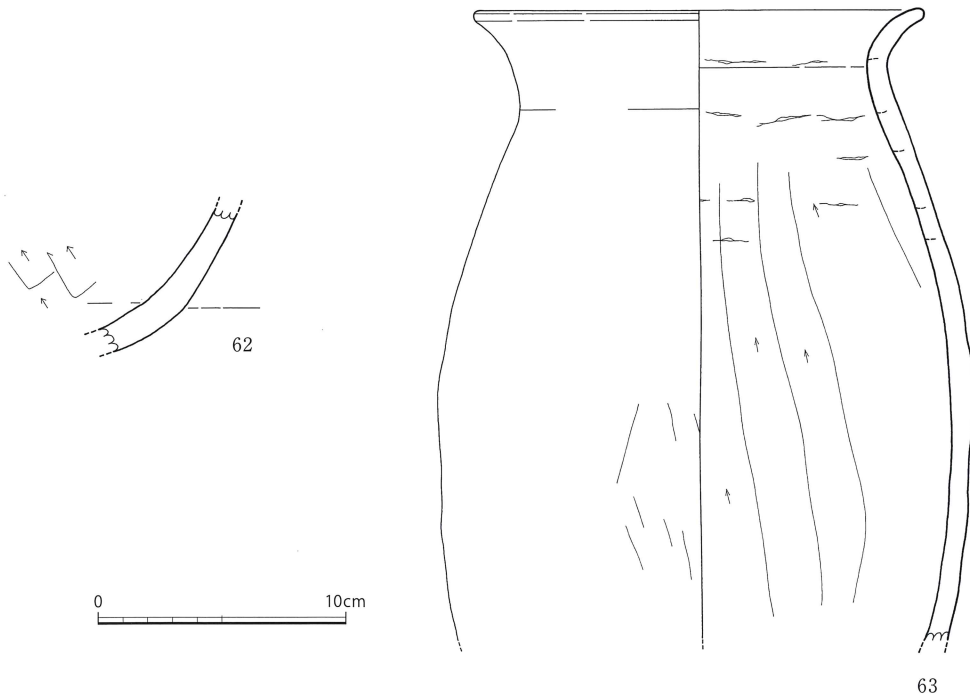
第27図 SH10出土遺物

□SH11 (第29図)

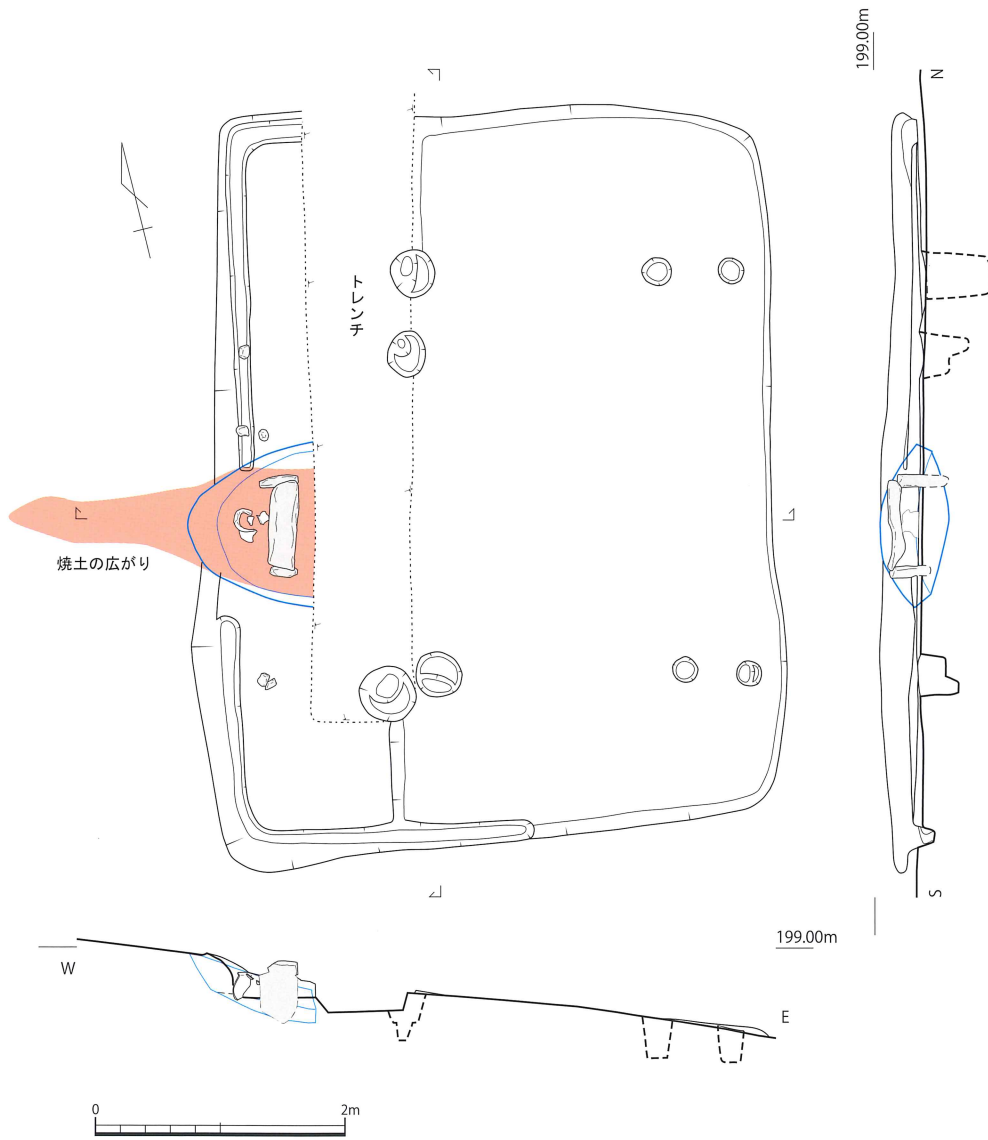
調査区南側で確認された竪穴建物である。南北方向に5.7m、東西方向に4.4mの長方形を呈する竪穴建物である。深さは、西側で0.2mほどで、東側はほとんど削平されている。また、竈は西側壁際にあるが、内側は試掘トレンチによって削られている。床面は、竈側が一段高く、ベッド状となる。柱穴は8カ所確認したが、4本主柱となるだろう。

竈は、両袖石と横架材の凝灰岩がそのまま残っており、焚き口部の上部には甕の上半部が支脚として据えられていた。焚き口部は赤化し硬化していた。袖部は粘土などは無く、煙道部も含めて壊されており、図のように焼土ブロックが広がっていた。図の青線は竈構築時の堀方である。

出土遺物は第28図62と63で、いずれも竈内に据えられていた土師器甕である。



第28図 SH11出土遺物

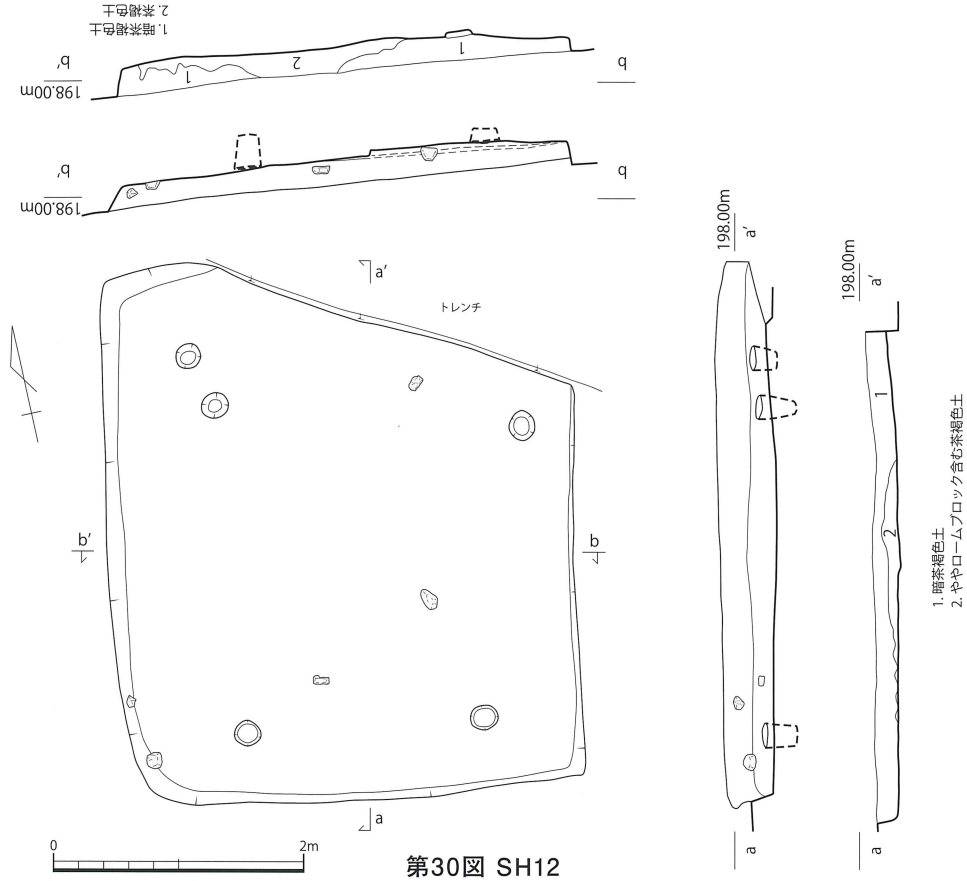


第29図 SH11

□SH12 (第30図)

調査区の南東部で確認された竪穴建物である。南北4.2m、東西3.8mで、深さは0.15mから0.2mである。北東部はトレンチで一部壊されている。竈や炉などは無く、支柱穴も明確でない。

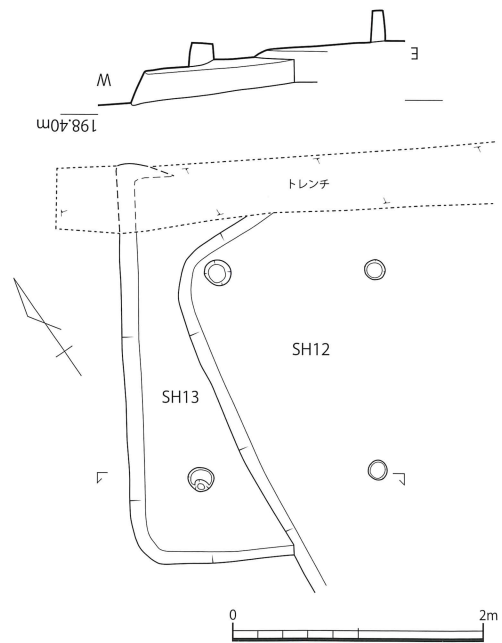
図化できる遺物の出土は無く、時期は不明である。



□SH13 (第31図)

SH12に大部分を切られた竪穴建物である。北側はトレンチのため不明であるが、南側のコーナー部は押さえられている。想定規模は、南北方向で3.0mと小型である。深さは0.2m程度である。床には4本の柱穴があり、4本支柱の建物と考えられる。

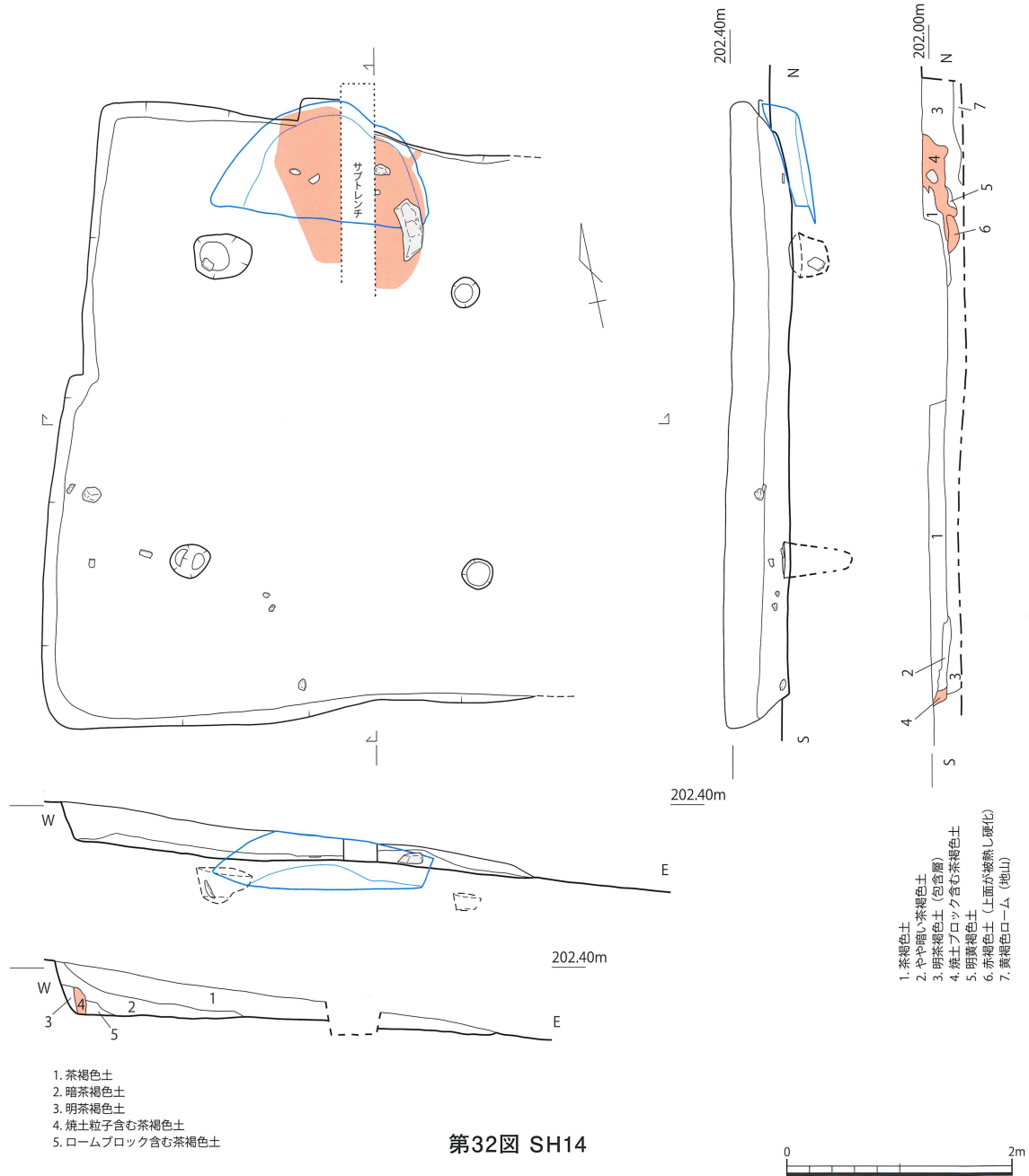
図化できる遺物の出土は無く、時期は不明である。



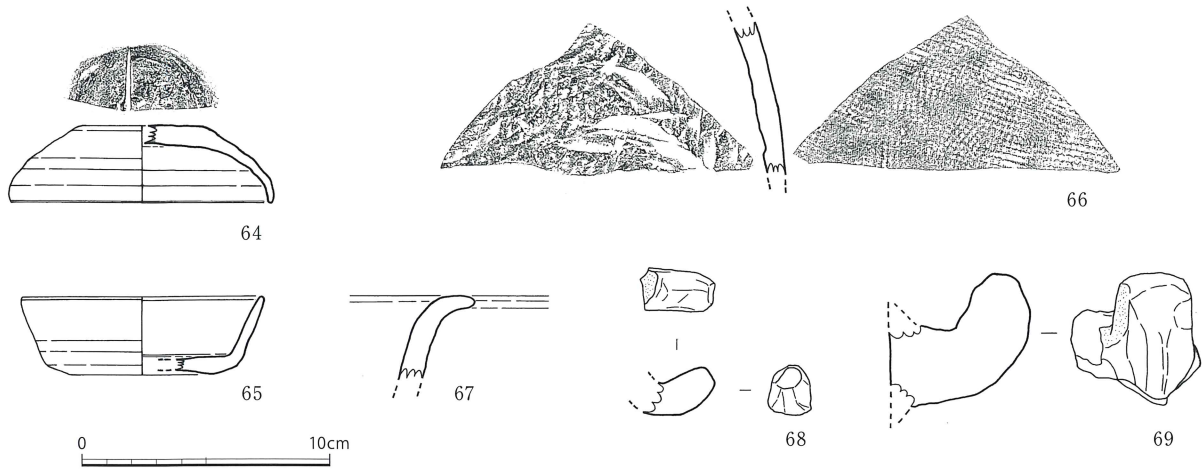
□SH14 (第32図)

調査区の南西部で確認された竪穴建物で、SH15とほとんど重なっている。当初は1軒の建物と思われたが、竈が2カ所あり、最終的には2軒の重なりと解釈した。SH14はSH15を切っている。大きさは南北5.2m、東西は復元すると5.0m程度となるだろう。床面には4カ所の支柱穴がある。

この建物は、調査の中で最初に掘り下げを行った箇所で、当初は古墳時代後期の建物を全く想定していなかったため、焼土部分にサブトレンチを入れ、結果的に竈を縦に半裁することになった。焚き口部の硬化面が皿状に検出されたことから竈と認識したが、袖部は壊されており、形状は不明である。出土遺物は第33図64から69である。64は返りのない須恵器坏蓋で、ヘラ切り後ナデ調整。65は坏身で、底部はヘラ切り未調整である。66は須恵器甕。67は土師器鉢か。68と69は土師器把手である。



第32図 SH14



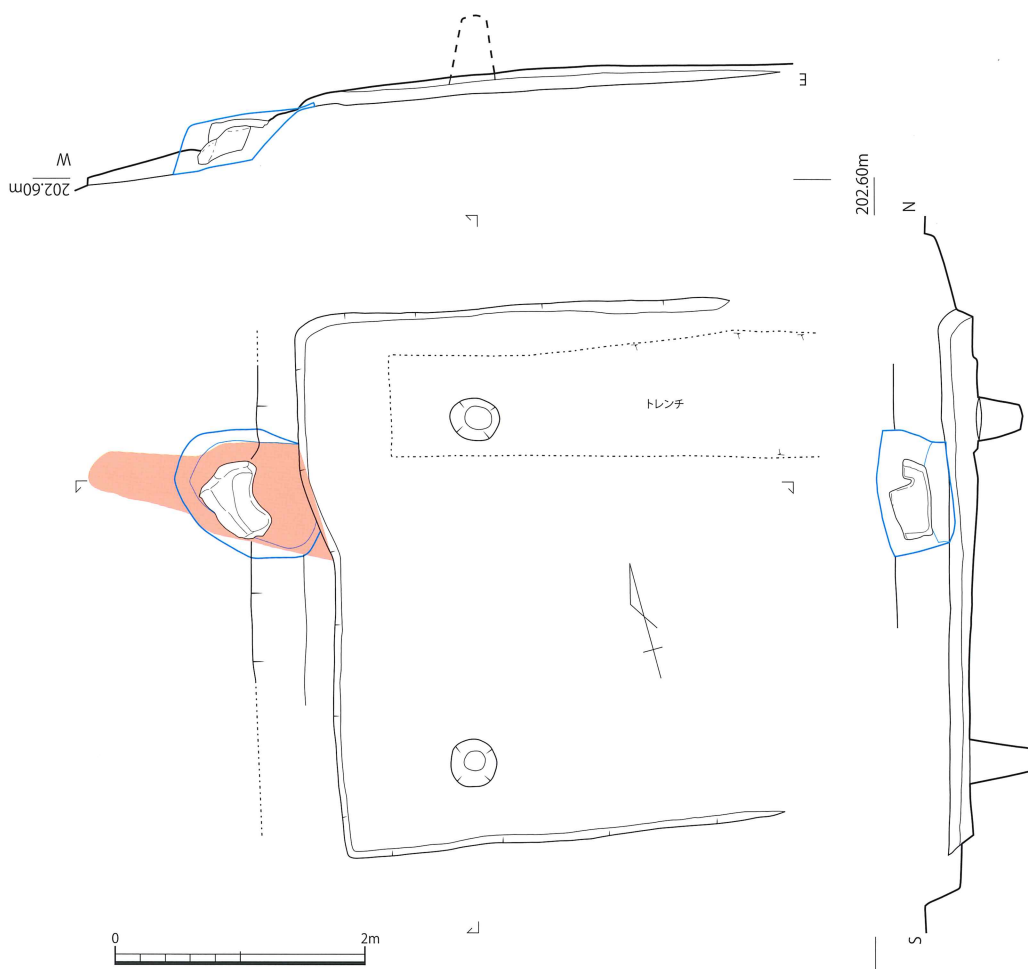
第33図 SH14出土遺物

□SH15 (第34図)

SH14とほぼ重なるように検出された竪穴建物である。遺構検出が非常に難しく、当初は西側にある焼土のみが確認でき、竪穴建物のプランはわからなかった。トレンチを設定し、掘り下げるなどしてようやく確認できたのが図のプランである。西側の竈部分が外側に出ているが、本来は一段高いベッド状の床がもう少し西側に広がっていたものと考えられる。

竈は壊されており、煙道部と思われる突出部も含めて、焼土塊の広がりが確認できたのみである。

図示できる出土遺物は無かった。

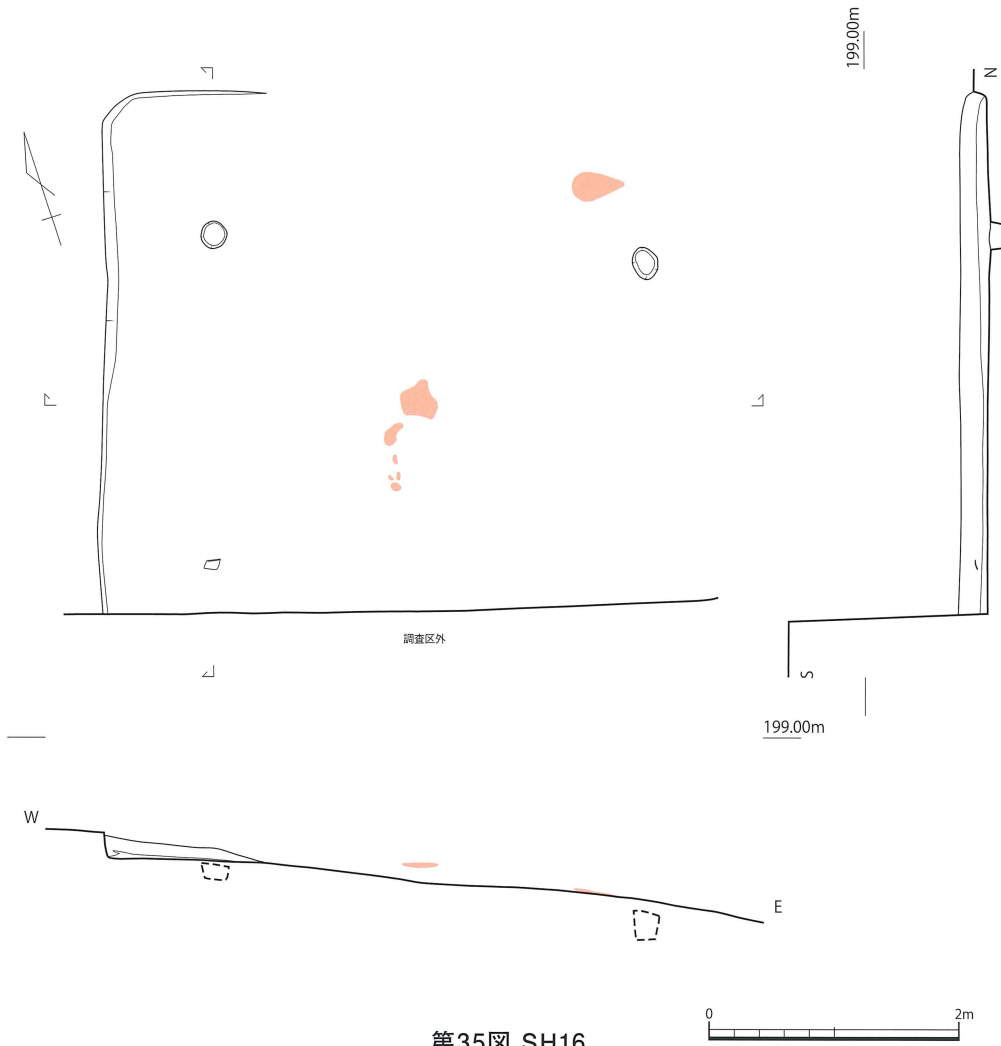


第34図 SH15

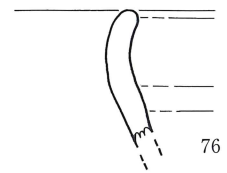
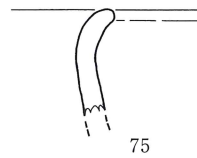
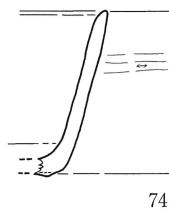
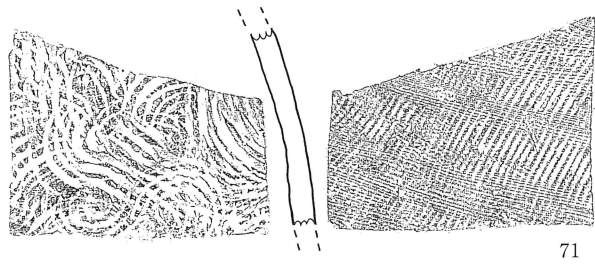
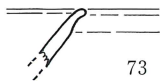
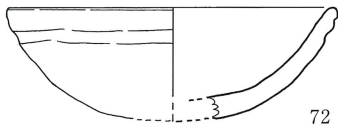
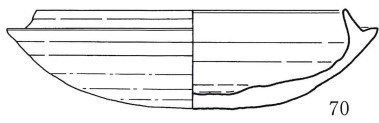
□SH16 (第35図)

調査区の南東部で確認された竪穴建物である。北西側の掘り込みがわずかに確認できたのみで、全形は不明である。炉または竈を壊した際の焼土が2カ所で見られる他は、柱穴が2カ所で確認できたのみである。

出土遺物は第36図70から76である。70は須恵器坏で、天井部は回転ヘラ調整を行っている。71は須恵器甕の胴部。72は土師器椀で、口縁端部に凹線上の段を持つ。73と74は器種不明の口縁部。74は外面は磨かれている。75と76は甕の口縁部である。



第35図 SH16



第36図 SH16出土遺物

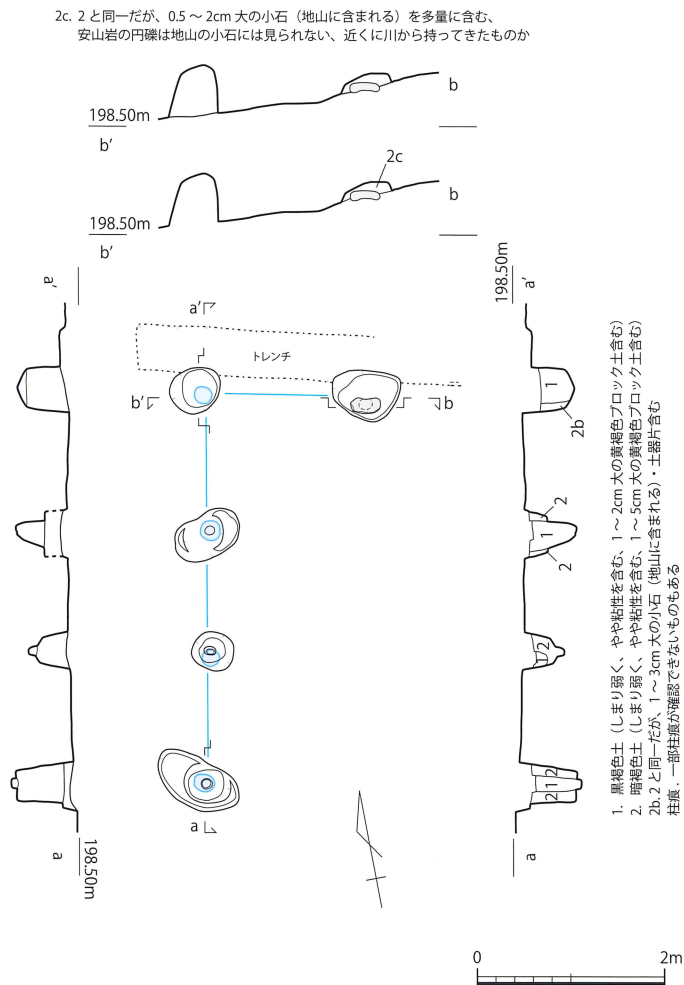


2 掘立柱建物

□SB01 (第37図)

調査区のはほぼ中央付近で確認された掘立柱建物である。ただし、後世の削平により東側、すなわち川側の低い方は柱穴を確認できていない。南北方向に3間で、東西方向は不明である。規模は南北に4.1mである。柱穴は直径0.4から0.6mの円形で、深さは深いもので0.6mほどある。

柱穴からの出土遺物は無い。

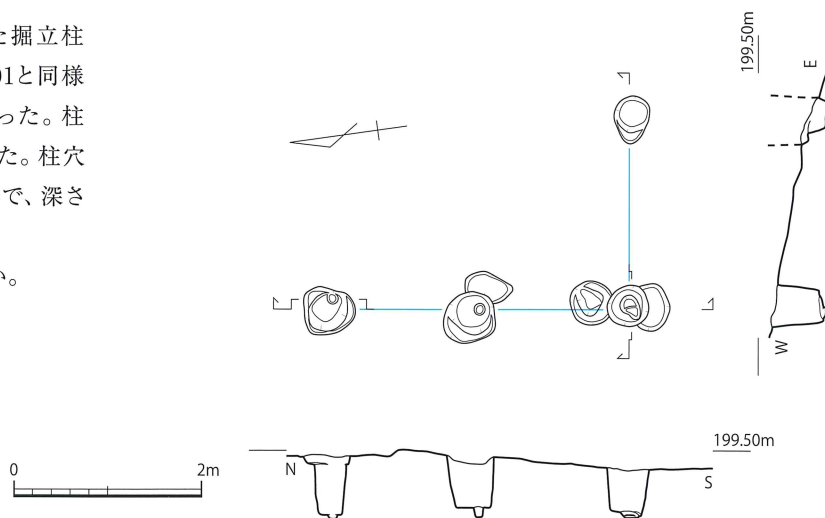


第37図 SB01

□SB02 (第38図)

SB01の南側で確認された掘立柱建物である。この建物もSB01と同様東側の柱穴は確認できなかった。柱穴は南北方向に2間確認された。柱穴は直径0.4mから0.5mの円形で、深さは0.5mである。

柱穴からの出土遺物は無い。

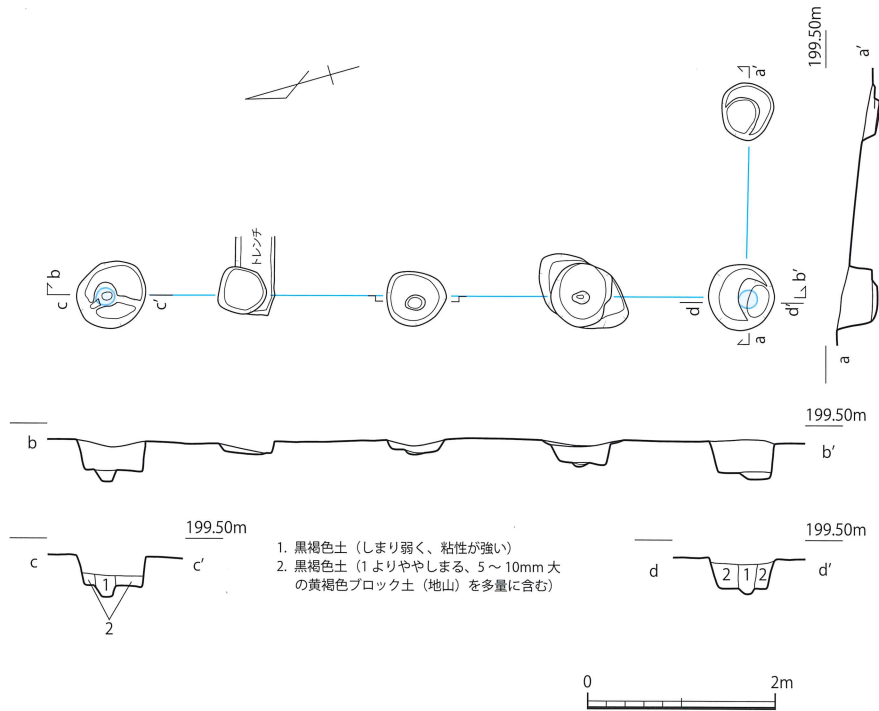


第38図 SB02

□SB03 (第39図)

調査区の真ん中を南北に貫く段落ちの下側で確認された掘立柱建物である。南北に4間確認されたが、傾斜の低い方(東側)は柱穴が1本確認されただけである。柱穴は、直径0.4mから0.6mで、深さは深いところで0.3m程度である。床面には柱あたりの窪みがある。規模は南北方向には6.9mである。

柱穴からの出土遺物は無い。



第39図 SB03

3 土坑

□SK01 (第40図)

調査区南端で確認された土坑である。南側は調査区外に伸びる。ただし、B区では確認されていないので、溝のような長いものではない。幅は0.6mから0.7mで、長さは3.0m以上となる。深さは0.2mである。

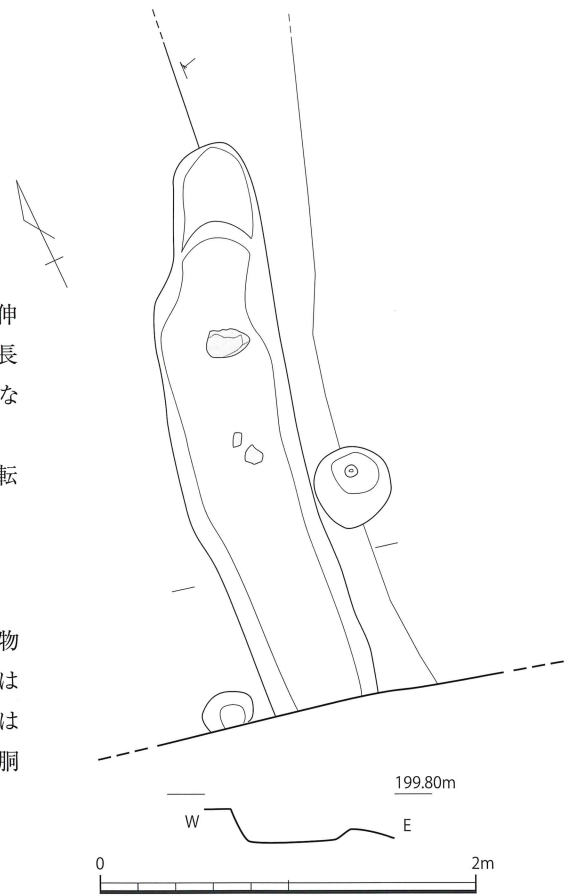
出土遺物は第41図77の、須恵器坏蓋である。天井部は回転ヘラケズリである。

4 ピット出土遺物

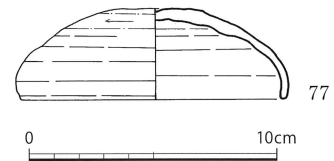
ここでは、建物を構成しない単独のピットから出土した遺物を説明する。第42図78から83がピット出土遺物である。78は須恵器坏身で、底部は回転ヘラ切り離し未調整である。79は土師器の小型の壺である。胎土は在地系。80は須恵器甕胴部破片。82と83は土師器甕である。

5 包含層出土遺物

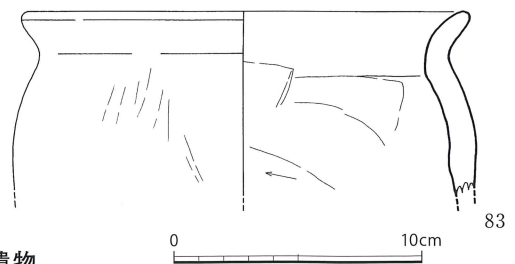
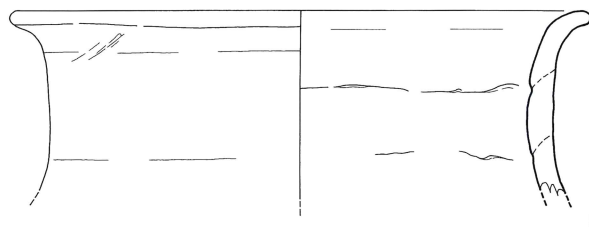
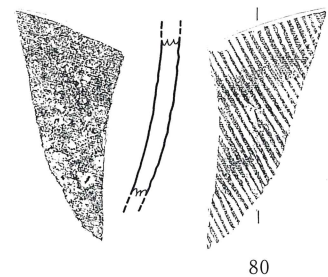
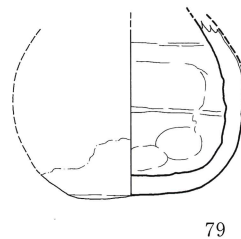
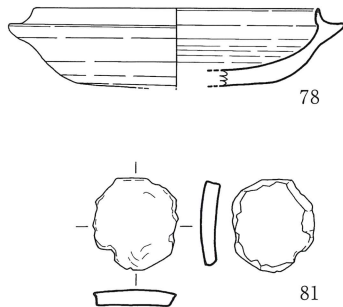
第43図84から第44図132が包含層出土遺物である。84から95は須恵器。かえりの消失した坏蓋(84から86)、小さな低い高台を付す坏(90から93)などがある。96から132は土師器である。96は擬宝珠状の摘まみ。97は在地系の胎土の小型鉢で、口縁部は一度横に開いた後、小さくつまみ上げられる。宇佐宮弥勒寺の11世紀前半の資料^{*4}に類似のものがある。98から106は碗である。104は口縁端部が小さく外傾する。



第40図 SK01



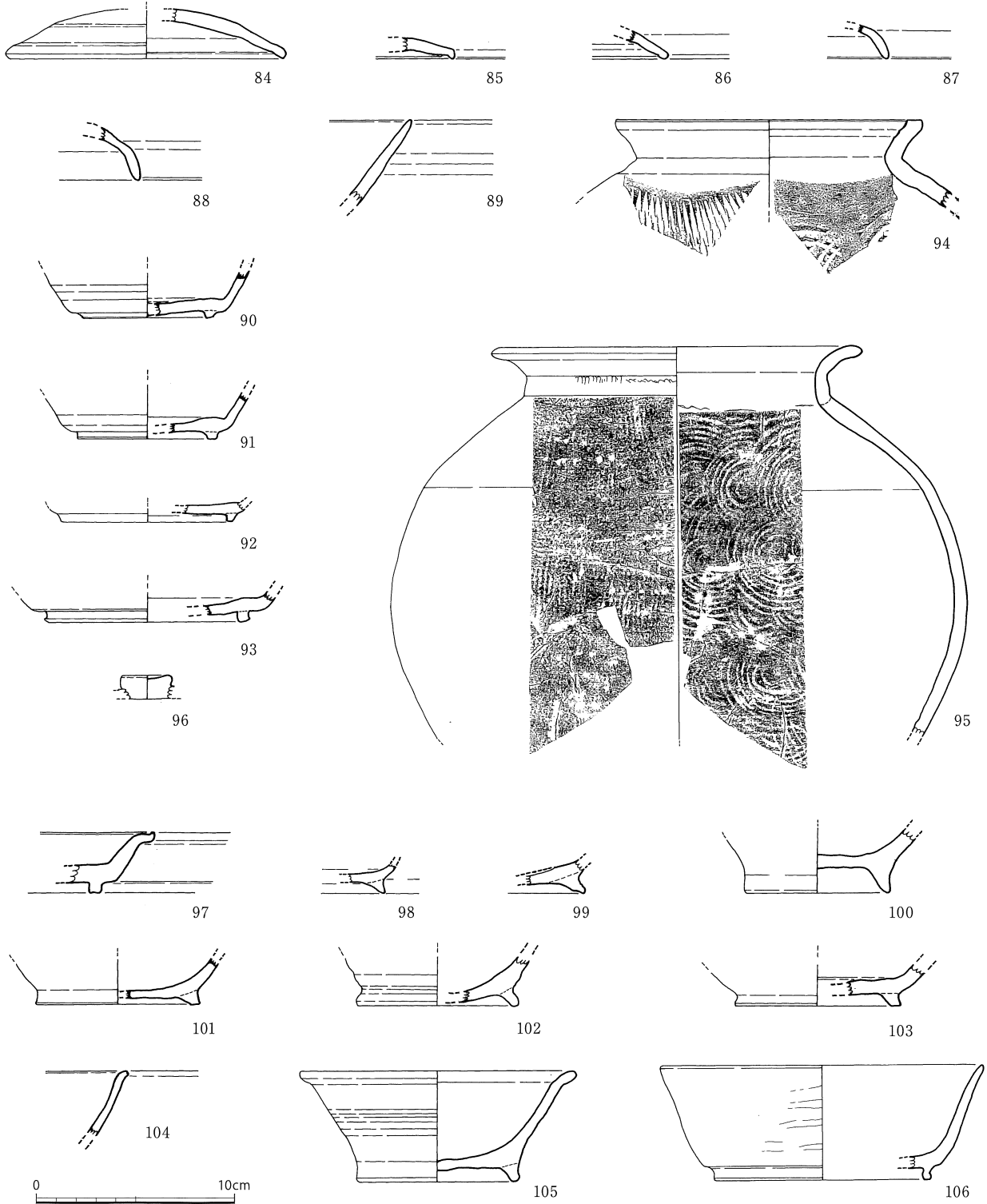
第41図 SK01出土遺物



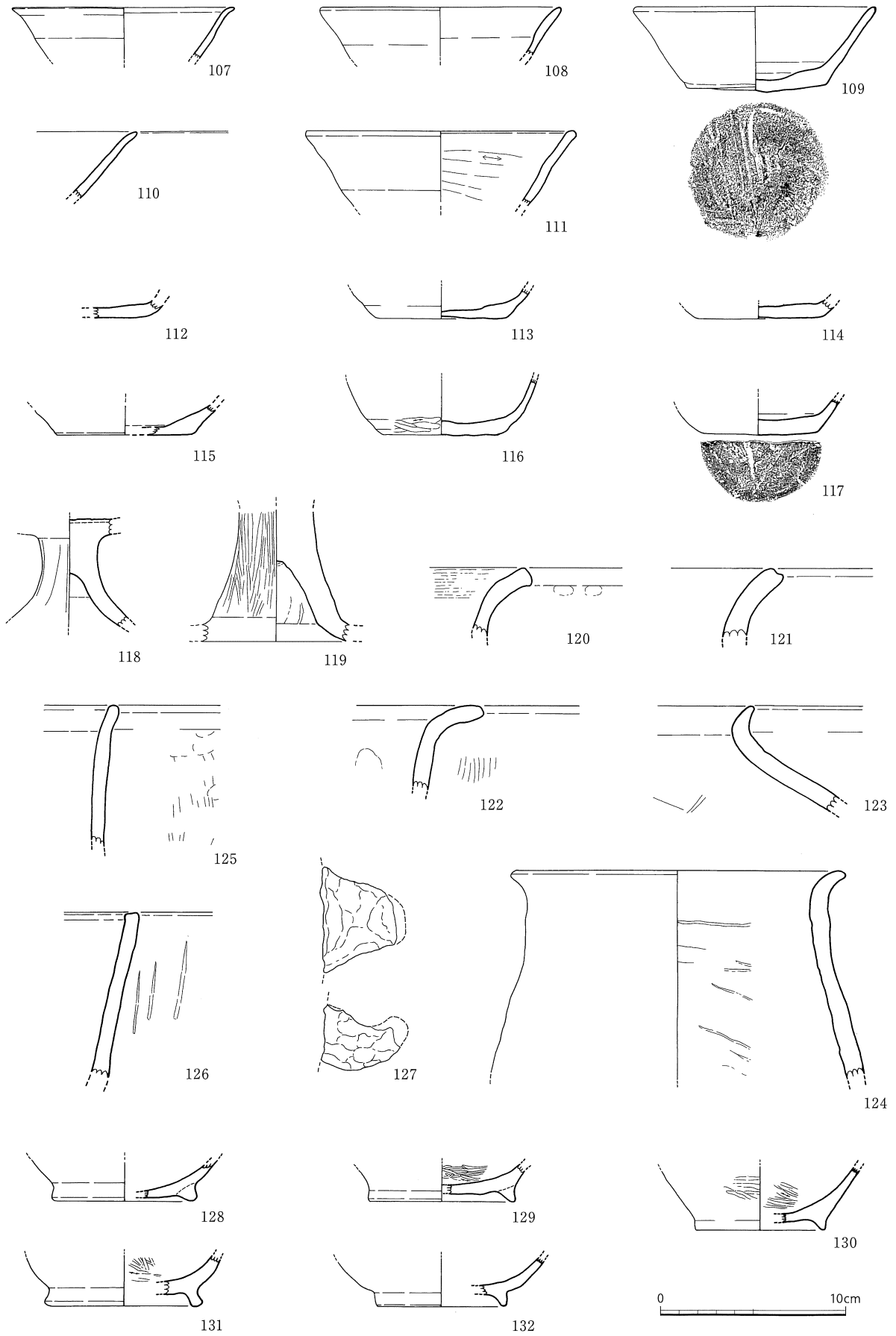
第42図 A区ピット出土遺物

*4 『弥勒寺』宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1989

105は外面にミガキが施される8世紀代の資料である。106から116は坏である。110は内面にミガキがあり、碗になるかもしれない。115の外面にもミガキがある。121から123は甑、126は長胴の甕である。127から132は黒色土器A類の碗である。体部過半が外に張るもの（131、132）と高台部からそのまま立ち上がるもの（127、128、131）の二者ある。



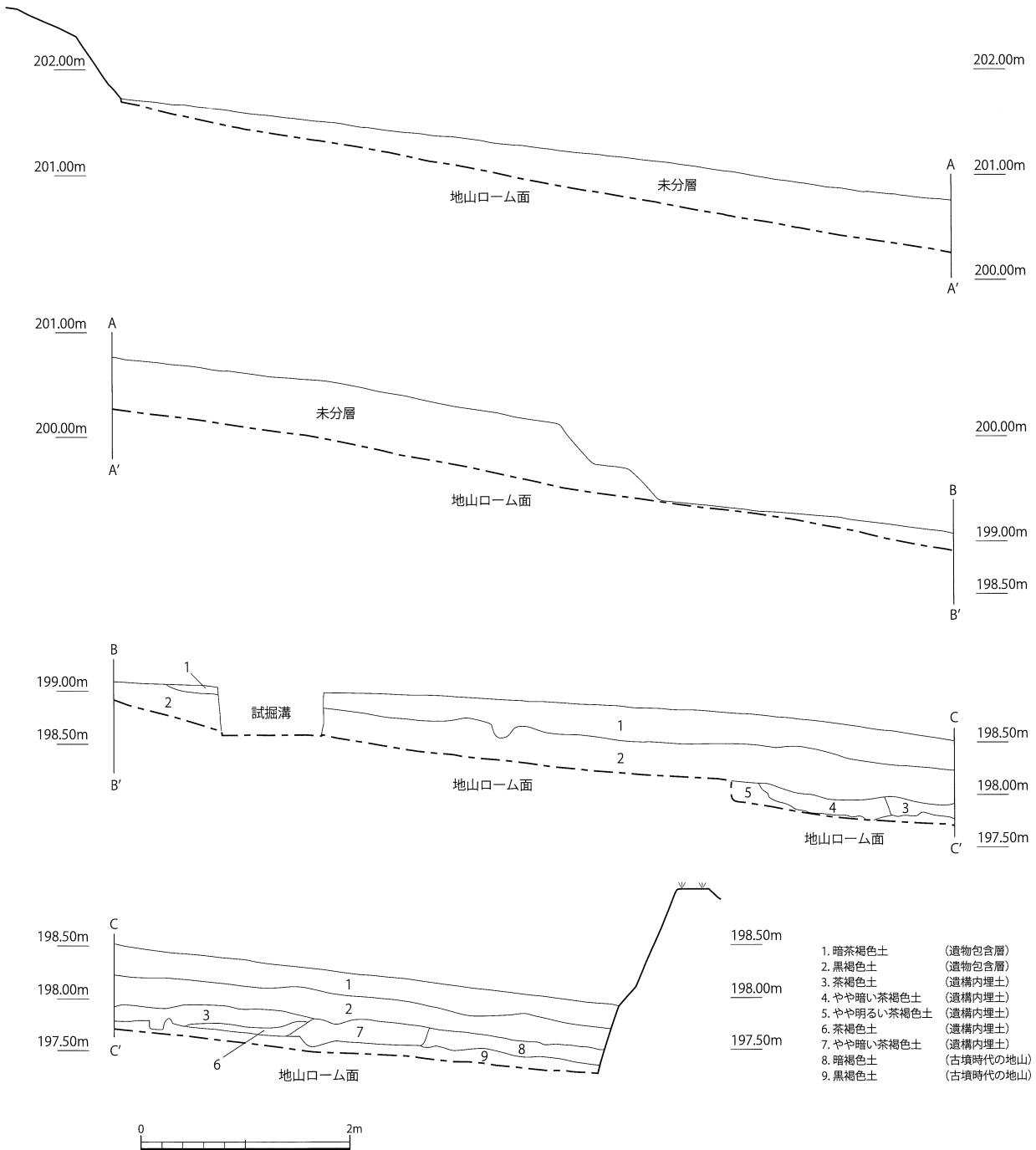
第43図 A区包含層出土遺物 (1)



第44図 A区包含層出土遺物 (2)

6 土層説明

調査区の南側に設定したベルトの土層である。上層は遺構検出のため除去している。古墳時代後期の遺構は8層から切り込んでおり、その上層の1層と2層は古代の遺物包含層である。古代の遺構はこの1層と2層の中で検出面があった可能性が高いが、検出ができなかったため結局地山の黄褐色ローム土まで下げざるを得なかった。そのため、SB01などの掘立柱建物は、川側（東側）の柱穴が確認できなかったのである。



第45図 A区土層

7 小結

A区は、加原遺跡で初めて調査を行った区域である。遺跡を覆うのは、雨の度に山から流れてくる厚く堆積した腐植土(第45図1層、2層)で、その堆積土中に古代から中世の生活面が漸移的に作られているため、遺構検出も明確に峻別できず、また遺構埋土もほとんど同じ土である。そのため、遺構検出は困難を極めた。表土除去を行った直後は、焼土(後に竈と判明)のみが点在しており、黒褐色粘質土中には古墳時代から古代の遺物が含まれている、という状況であった。そのため、トレンチを入れたり、黒褐色粘質土を除去し、その下の黄褐色土まで掘り下げたりしたので、今回検出した遺構の状況は、必ずしも良好なものとはいえない。そのことを前提として、A区のまとめを記したい。

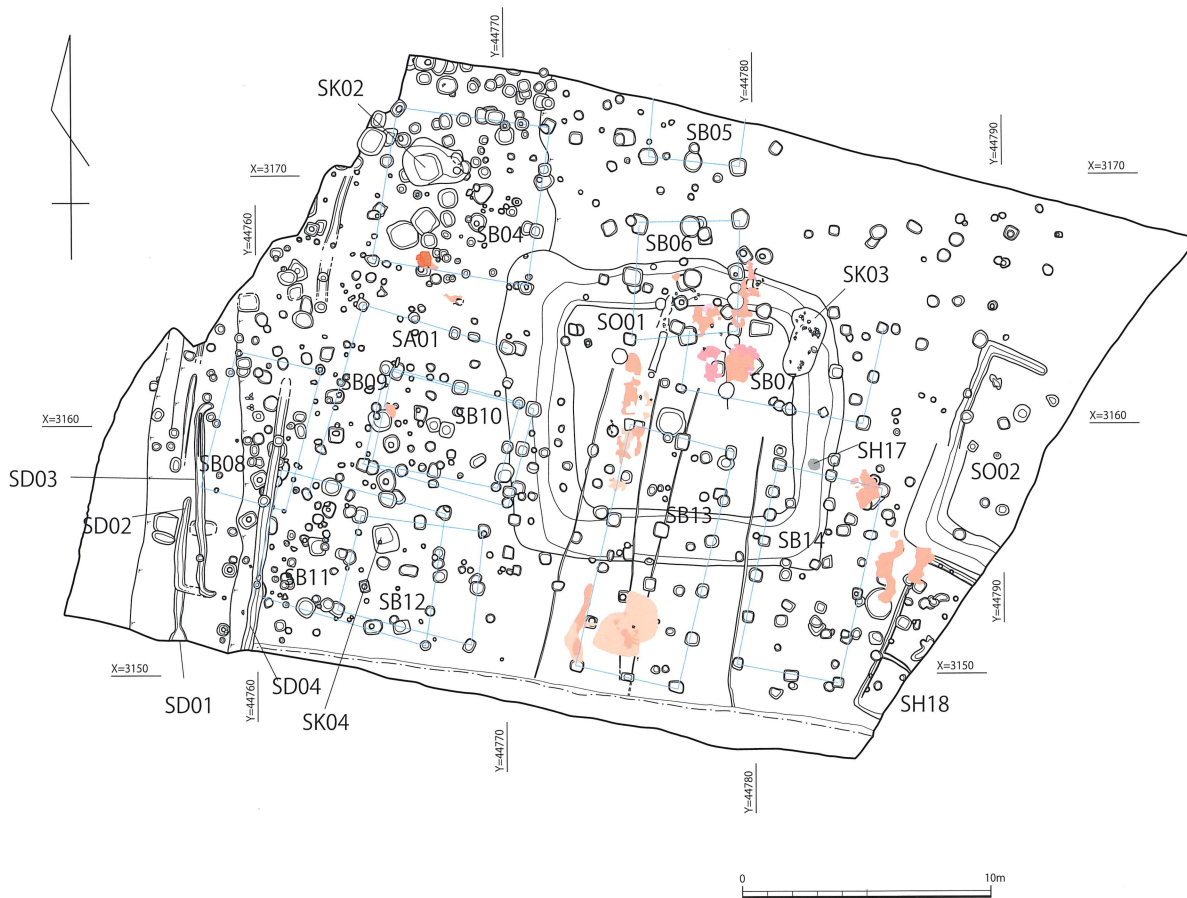
古墳時代の集落は、竪穴建物のみ確認されている。竪穴建物は北竈のものと西竈のものがあり、切り合いがある箇所は2カ所で西竈→北竈、1カ所で北竈→西竈という変遷を確認できる。竈の位置は必ずしも時期的なものではないことがわかる。出土した遺物から、これら竪穴建物群は6世紀後半から7世紀初頭にかけて存続したことがわかる。

古代は、遺物はかなり出土したが、明確な遺構は確認できなかった。黒褐色粘質土中に遺構があった可能性が高いと考えている。しかし、隣接するB区のような状況ではなかった。それは、ほぼ黄褐色土面で古代の遺構が検出されたB区西側と同レベルで遺構検出したA区西側(一段高い部分)で、柱穴の広がりや全く確認できていない事による。それに対して、A区東半分は、調査前の畑の段によって大きく削られていた。その段落ちに沿って3棟の掘立柱建物が確認された。このことは、偶然では無く、おそらく畑造成による段落ち以前に、同じ場所で何らかの段が作られていたことを示すものであろう。B区やC区の状況を見ると、古代や中世段階で何度も斜面を削って平坦面を作り出そうとしていたことがわかっている。A区の段落ちも、同様なものと考えたい。柱穴の大きさから、SB03は古代に遡る可能性が高いと考えられるので、段落ちの形成も古代に遡る可能性がある。

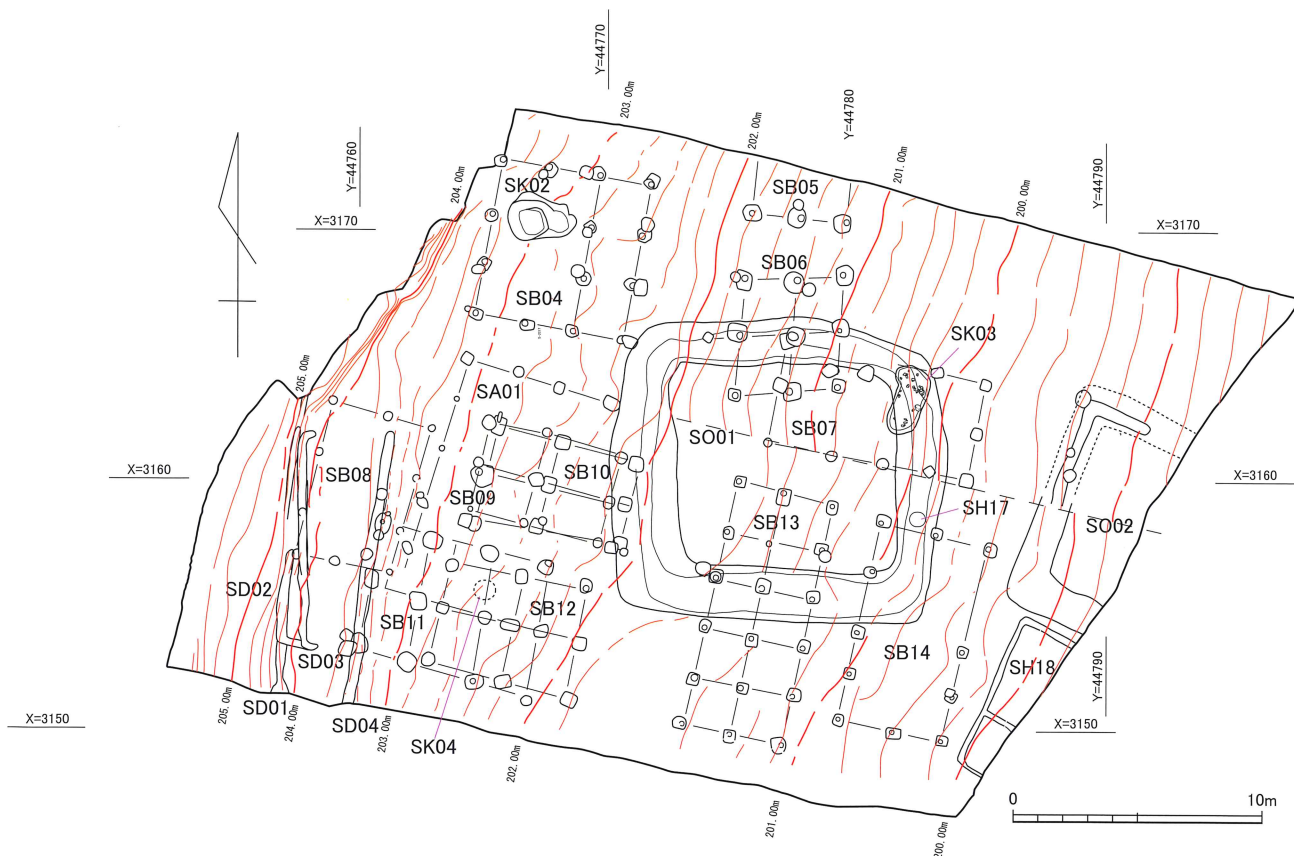
(2) B区

B区は、A区の南側に隣接する。表土を除去すると、山側（西側）ではすぐに地山（凝灰岩）が現れ、一段の段差が付いた東側は、段落ちのところで黄褐色ローム土が検出されたが、さらに川側（東側）に行くと、徐々に傾斜を持ちながら黄褐色ローム土は深く潜り、その上部に黒褐色粘質土が厚く堆積していた。基本的に古代以前の遺構は黒褐色粘質土中で確認できた。現状でもそうだが、雨が降ると山側から雨水が流れ、土を洗い流すと共に、山側からは新たな土砂が運ばれてくることになる。そのため、厚く堆積した黒褐色粘質土はそのような自然作用によって徐々に形成したものと考えられ、そのため遺構検出は困難を極めた。

遺構は、竪穴建物2棟、掘立柱建物11棟、溝4条、土坑3基、古墳2基が確認されている。



第46図 B区遺構配置図(1)



第47図 B区遺構配置図(2)

1 竪穴建物

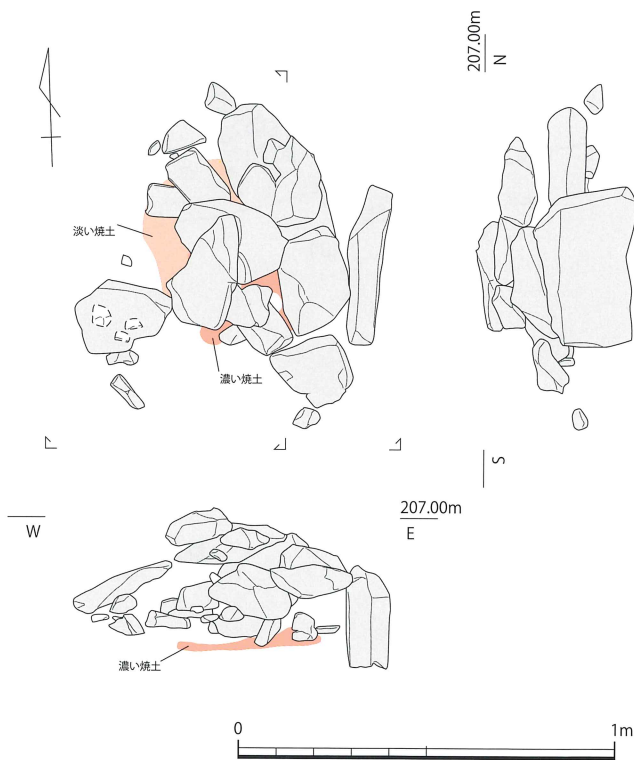
□SH17 (第48図)

SO01の周溝の上で竈痕跡が確認されたため、竪穴建物として扱う。黒褐色粘質土中に床面があったため、竪穴そのものが確認できなかった可能性が高い。竈は、被熱で赤化し硬化した面(焼き口部分)の上に袖石などで使用した凝灰岩の石材を積み重ねた状態で出土した。住居の北側壁際に敷設された竈であると考えられる。これに伴うような遺物の出土は無かった。

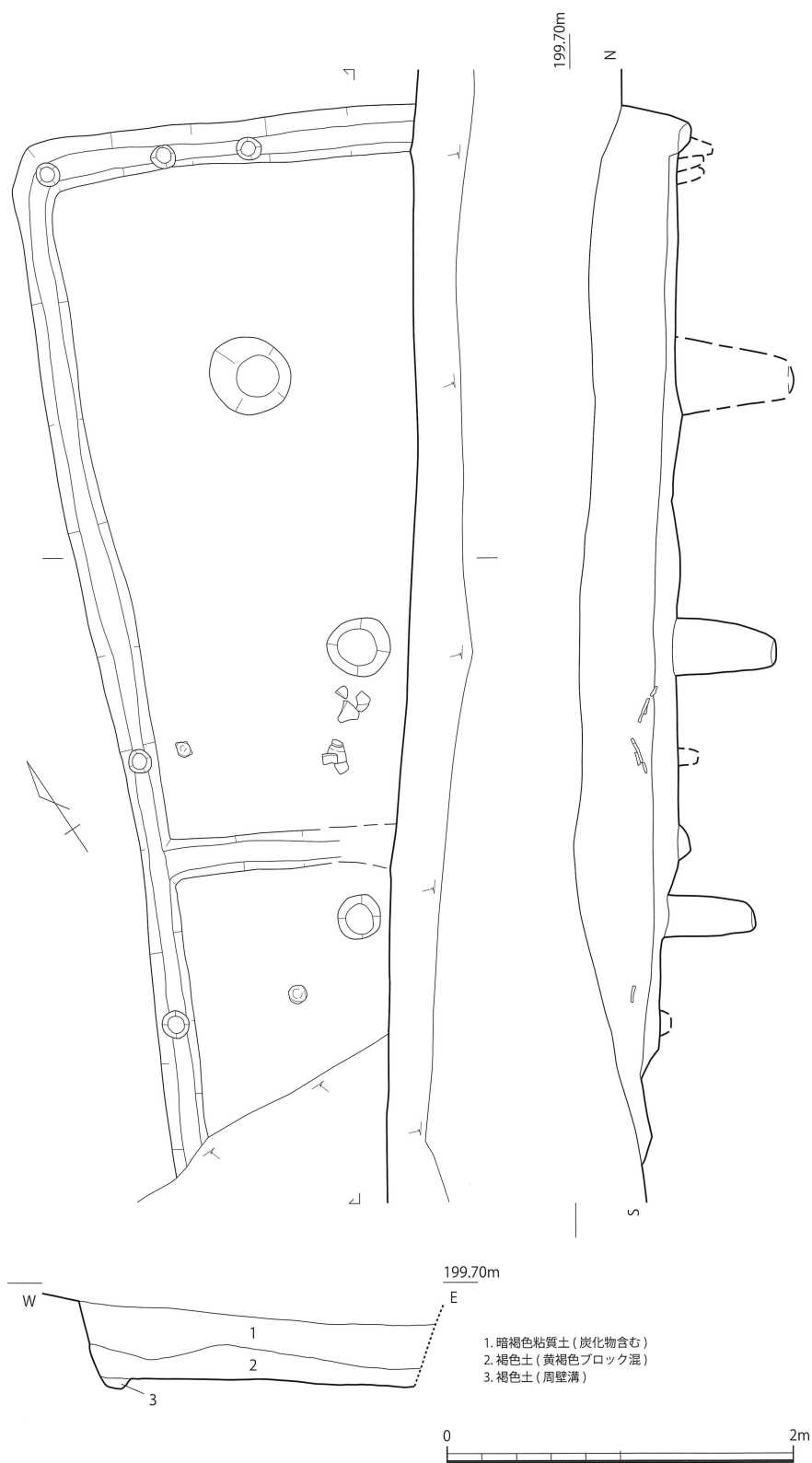
□SH18 (第49図)

調査区の東で確認された竪穴建物である。調査区外に大部分が広がっており、発掘できたのは北西角部である。そのため大きさは不明である。深さは深いところで0.6m残っていた。壁際には0.2mほどの壁溝が巡り、また、住居の中程に向かって、床を区画するように壁溝から直行する溝が伸びている。柱穴は3カ所で確認されたが、その内の2本が4本主柱を構成するものであろう。

出土遺物は図化できるものが無く時期は不明であるが、壁溝やしっかりした支柱穴から考えて、古墳時代後期のものと考えられる。



第48図 SH17



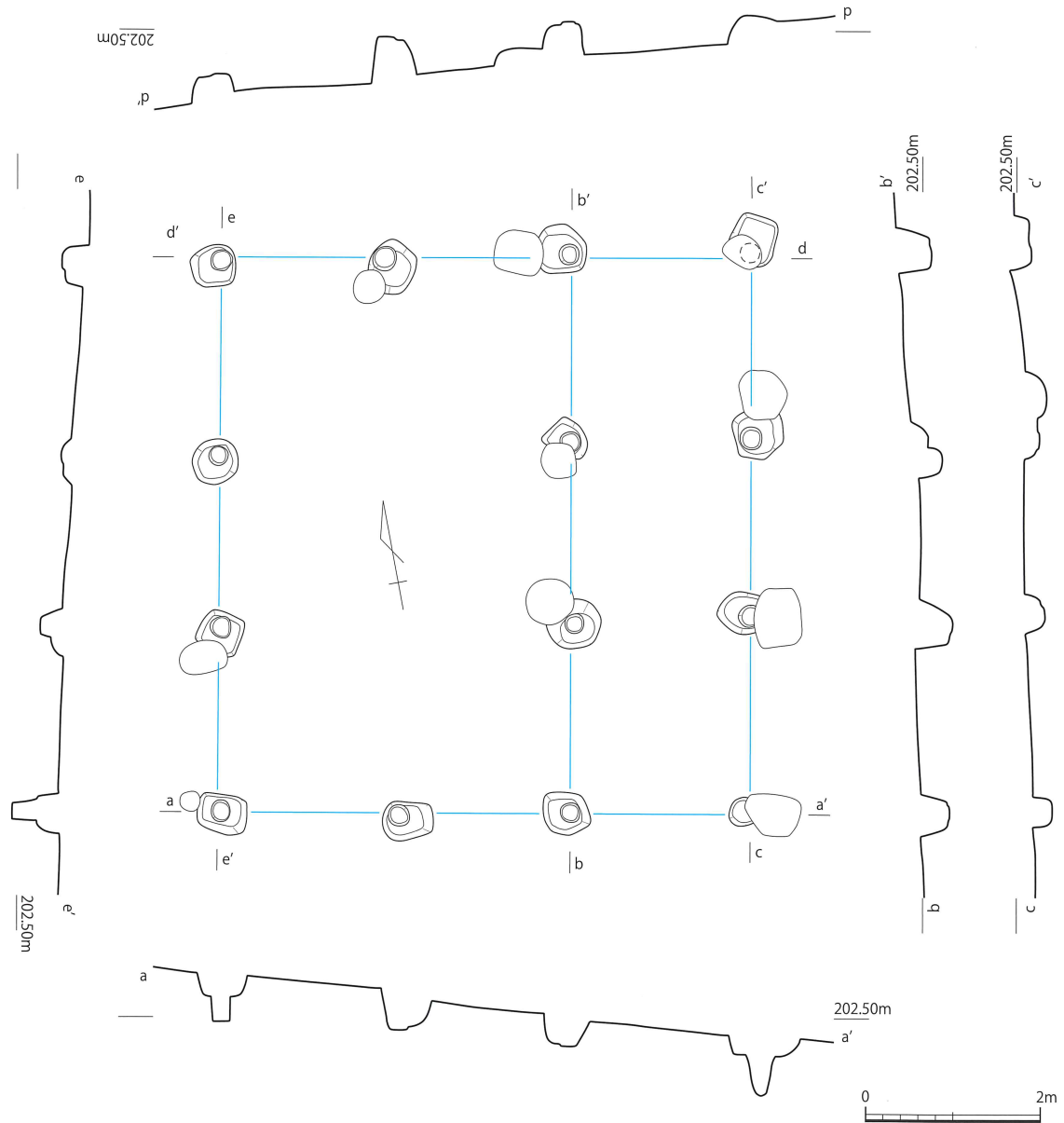
第49図 SH18

2 掘立柱建物

□SB04 (第50図)

調査区の北側で確認された掘立柱建物である。3間×3間のほぼ正方形を呈する建物で、内部には2本のみ柱穴がある。2間×3間の建物の東側に庇が付いたものとも見えるが、柱間隔が揃っていないため、3間×3間の建物とした。大きさは6.0m×6.2mで、床面積は37.2m²となる。

柱穴からの出土遺物は無い。

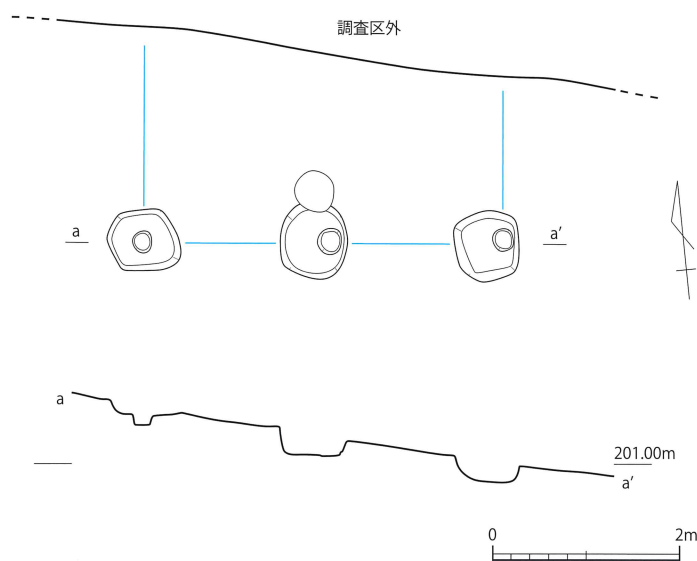


第50図 SB04

□SB05 (第51図)

調査区北側で確認された掘立柱建物である。調査区内では3カ所の柱穴が並んだ状態で出土しているだけだが、隣接するSB06の状況などから、2間×2間の倉庫になる可能性が高い。柱穴は一辺0.6mほどの方形になると思われる。深さは10cm程度しか残っていなかったが、床には柱のあたりの窪みがある。

柱穴からの出土遺物は無い。

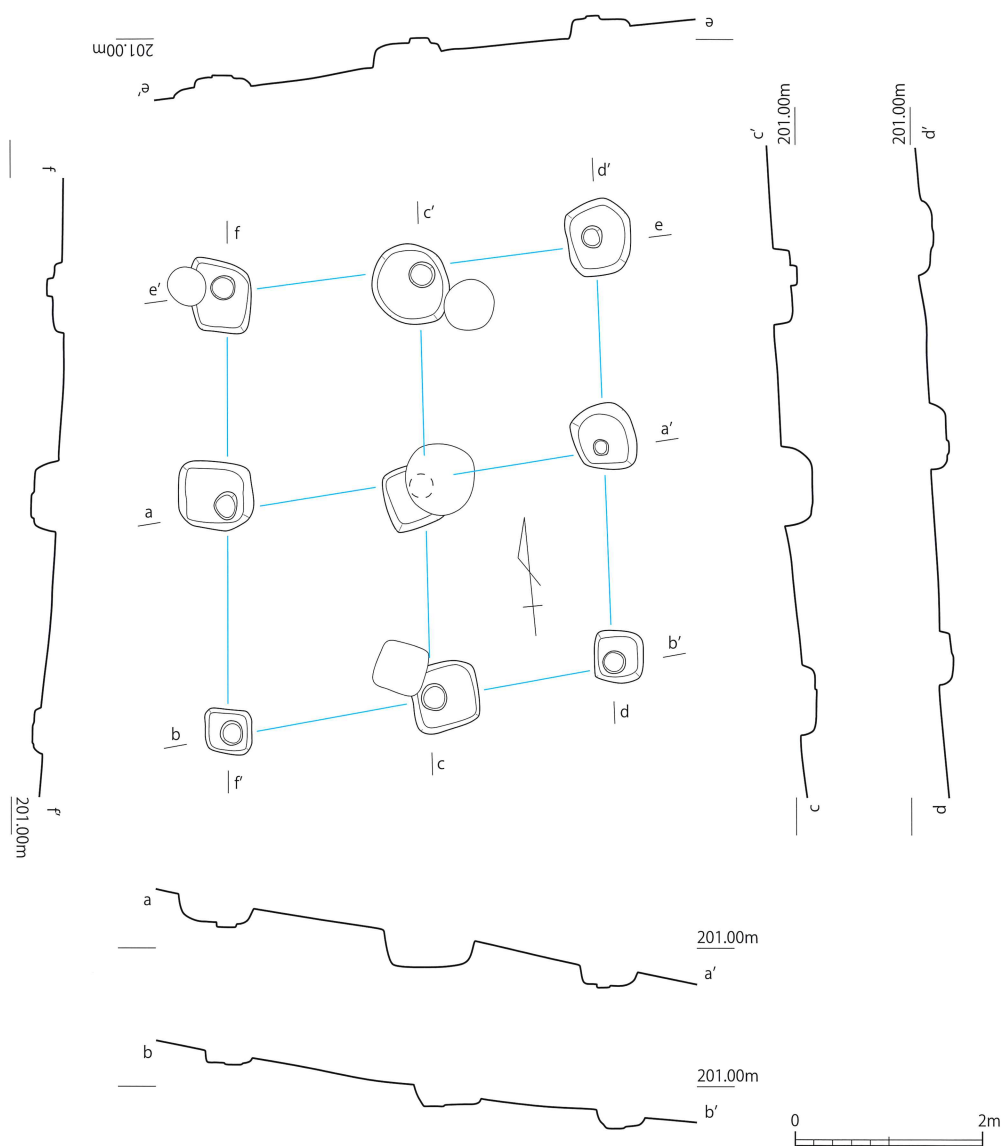


第51図 SB05

□SB06 (第52図)

SB05の南側に並ぶように検出された2間×2間の総柱建物である。全体的にややひずんでいる。また、かなりの傾斜がある場所に建っており、山側の柱穴床面と川側の柱穴床面の比高差は0.65m程度ある。柱穴堀方は一辺0.6mから0.7mの方形で、深さはいずれも0.2m程度しか残っていない。床には柱のあたりの窪みがある。規模は4.0m×4.4mで、床面積は17.6m²である。

柱穴からの出土遺物は無い。

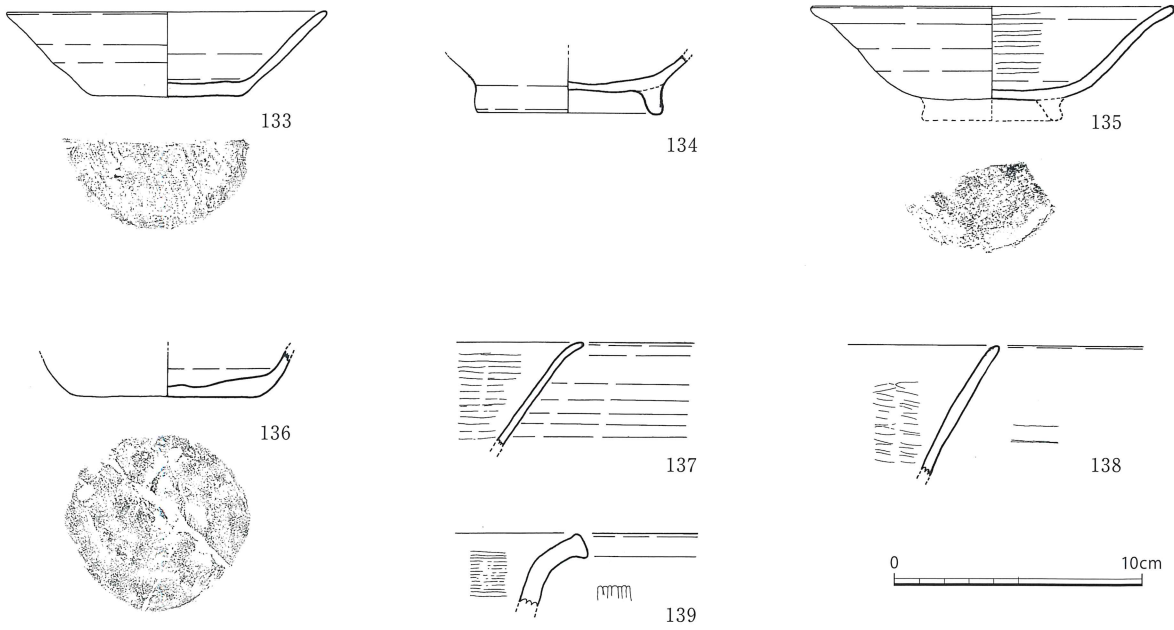
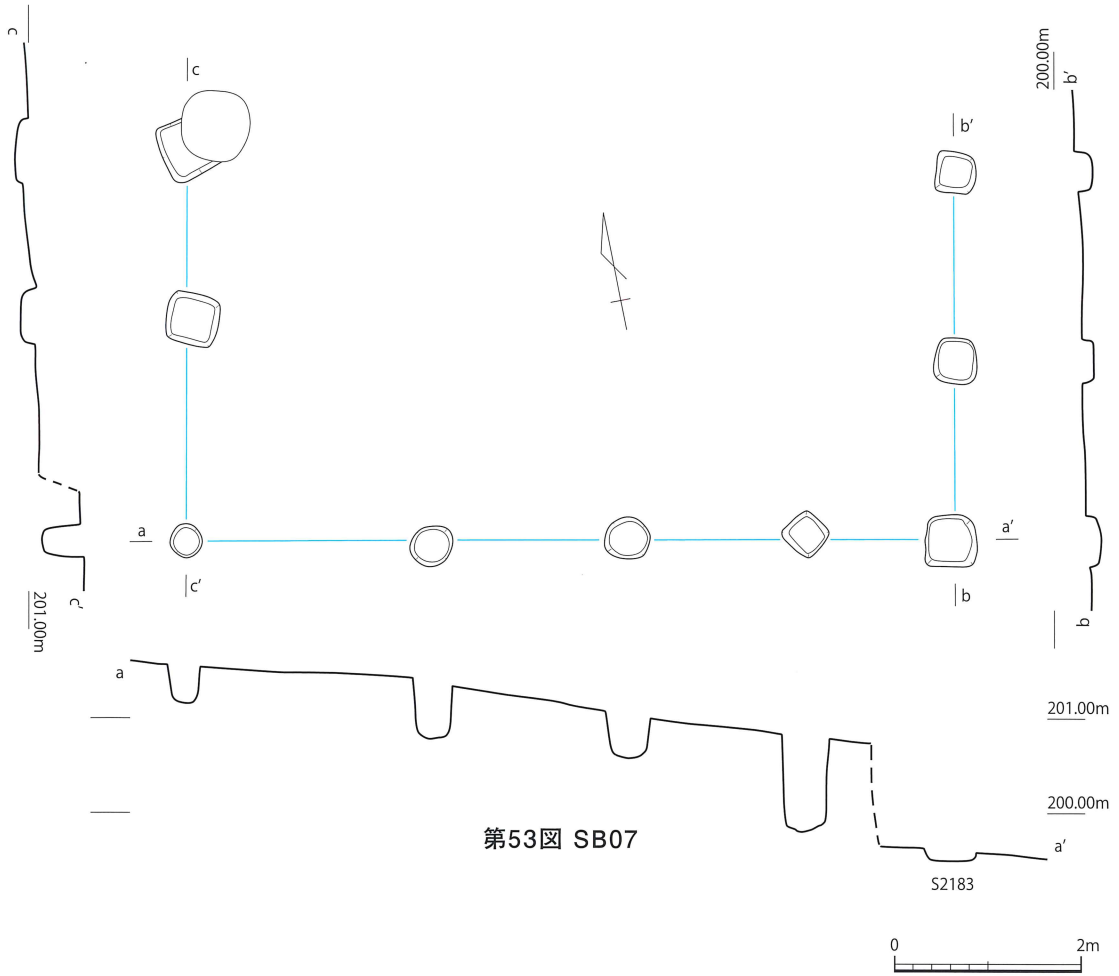


第52図 SB06

□SB07 (第53図)

調査区中央やや東寄りで確認された掘立柱建物である。2間×4間分確認されているが、北側の柱穴は確認できなかった。柱穴は0.4mから0.56mの一辺方形を呈するものが多いが、中には円形のものもある。東側の桁部分は、この建物の検出以前に一段深く掘り下げたため、柱穴は0.1m程度しか確認できなかった。規模は、桁行8.2m、梁行3.9mで、面積は32.0m²である。

柱穴からは第54図133から139の遺物が出土している。133は土師器碗で、高台部が剥がれている。内面にミガキが施される。134と135は土師器坏である。134の口径は12.9cm。136から138は内黒碗である。よく内外面とも磨かれている。139は甕の口縁部である。

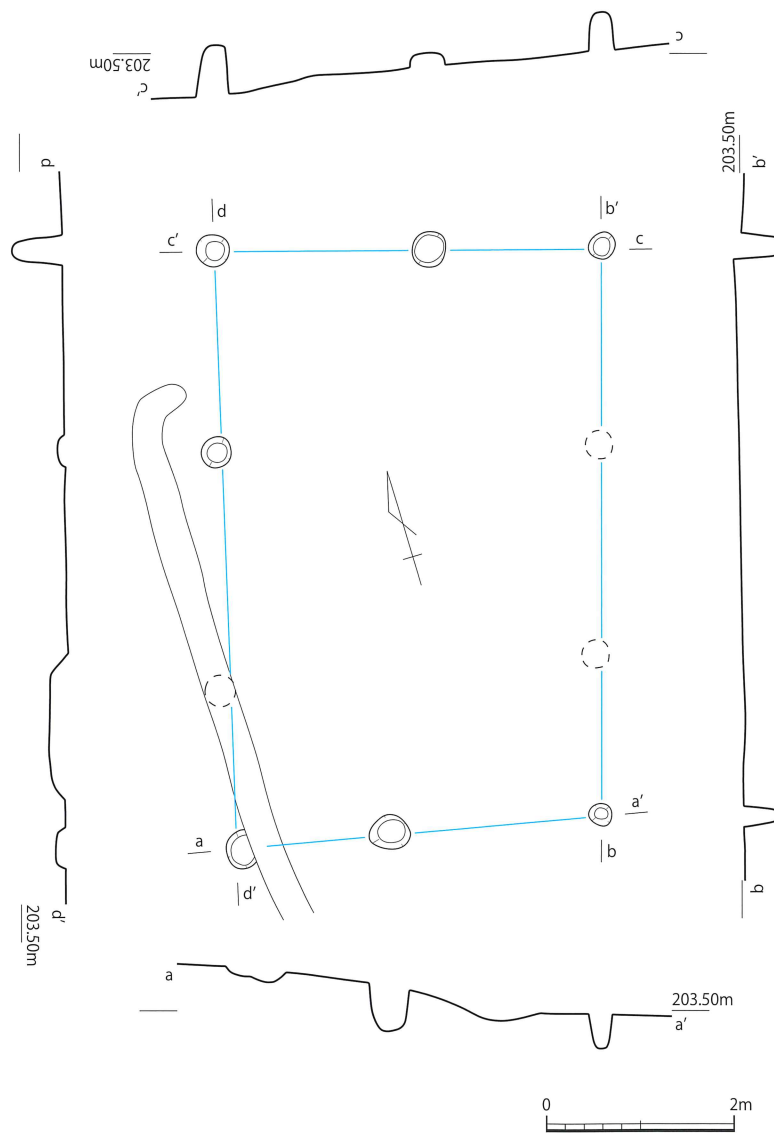


第54図 SB07出土遺物

□SB08 (第55図)

調査区の西側で、地山を削って作り出した段落ちのすぐ下で検出した掘立柱建物である。2間×3間であるが、検出できなかった柱穴もある。柱穴は0.2mから0.4m程度の円形である。建物規模は、6.2m×4.0mで、面積は24.8m²となる。

柱穴からの出土遺物は無いが、柱穴の状況と、山側に平行して走る溝は中世のものと考えられるので、この建物も中世と判断される。

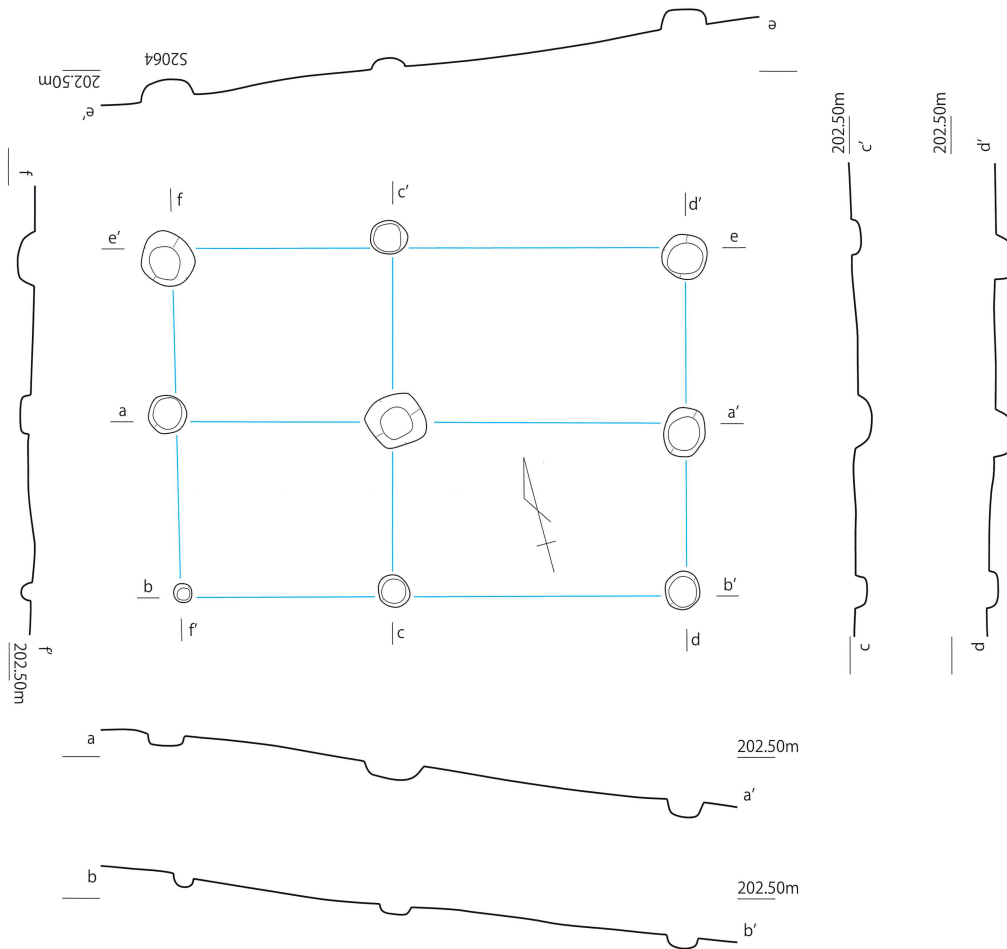


第55図 SB08

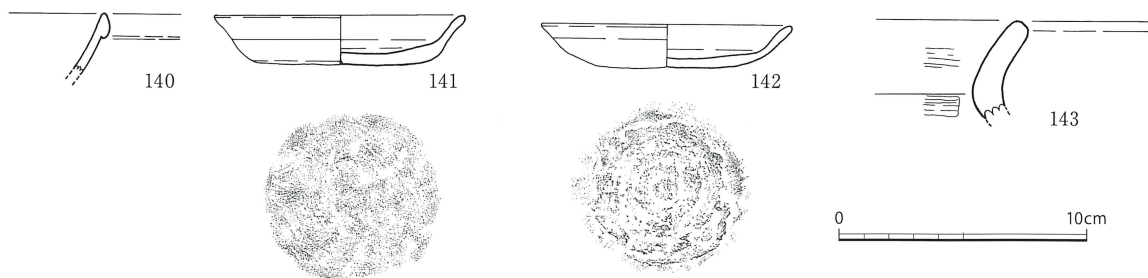
□SB09 (第56図)

調査区中央やや西寄りで確認された掘立柱建物である。SB10から切られている。2間×2間であるが、高低差のある方(等高線に直行する方向)に長い長方形である。柱穴は5.2mから6.0mの方形を呈する。深さは0.1m程度しか残っていない。規模は、5.8m×3.7mで、面積は21.5m²である。

出土遺物は第57図140から143である。140は白磁の碗口縁部で小さな玉縁状を呈する。口縁部の小破片のため明確ではないが、同一建物の他の柱穴から出土している141と142の土師器小皿から、10世紀後半から11世紀前半代のものと想定できる。141と142は底部回転ヘラ切りで、未調整である。



第56図 SB09

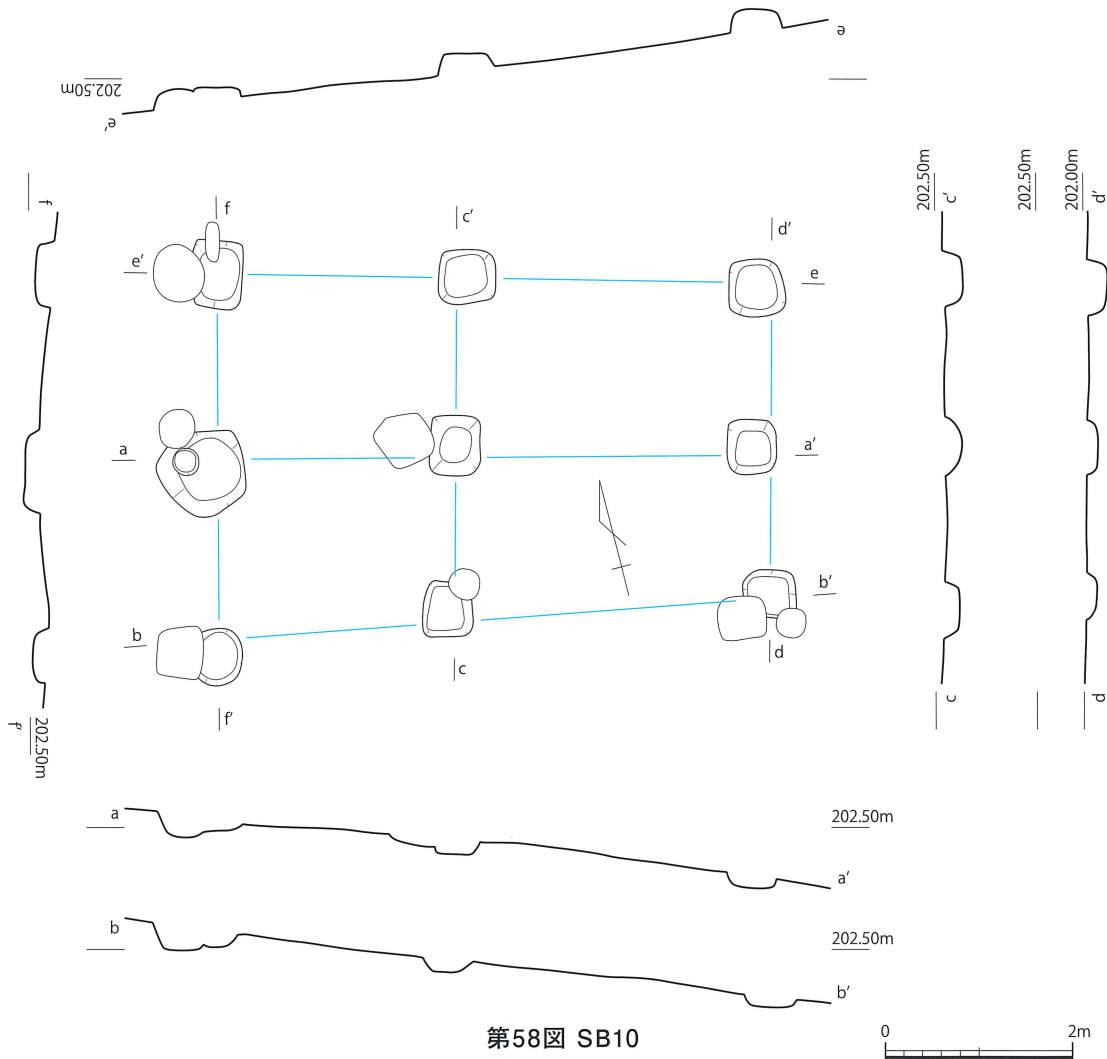


第57図 SB09出土遺物

□SB10 (第58図)

SB09を切っている掘立柱建物である。ほぼ同形同大なので、建て替えであろう。2間×2間で、SB09同様高低差のある方に長い建物である。柱穴は直径が0.1mから0.4mと不揃いであるが、円形である。深さは10cm程度しか残っていない。規模は、5.2m×3.6mで、面積は18.7m²である。

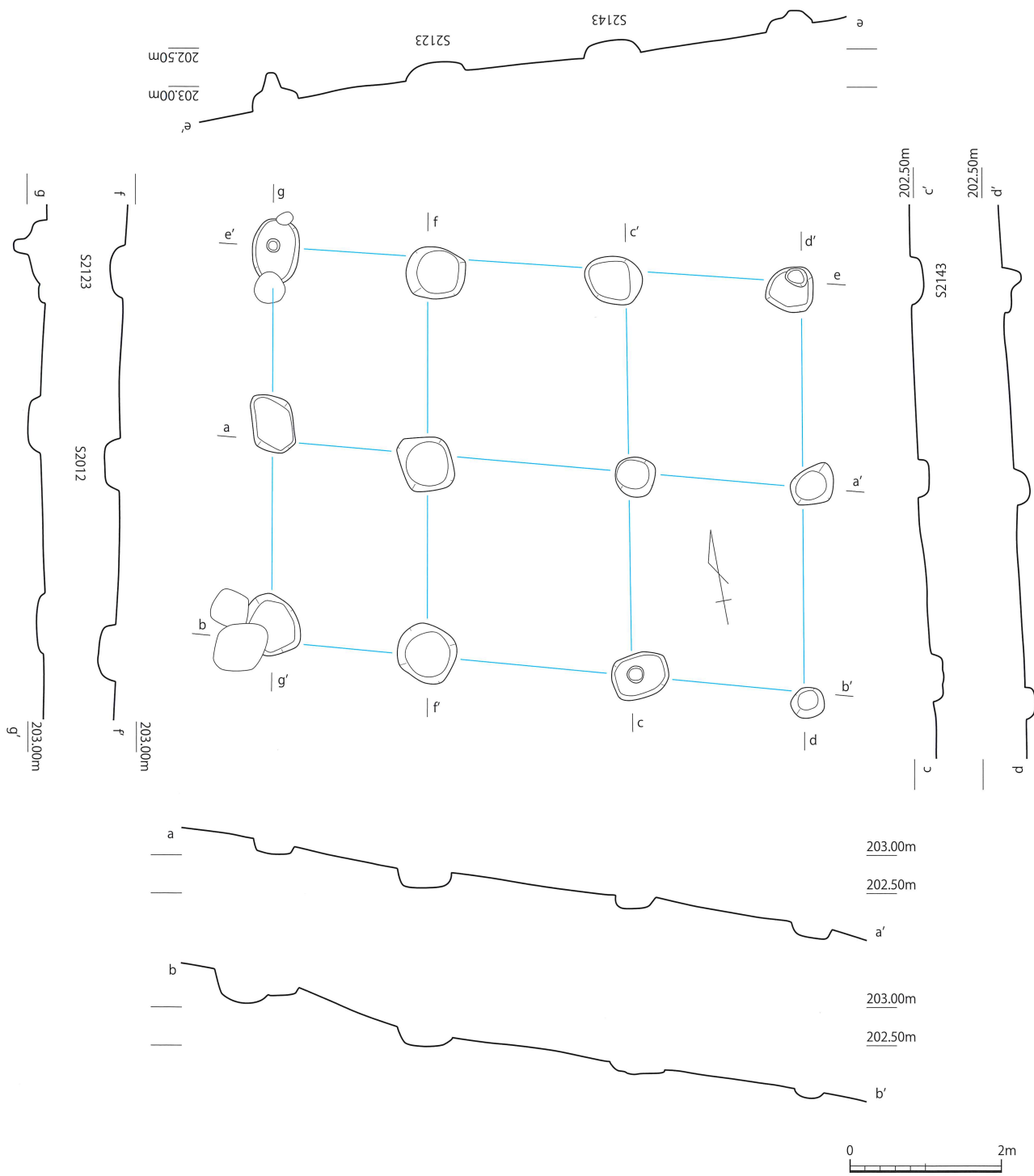
柱穴からの遺物の出土はない。



□SB11 (第59図)

調査区の南西側で確認された総柱の掘立柱建物である。西側の柱穴は中世と考えられる溝SD04に切られていた。建物は2間×3間で、ややひずんでいる。柱穴堀方は直径0.5mから0.8mの円形ないし略方形を呈するが、本来は方形であった可能性がある。建物規模は7.0m×5.2mで、床面積は36.4m²である。

柱穴からの遺物の出土はない。

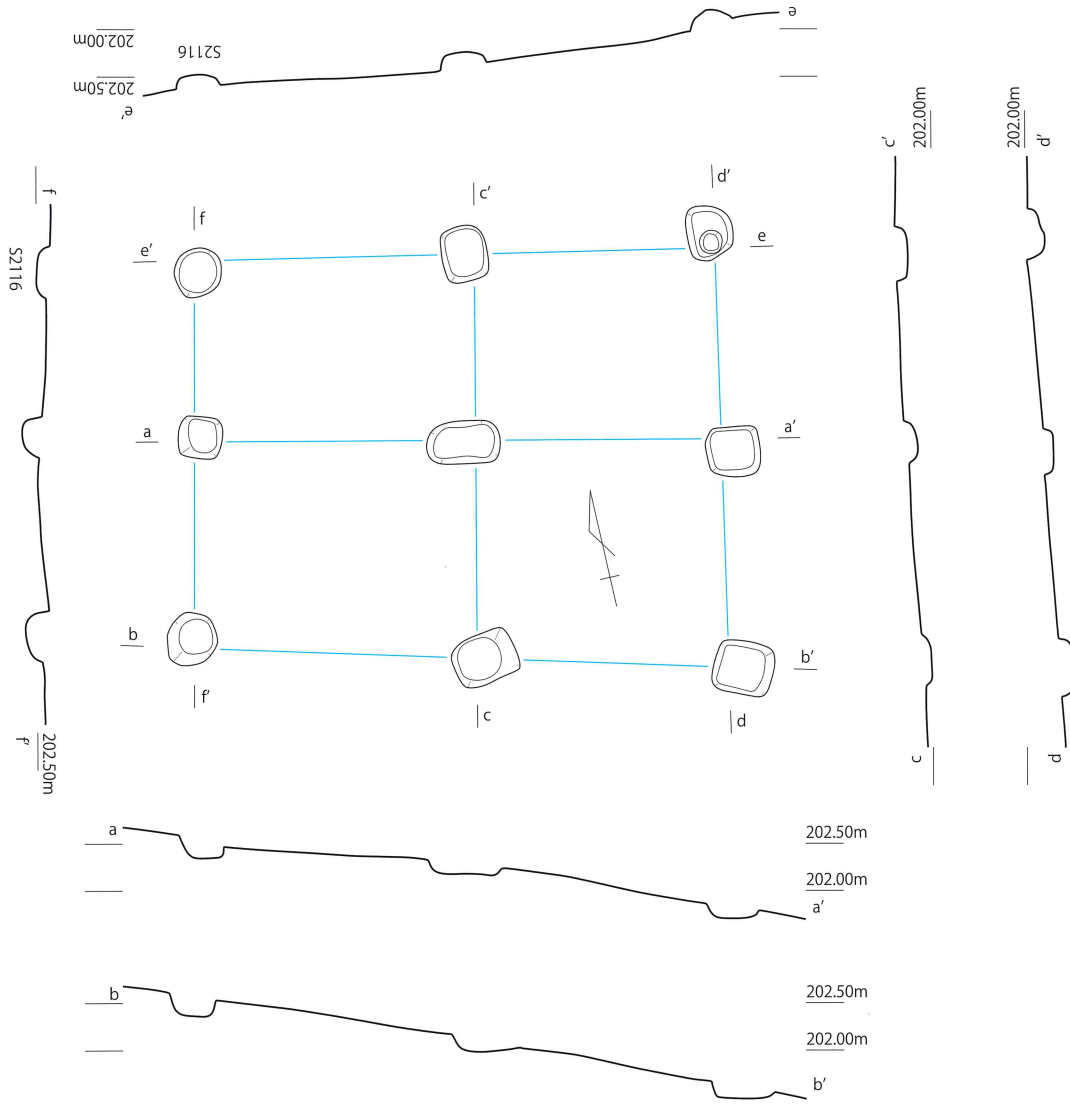


第59図 SB11

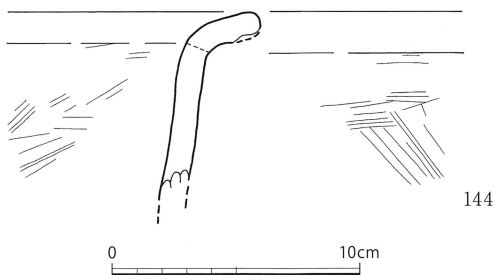
□SB12 (第60図)

SB09、SB10の南側に並んで検出された掘立柱建物である。2間×2間の総柱建物で、柱穴は一辺0.25mから0.3mほどの方形である。深さは10cm程度しか残っていない。また、西側の1列のみ柱穴の重なりがあり、柱を取り替えた可能性がある。

出土遺物は第61図144の甕口縁部である。口縁部は「く」の字に折れ、胴部は張らない。



第60図 SB12

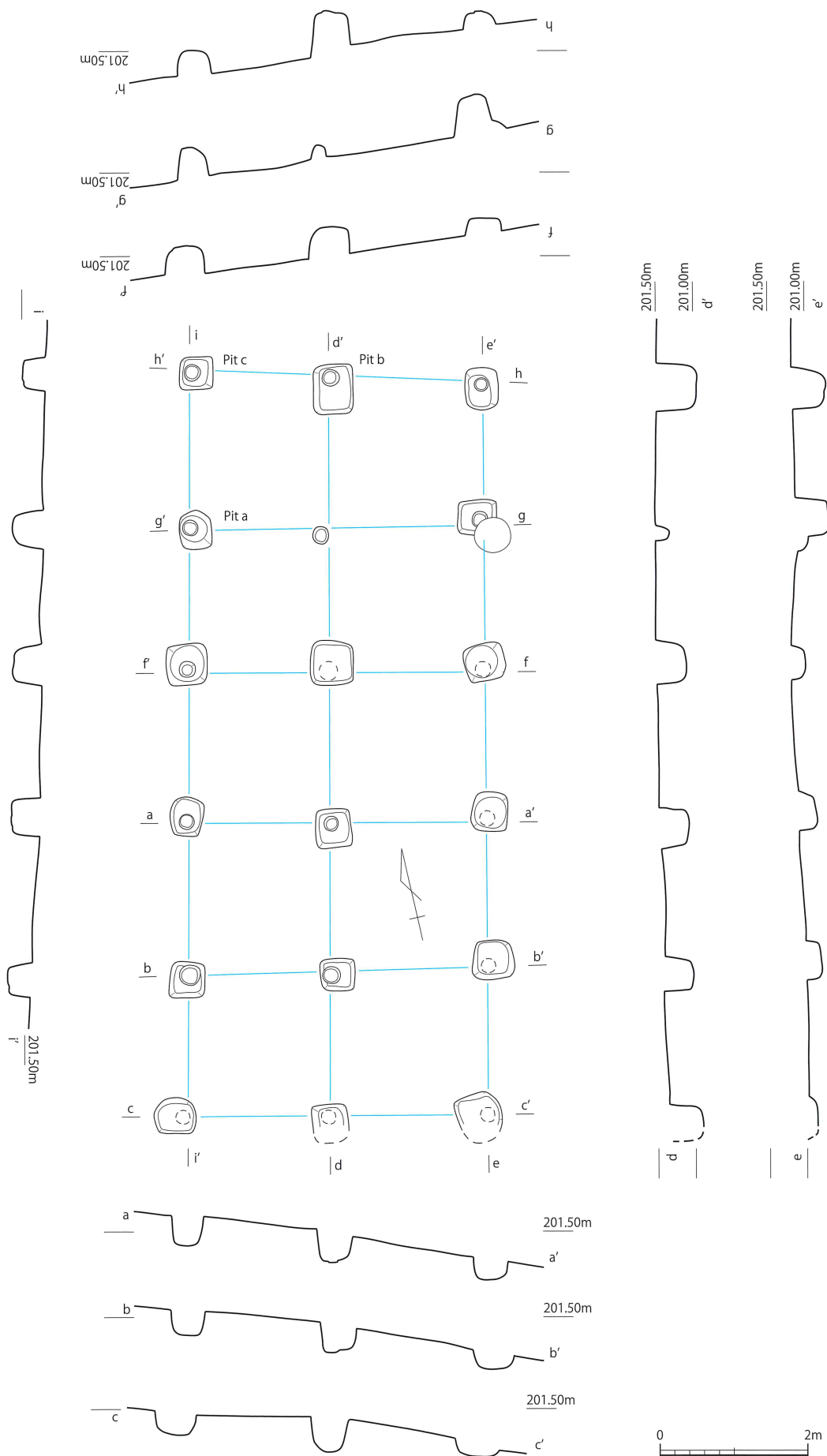


第61図 SB12出土遺物

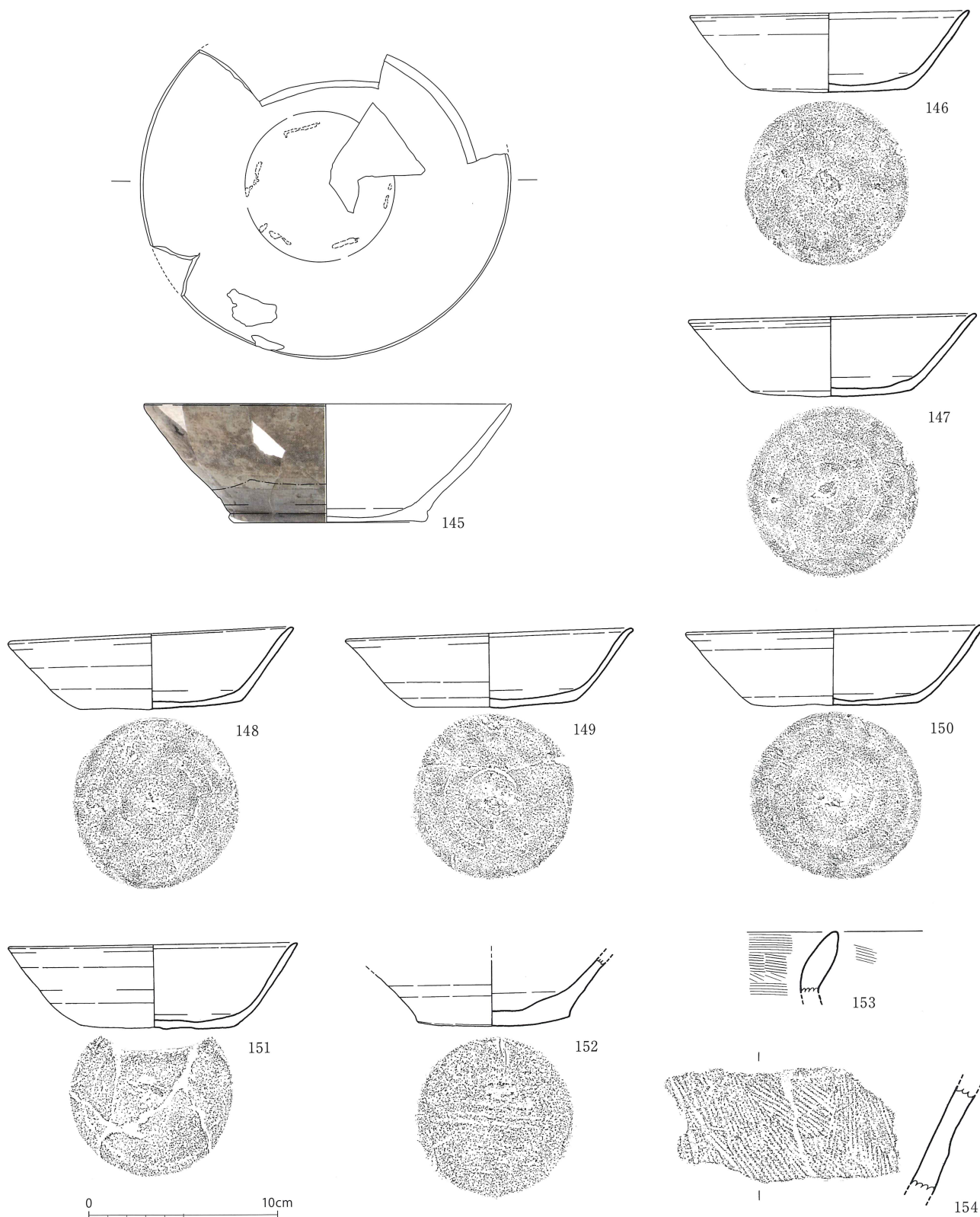
□SB13 (第62図)

調査区の中央やや南寄りで確認された掘立柱建物である。5間×2間で内部にも束柱と考えられる柱列がある。柱穴堀方は一辺0.5m前後の方形で、深さは多くが0.2mほどである。規模は、桁行9.9m、梁行4.0mで、面積は39.6m²となる。

出土遺物は第63図145から154である。145は柱穴aから出土した越州窯青磁碗で、円盤状で角が丸くなった平底から、直線的な体部が伸びる。釉薬は体部の3分の2ほどに掛けられており、それ以下から底部まで露胎である。内面見込みに細長い目跡が現状で5カ所（復元すれば6カ所）ある。外底部には目跡はない。熱を受け、色に変色しており、内外面とも本来の色を失いくすんだ灰色を呈している。胎土には黒色粒を含む。146から151の土師器坏は、第62図中の柱穴bの堀方から一括で出土しており、柱穴cからは152から154が出土している。146から151は共通する形態・胎土・色調の坏である。口径は13.5cmから14.3cmで、器高は3.8cmから4.1cmに収まる。口縁端部内側に不明瞭ながらやや稜を持っている。底部は丁寧に調整しているが、一部螺旋状の粘土紐痕が残る。152は土師器坏で、底部が突出気味である。153と154は土師器甕。



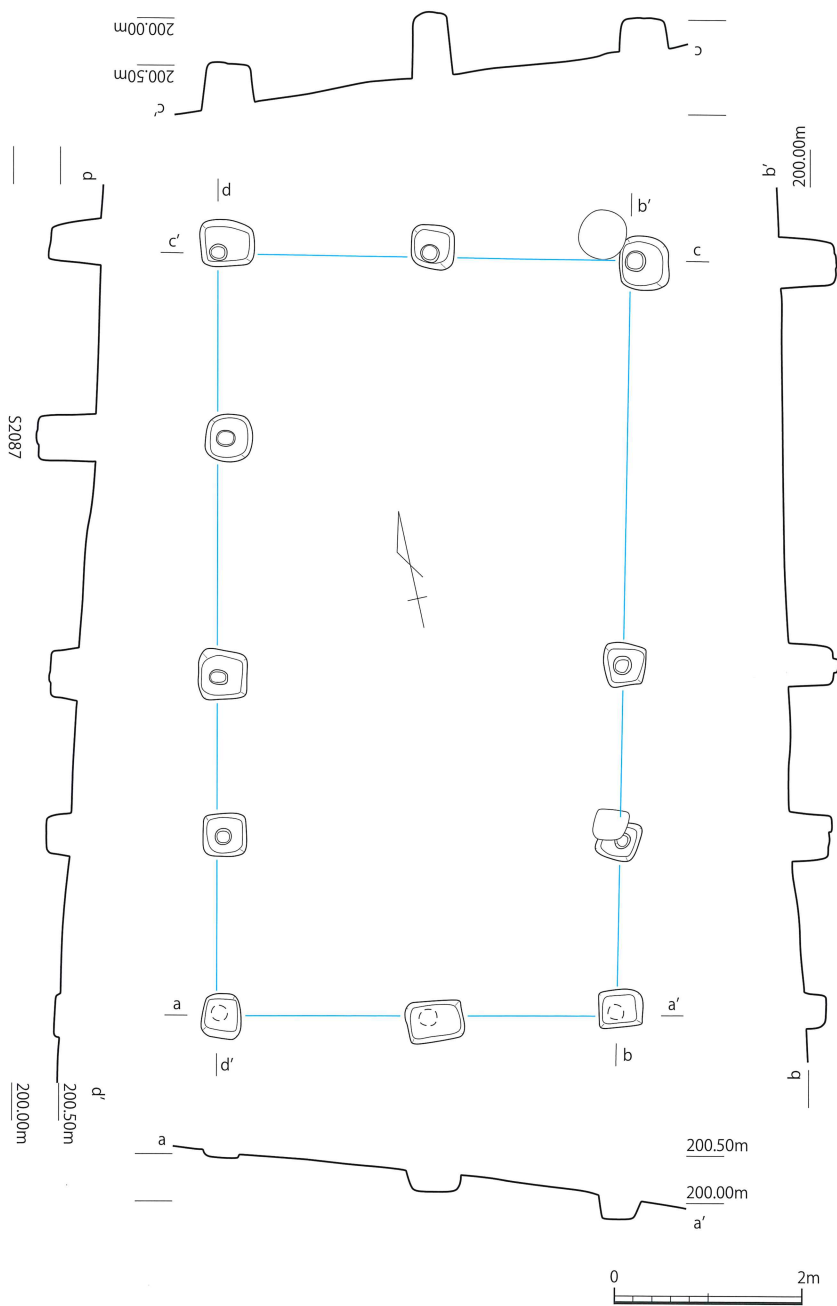
第62図 SB13



第63図 SB13出土遺物

□SB14 (第64図)

SB13の東側に並んで検出された掘立柱建物である。2間×4間で、内部には柱穴は無い。柱穴堀方は一辺0.4mから0.6mの方形である。柱穴の深さは0.4mから0.6m程ある。規模は8.2m×4.2mで、面積は34.4m²である。柱穴から遺物の出土は無い。



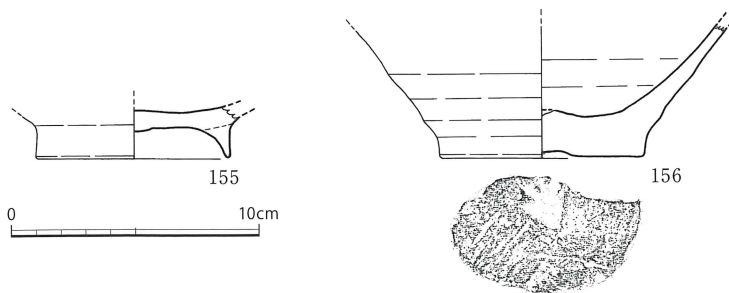
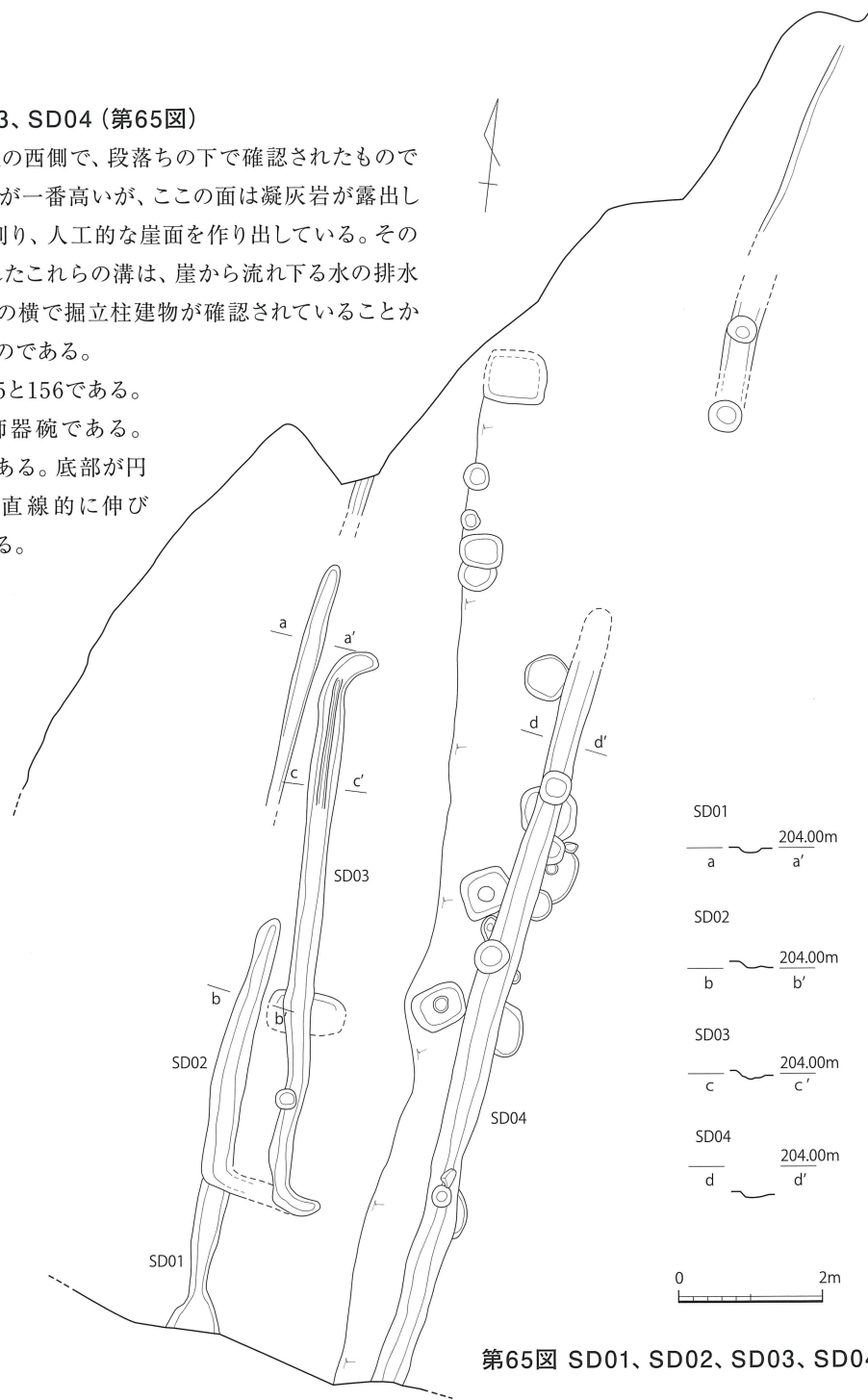
第64図 SB14

3 溝

□SD01、SD02、SD03、SD04 (第65図)

これらの溝は、調査区の西側で、段落ちの下で確認されたものである。調査区の最も西側が一番高いが、ここの面は凝灰岩が露出している。その面を約1m削り、人工的な崖面を作り出している。その崖下の平坦部で確認されたこれらの溝は、崖から流れ下る水の排水のための溝であろう。溝の横で掘立柱建物が確認されていることから、建物を水から守るものである。

出土遺物は第66図155と156である。155はSD02出土の土師器碗である。156はSD04出土の坏である。底部が円盤状に厚く、口縁部が直線的に伸びる。底部はヘラ切りである。

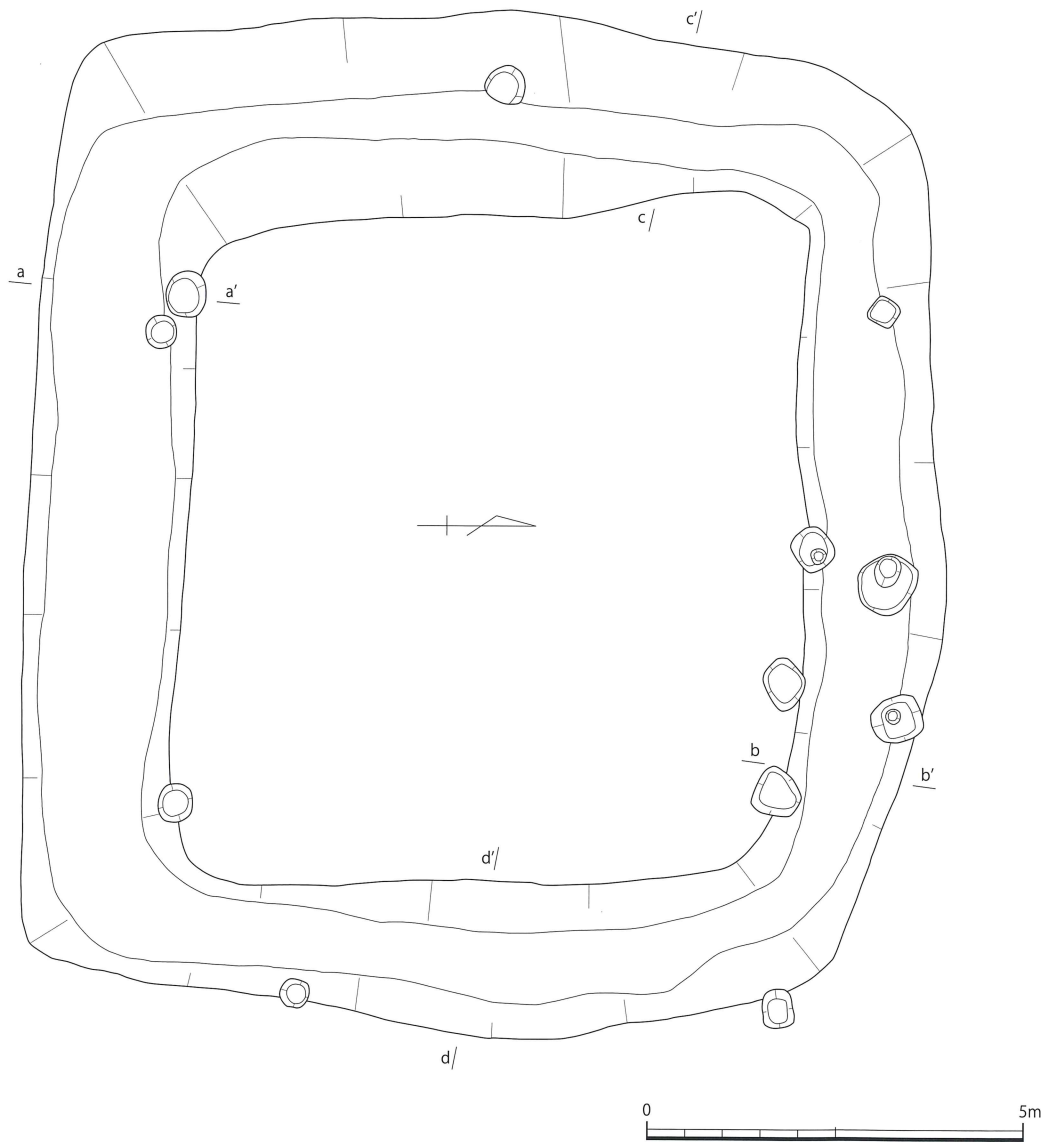


4 古墳

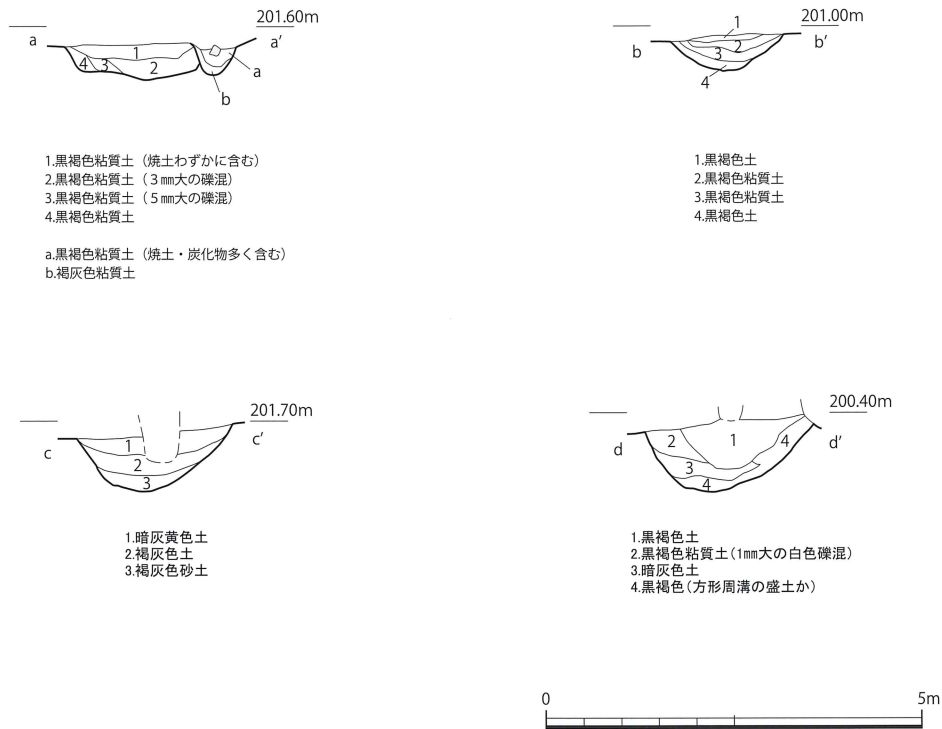
□SO01 (第67図)

調査区中央で確認された方墳である。規模は周溝内側で南北8.1m、東西8.7mの長方形となる。地形の高低方向にやや長いことになる。周溝は幅1.5から2.6mで、深さは深いところで0.95mである。主体部は確認できなかったが、周辺に大きな石が無いことから木棺直葬か、あるいは石棺程度のものであろう。周溝からは時期を示す遺物の出土は無かった。

土層断面図(第68図)からわかるように、周溝の掘り込みは、古代の遺構検出面や遺物包含層の下位になり、弥生時代後期の遺物包含層を切っているため、遺物は無いものの、時期は主体部の想定と合わせて考えると古墳時代前期から中期にかけての方墳であるとするのが最も蓋然性が高いと考える。



第67図 SO01

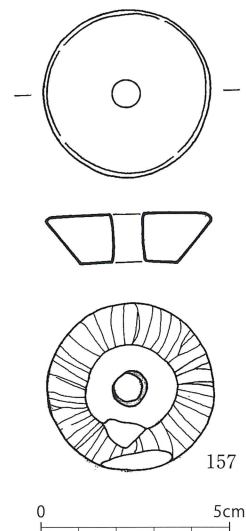


第68図 SO01土層

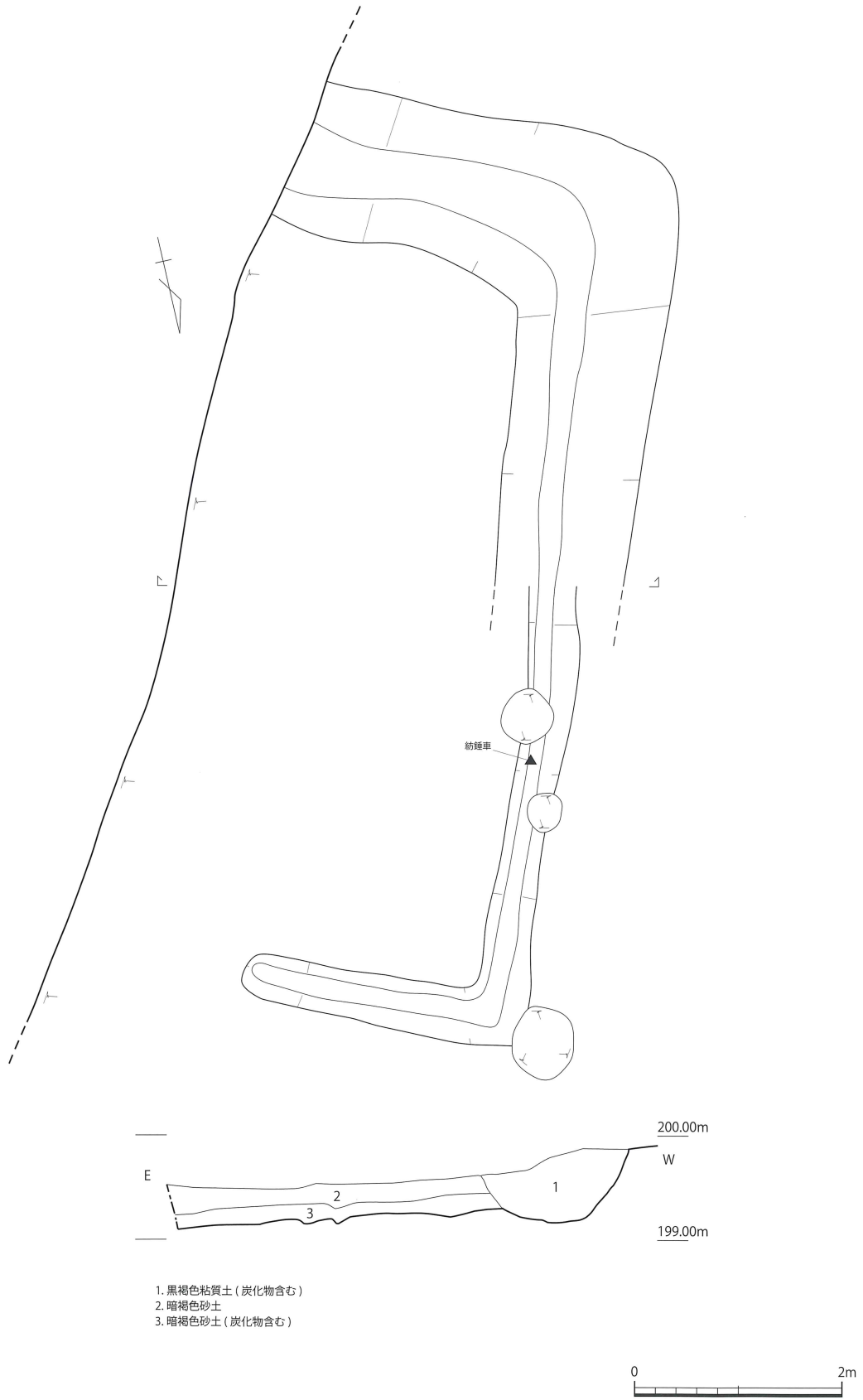
□SO02 (第70図)

SO01の東側で確認された古墳と考えられる遺構である。半分以上は調査区の外に広がる。周溝と考えられる溝は方形を呈するが、北側半分は遺構検出時に不明瞭であったため、重機によって大きく削平してしまい、溝の下部しか残っていない。その断面で溝の掘り込みがかるうじて確認できたので、改めて南側の遺構検出を行ったところ、図のように周溝と考えられる溝が確認されたものである。周溝の幅は1.0mから1.3mで、深さは0.65mである。

周溝の底面からは第69図157の石製紡錘車が出土している。下面には磨いた単位が放射状に残る。古墳時代前期のものと考えられるので、SO01の存在とも合わせて考えると、SO02も方墳と考えても良いだろう。



第69図 SO01出土遺物



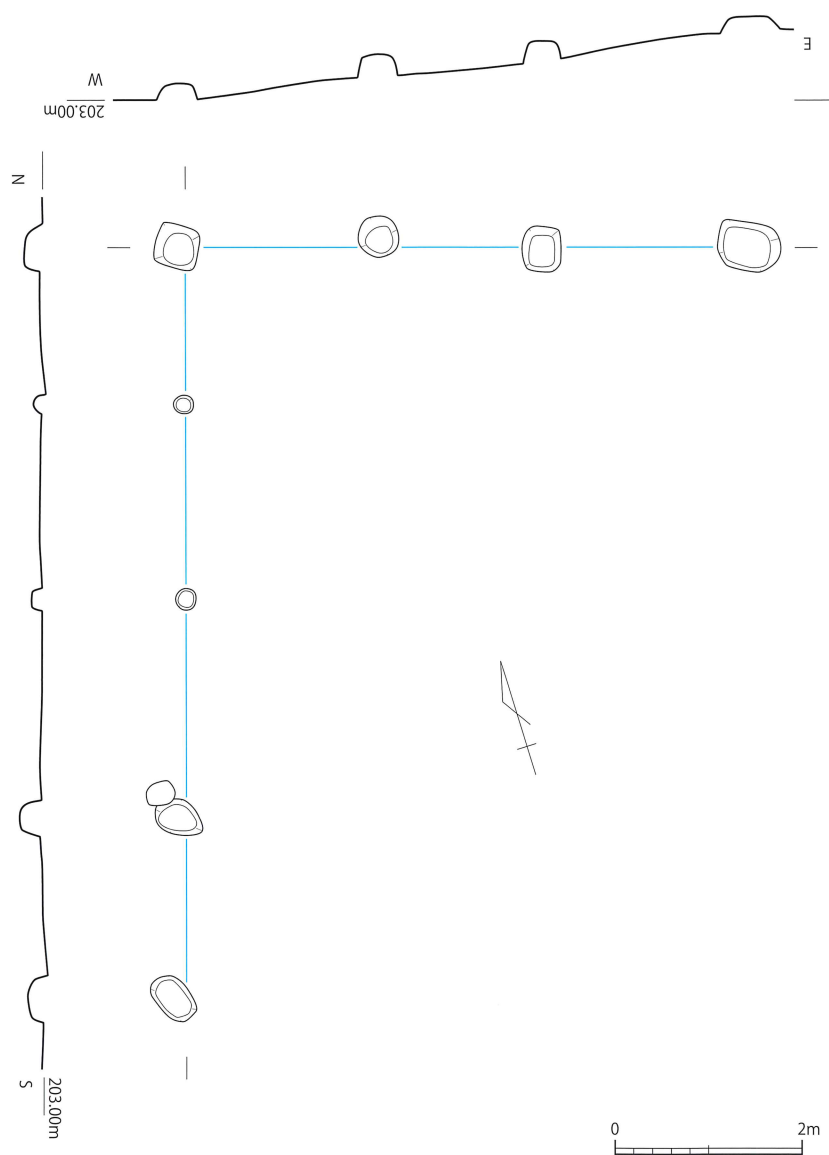
第70図 SO02

5 柱穴列

□SA01 (第71図)

SB09やSB10を囲むように検出された柱穴列である。東西方向で4本、南北方向で5本（角の柱穴は重複）確認できた。

出土遺物はなく、遺物からは時期は不明であるが、建物との関係を考えれば、第5章で触れるように10世紀後半から11世紀のものとする事ができよう。



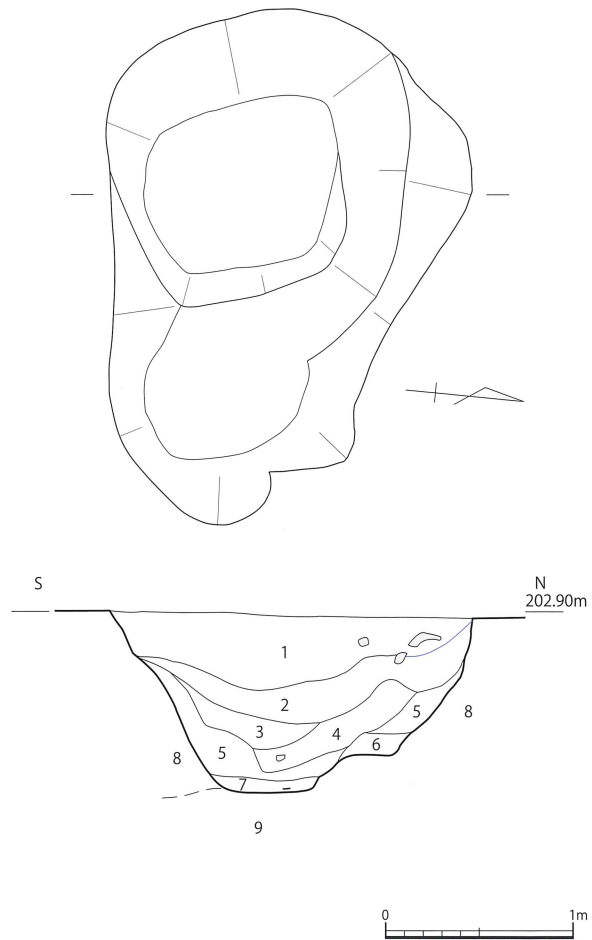
第71図 SA01

6 土坑

□SK02 (第72図)

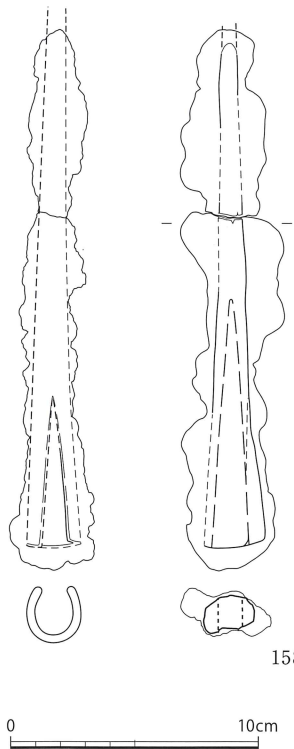
調査区の北西部で、SB04の中に収まる形で確認された土坑である。南北2.0m、東西2.5mで、深さは0.95mある。本来は一辺1.5mほどの方形であった可能性がある。堆積を見ると自然堆積であるが、滞水状態を示す黒褐色から暗褐色の粘質土が堆積しているので、溜井のような施設と考えられる。

出土遺物は第73図158の鉄器である。全体が錆化して詳細は不明であるが、レントゲン写真(図版35)を見ると、先端が尖った刃部と柄を差し込む穂袋があるので、鉾と考えられる。全長は20cm以上で、穂袋側の先端の幅は2.4cmである。この鉄器は第2層の壁側から出土している。SK02からは他に図示できる良好な資料が無いが、白磁の小片が出土しているので、加原遺跡の他の白磁例から見て、10世紀から12世紀の幅の中で収まるものと考えられる。



- 1. 黒褐色粘質土 (焼土・炭化物含む、3～5cm 大の礫 (鉄製品))
- 2. 黒褐色粘質土 (炭化物・暗褐色土ブロック混)
- 3. 黒褐色粘質土 (遺物片含む、炭化物・2～3mm 大の白色礫混)
- 4. 黒褐色粘質土 (遺物片含む、炭化物・にぶい黄褐色土ブロック混)
- 5. 黒褐色粘質土 (遺物片含む、炭化物)
- 6. 暗褐色粘質土 (Fe 含む、2～3mm 大の礫)
- 7. 黒褐色粘質土 (遺物片含む)
- 8. 灰黄褐色粘質土 → 地山
- 9. 明黄褐色、灰白色砂礫 → 地山

第72図 SK02

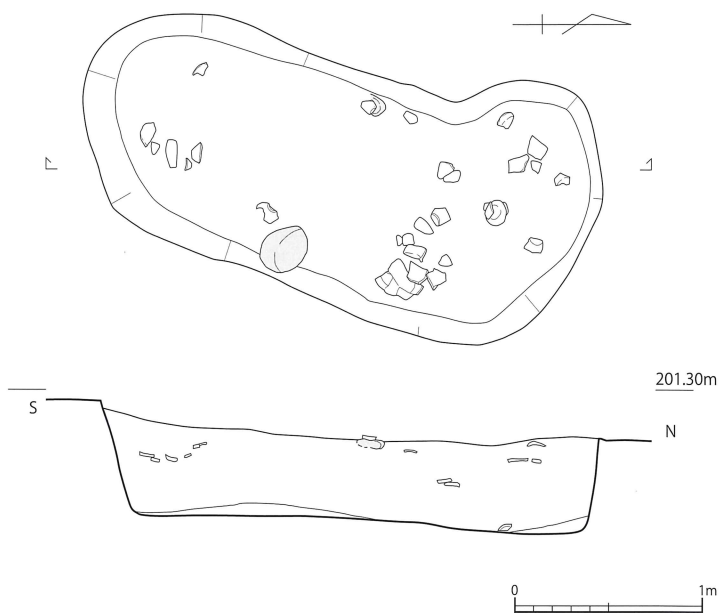


第73図 SK02出土遺物

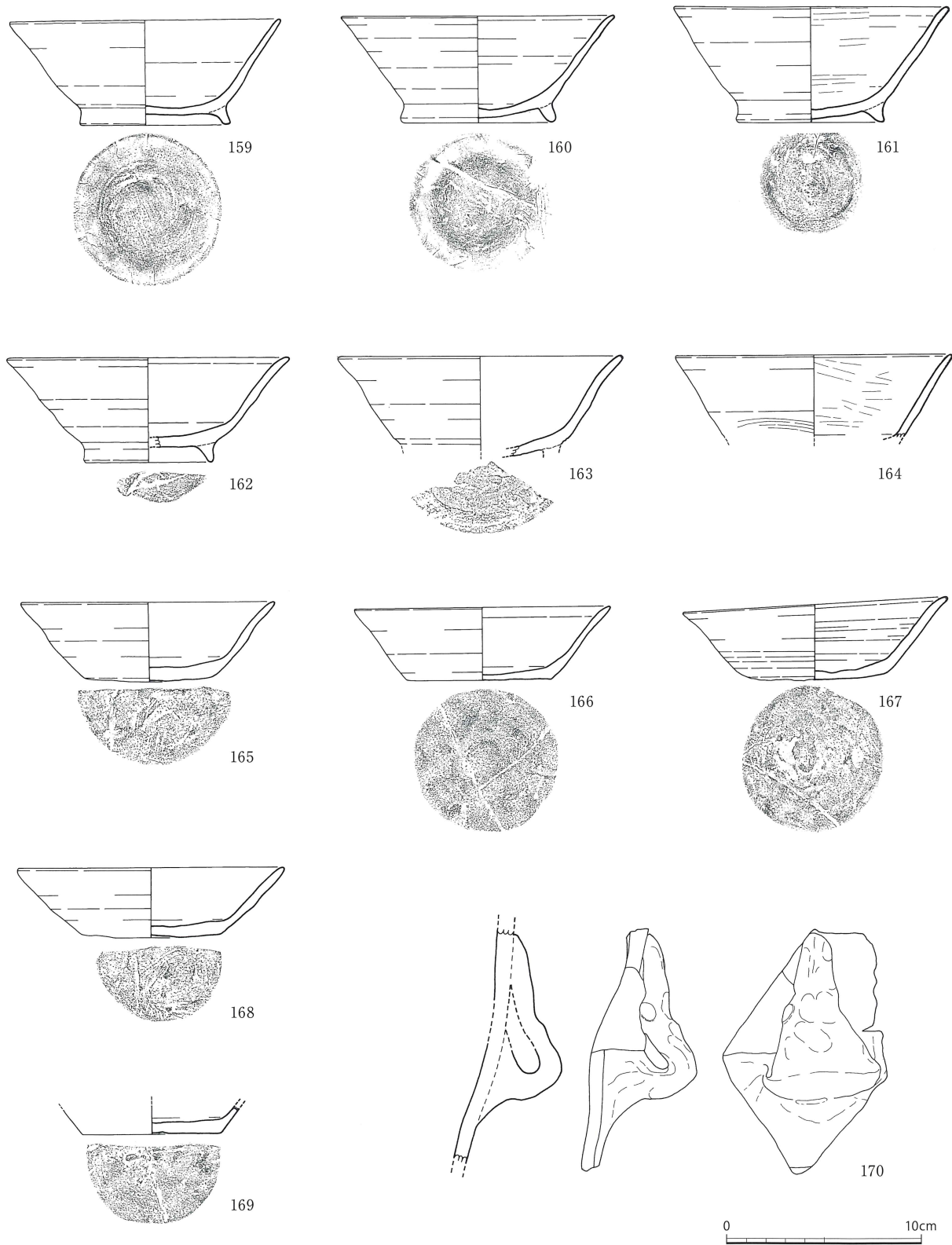
□SK03 (第74図)

調査区の北東部、SO01の周溝上で検出した土坑である。南北方向2.75m、東西方向1.15mで、深さは0.5mある。埋土上層から土器が多量に出土した。一括で廃棄されたと思われる。

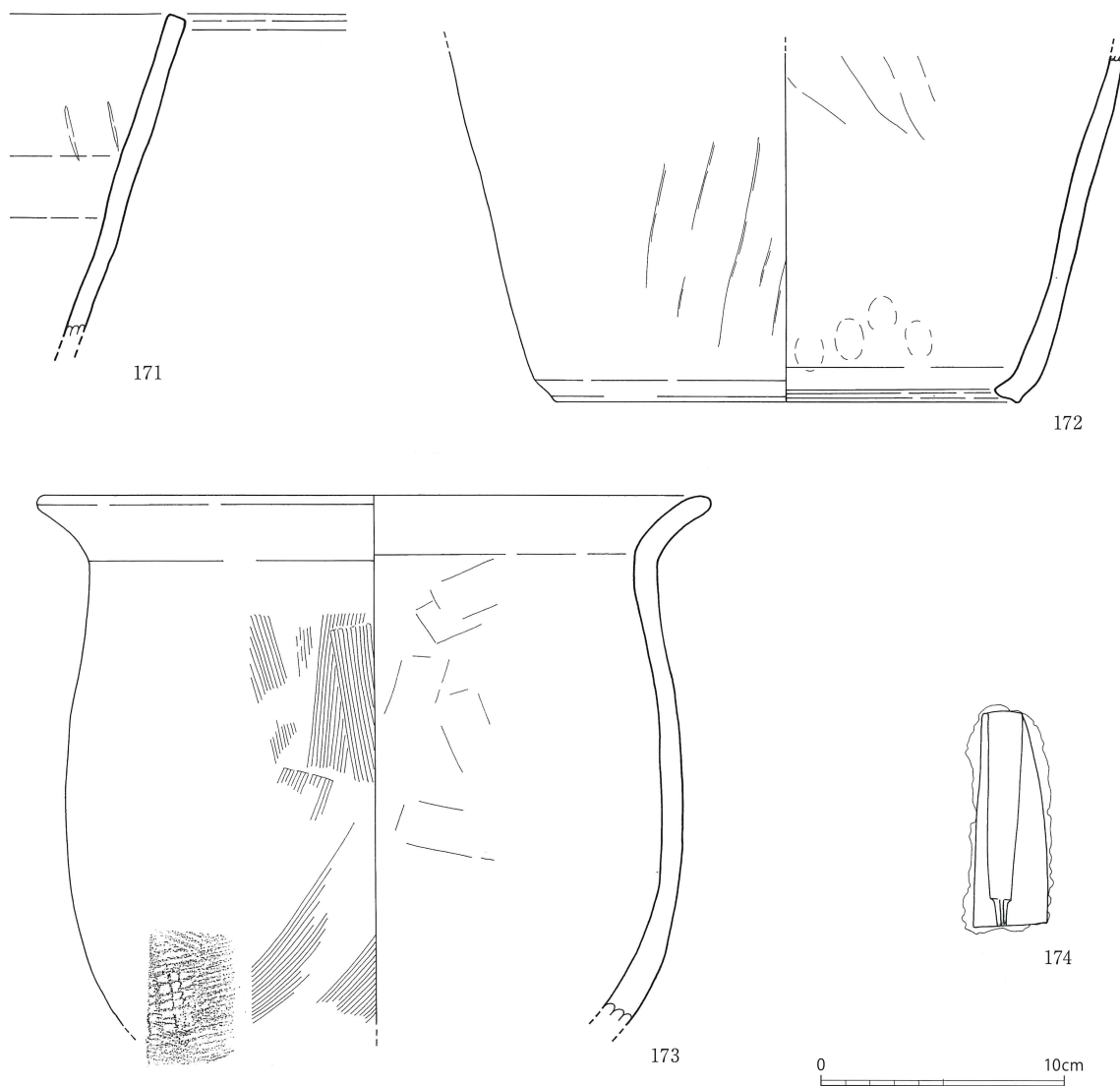
出土遺物は第75図159から第76図174である。159から162は土師器碗である。163と164は黒色土器A類である。これらは口径14.0cmから15.0cmで、ほぼ直線的に開くという形態も類似している。黒色土器は内面にミガキが施されるが、土師器碗は内外面ともナデ調整である。165から169は坏。やや底部が突出気味のものから平底のものまである。170は縦方向の把手が付く甌か。171と172は甌、173は甕である。174は鉄器で鏃と考えられる。



第74図 SK03



第75図 SK03出土遺物 (1)



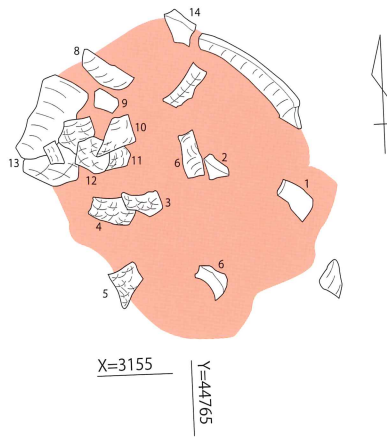
第76図 SK03出土遺物 (2)

□SK04 (第77図)

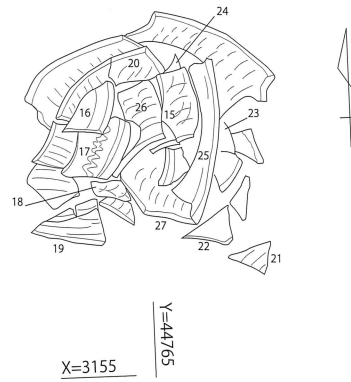
調査区の西側で確認された土坑で、内部には須恵器大甕が据えられていた。上部には焼土が堆積していた。

出土したのは第77図175と176の須恵器甕で、口縁部は肥厚するもの(175)と二重口縁状に伸びるもの(176)がある。両者ともにやや稚拙な櫛描き波状文が施されている。

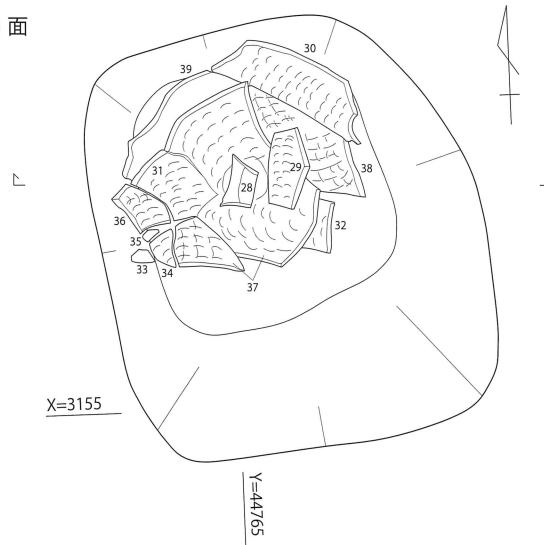
第1面



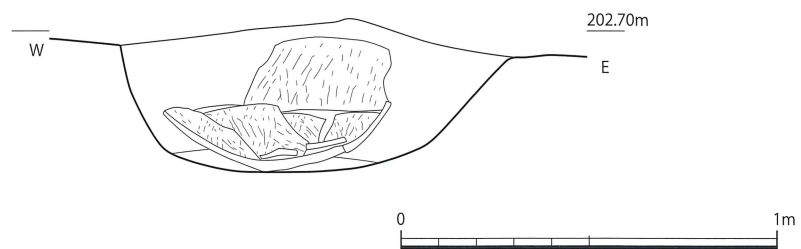
第2面



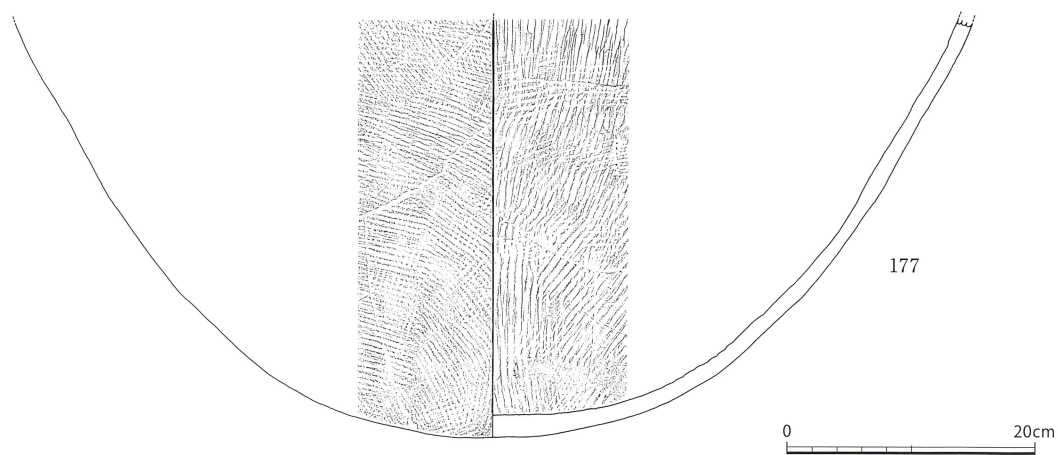
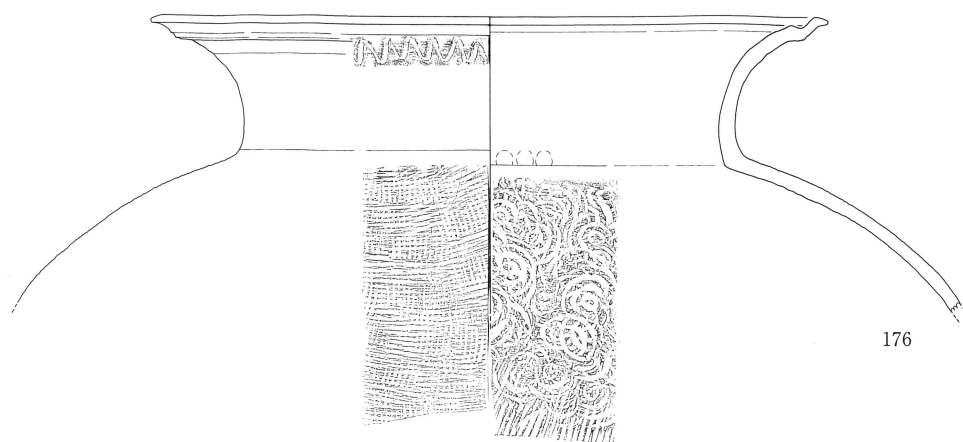
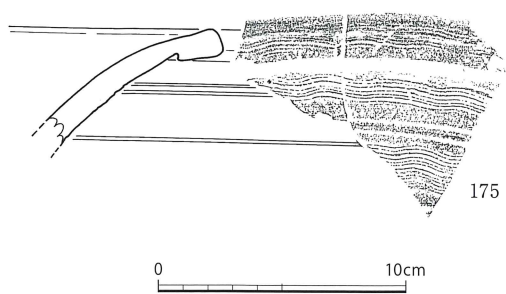
第3面



第3面見通し断面図



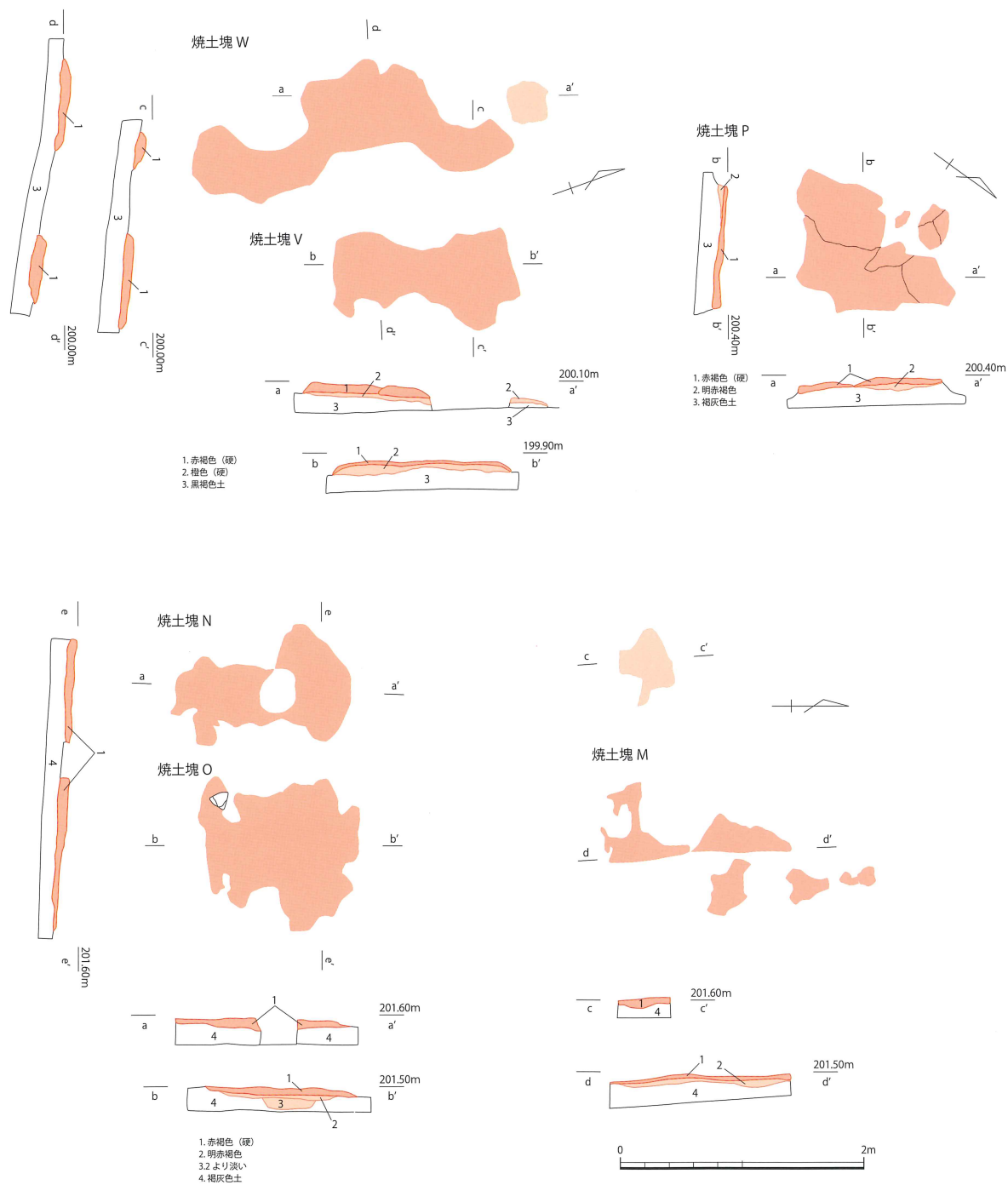
第77図 SK04



第78図 SK04出土遺物

7 焼土面

調査区の東側では、黒褐色粘質土層中に焼土の広がる面があった。焼土はある程度まとまっており、中に壁土の焼けたと思われるスサ入りのブロックも多く含まれていた。面をなすように広がる部分もあり、焼けた壁がそのまま地面に倒れているという状況であった。この調査区東側は、古代の掘立柱建物が5棟確認されたところで、これらが(切り合いがあるのですべてでは無いが)火災にあったことを示すものであろう。半裁した状況を第79図に示す。焼土中には土器片が多く含まれており、「包含層」出土遺物のところでまとめている。



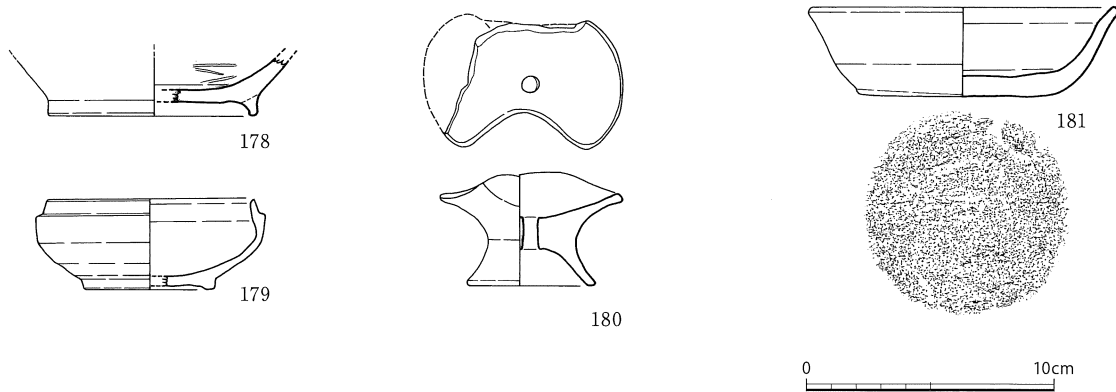
第79図 焼土面

8 ピット出土遺物

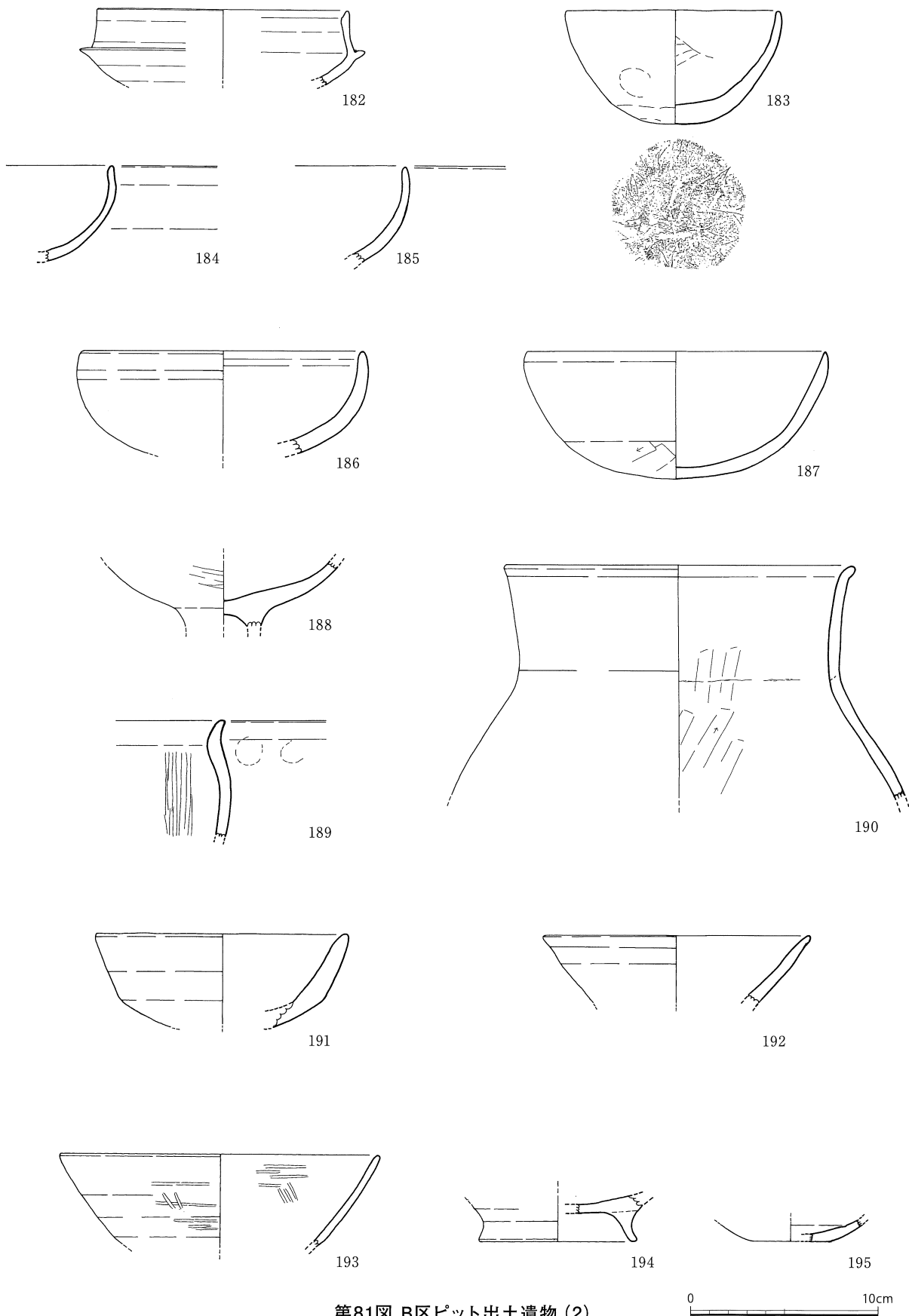
ここでは、建物に帰属しないと考えられるピットから出土した遺物を説明する。第80図178から第82図209である。一括のものがわかるように各ピットごとに並べている。178は黒色土器碗である。内面にミガキが施される。179から181は一括資料。179は越州窯青磁の合子である。包含層などで出土した越州窯青磁碗とは発色、胎土とも異なる。外面は被熱で輝きを失っているが、内面は薄青緑色である。釉薬は外底面まですべて掛かっている。底部外面は二次的に溶解した痕跡がある。器壁は薄く、シャープな作りで口唇部は尖る。胎土は灰白色で黒色粒が僅かに含まれている。180は内外面とも黒色に燻された高台付きの小皿で、底部には焼成前の穿孔がある。体部を折っており、耳皿として使われている。181は土師器坏で、口径は12.0cm、底部ヘラ切りである。

182から190は一括資料。182は須恵器坏身で、口縁部内面に段があり、内傾しながら高く伸びる。183から187はいずれも鉢で、185内外面とも赤彩が施される。188は高坏。189と190は甕で、190は口縁部の伸びに特徴がある。191は土師器碗、192は土師器坏である。193は黒色土器A類の碗で内外面ともミガキが施される。194は黒色土器A類の碗。内湾しながら開く。195は白磁の小皿。底部は平底で露胎。内面に沈線状の段を有する。発色はやや黄色みを帯びた乳白色。山本分類の白磁小皿VI類。

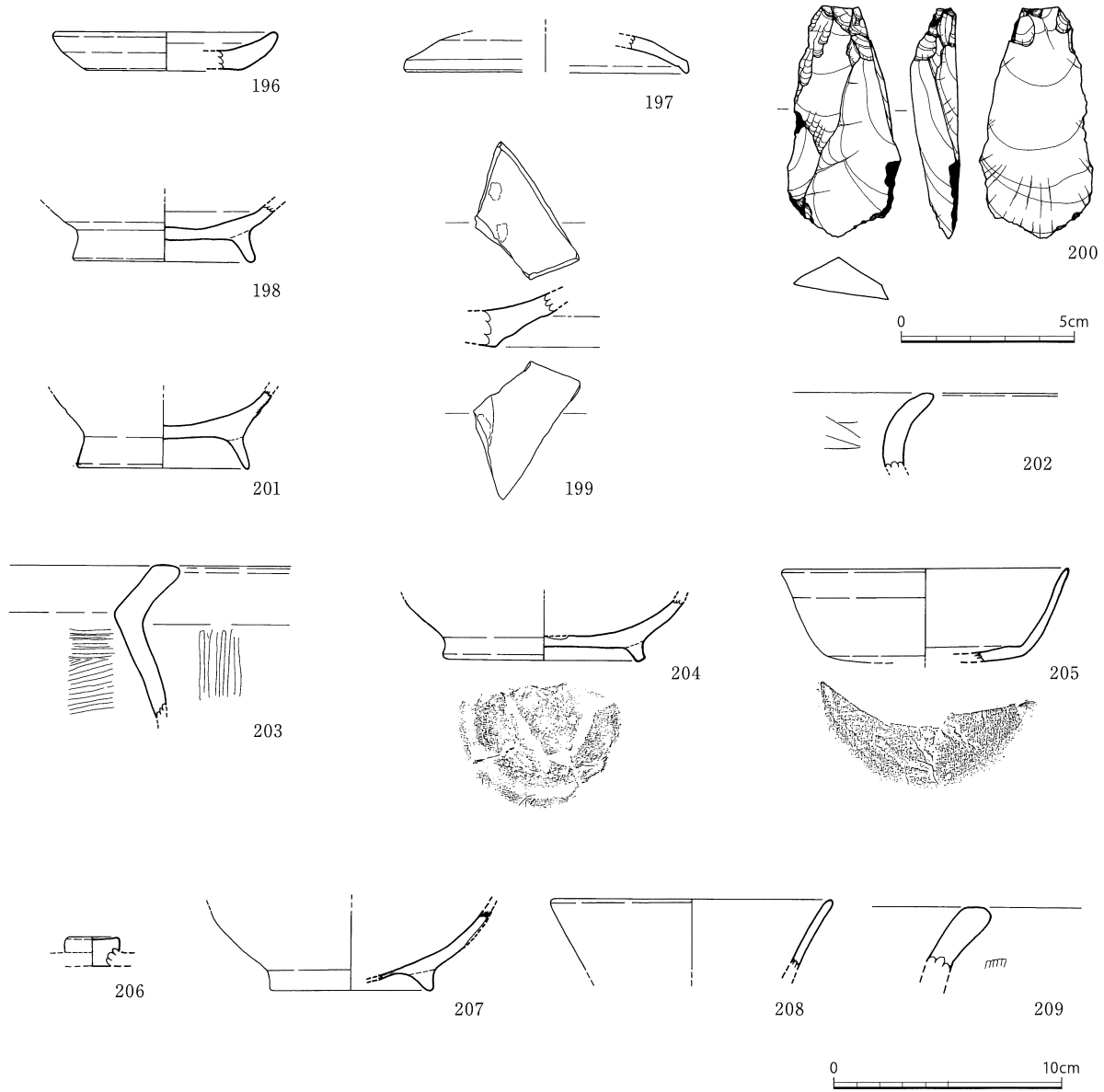
196は土師器小皿で、底部の切り離しは不明。197は須恵器の坏蓋で、かえりが消失しており、僅かに屈曲部がある。198と199は同一ピット出土。198は黒色土器A類の碗。199は越州窯青磁の碗の底部。内面見込みに目跡が2カ所付く。外面は体部上部のみに施釉。被熱は受けておらず、発色は黄色みがかかった鶯色をしている。胎土は灰白色で緻密である。200は流紋岩製の剥片である。全長は6.5cm。201は土師器の碗で、高台が比較的高い。202、203は土師器甕。204は黒色土器A類の碗。205は土師器坏、206は土師器の坏蓋のボタン状摘まみである。207は土師器碗、208は土師器坏、209は土師器甕である。



第80図 B区ピット出土遺物 (1)



第81図 B区ピット出土遺物(2)



第82図 B区ピット出土遺物(3)

9 包含層出土遺物

第83図210から第90図328が包含層出土遺物である。210から231は須恵器。210は坏蓋で、天井部に「×」のヘラ記号がある。211も坏蓋で、返りは無く端部が小さく屈曲する。212は鉢で、体部中央に2条の沈線が巡る。213は坏で、底部は平底。214は縦に把手が付く胴部破片で、おそらく長頸壺となろう。外面に格子のタタキがある。215は胴部破片。216はひずみ大きい、壺の胴部と考えられる。217から228は甕の破片。218と219、226には口縁部から頸部にかけて櫛描き波状文が施される。229は把手が縦方向に付く壺の胴部。230は壺の高台部。231も壺の底部か。第85図232から245は越州窯青磁である。いずれも碗の破片と思われる。口縁端部が残っている破片の内、輪花になるものは234のみである。232はやや厚手の平底で、見込みに10カ所、高台に11カ所の目跡を残す。体部の下から底部は露胎である。233はほぼ同じ形態を呈するもので、同様の不整円形の目跡が見込みと高台部に付く。234は輪花になる口縁部。235から244は口縁部から体部の破片で、245は底部の破片である。全体的に釉薬が不均一に掛かり、発色も微妙に変化している。ただし、多くは2次的な被熱を受けており、当初の色を失っている。釉薬が底部まで及ばず、胎土は僅かに黒色粒を含むことから大部分はいわゆるII類である。

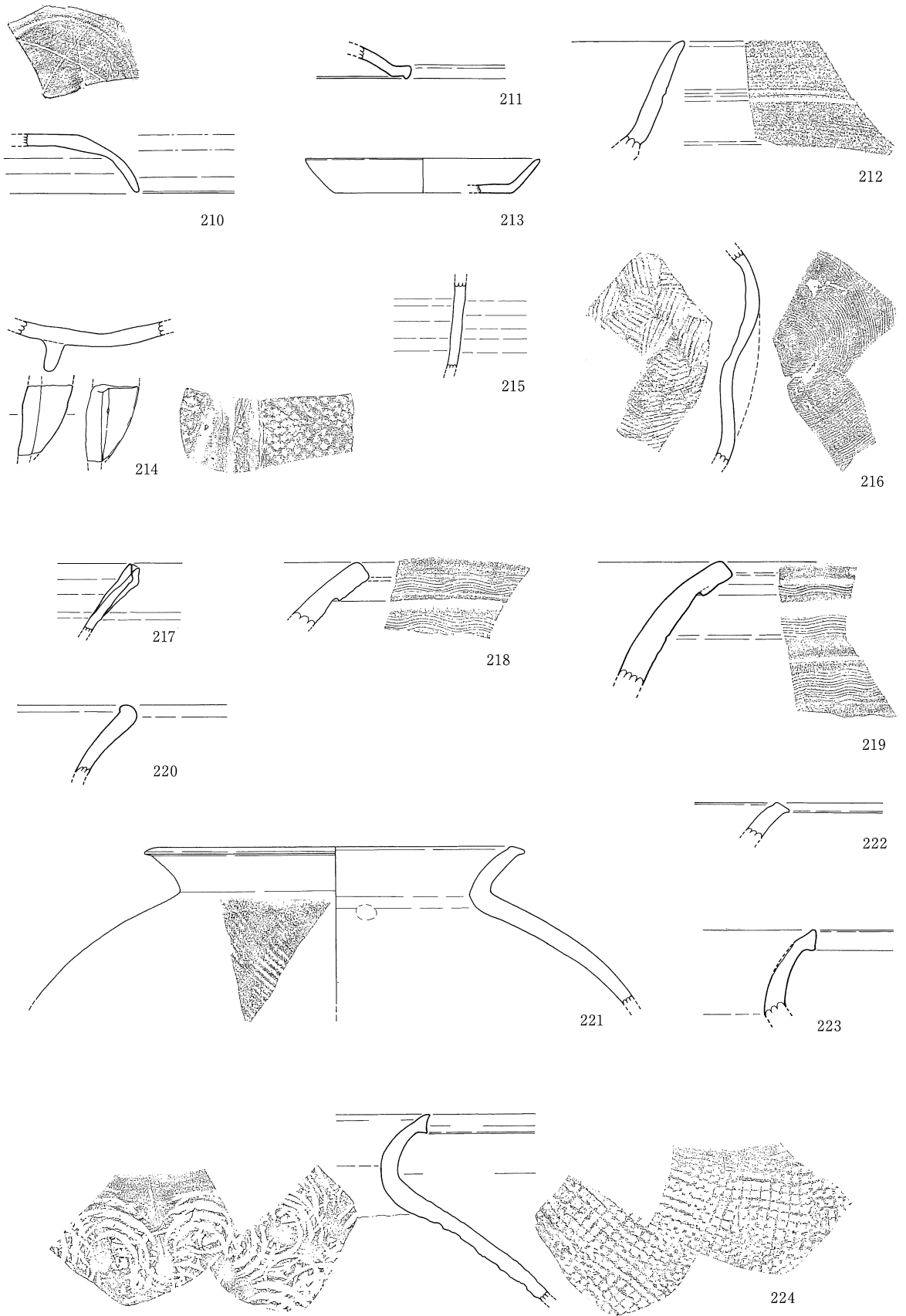
第86図249から260までは白磁である。249は小皿で、250から260が碗である。250から254は口縁部が小さな玉縁となる。255は口縁端部が小さく折れる。256は内面に段を持つ。258は山本文類V類、259は同IV類の底部。

262は須恵質の碗か。265、266、268、269は土師器の碗。268は高台が細くシャープであり、中世のもの。267と270から276は黒色土器A類の碗。271は内面回転ヘラミガキ。276は鏝状の帯を巡らせるもの。

第87図277から314までは土師器である。277は小皿で、底部は摩耗のため切り離しは不明。278から286は坏である。口径の最大のもは285で、16.0cmある。他のものは体部調整はナデのみであるが、286は下半にヘラ削りの痕跡を残す。さらに口唇部内面に稜を持っている。胎土は精選され、発色は明橙色である。287は碗である。288と289は古墳時代の土師器鉢である。290は大型の鉢。291は耳土器で、底部は高台状となっている。292は低脚の高坏である。

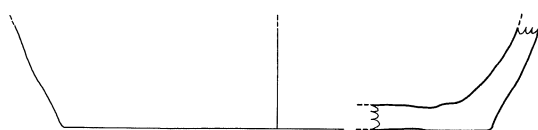
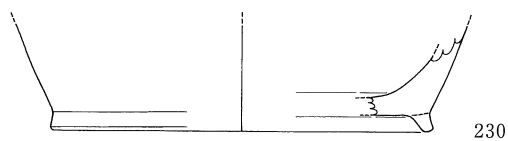
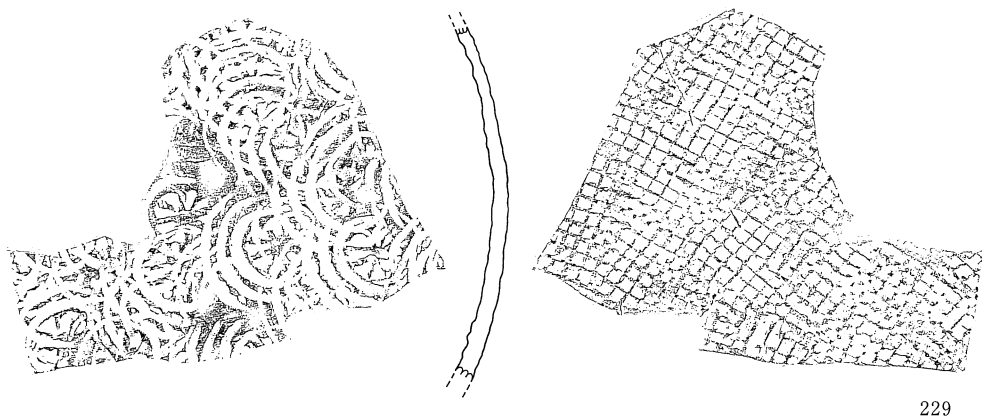
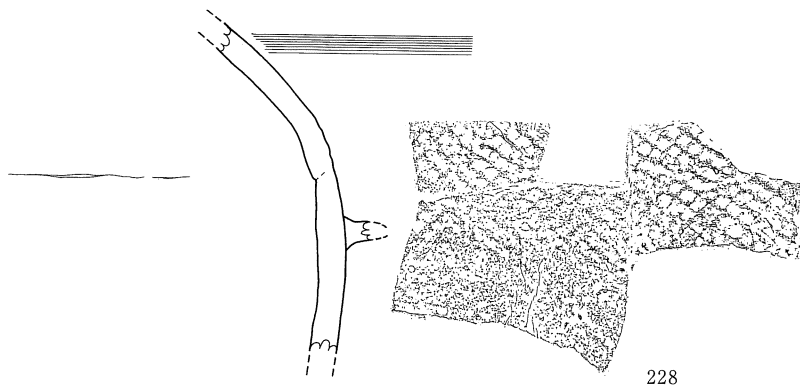
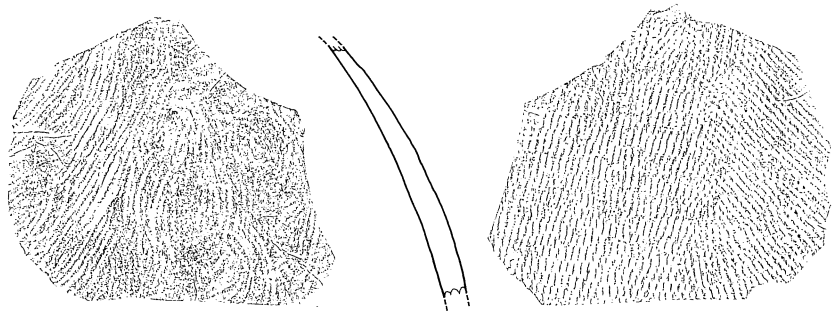
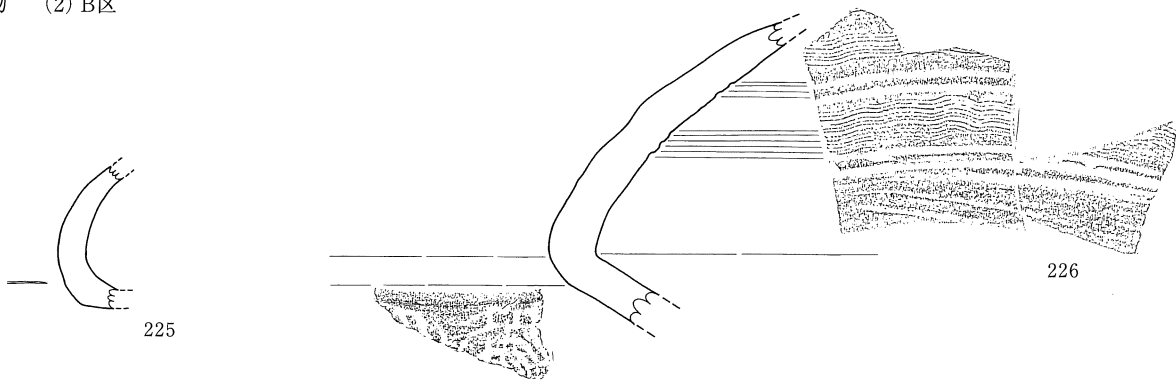
第88図293から第89図310は甕である。293から297は古墳時代のものであろう。古代と思われるものにも口縁部形状はバラエティがある。300は一段の受けがある口縁部、301は内湾する口縁部で、いずれも器種は不明。312は大きく開く脚。313と314は甗である。315は壺の頸部か。ヘラ記号のような一条の線を刻む。316は陶器で、下部で屈曲する。317は焼締陶器の底部。備前焼か。318と319は素焼きの土錘。320は鉄刀、321と322は鉄釘である。

第90図323は滑石製石鍋の口縁部。324は結晶片岩製、325は安山岩製の砥石。326は結晶片岩製の砥石。327は結晶片岩の叩き石。328は安山岩製の石斧である。



第83図 包含層出土遺物 (1)

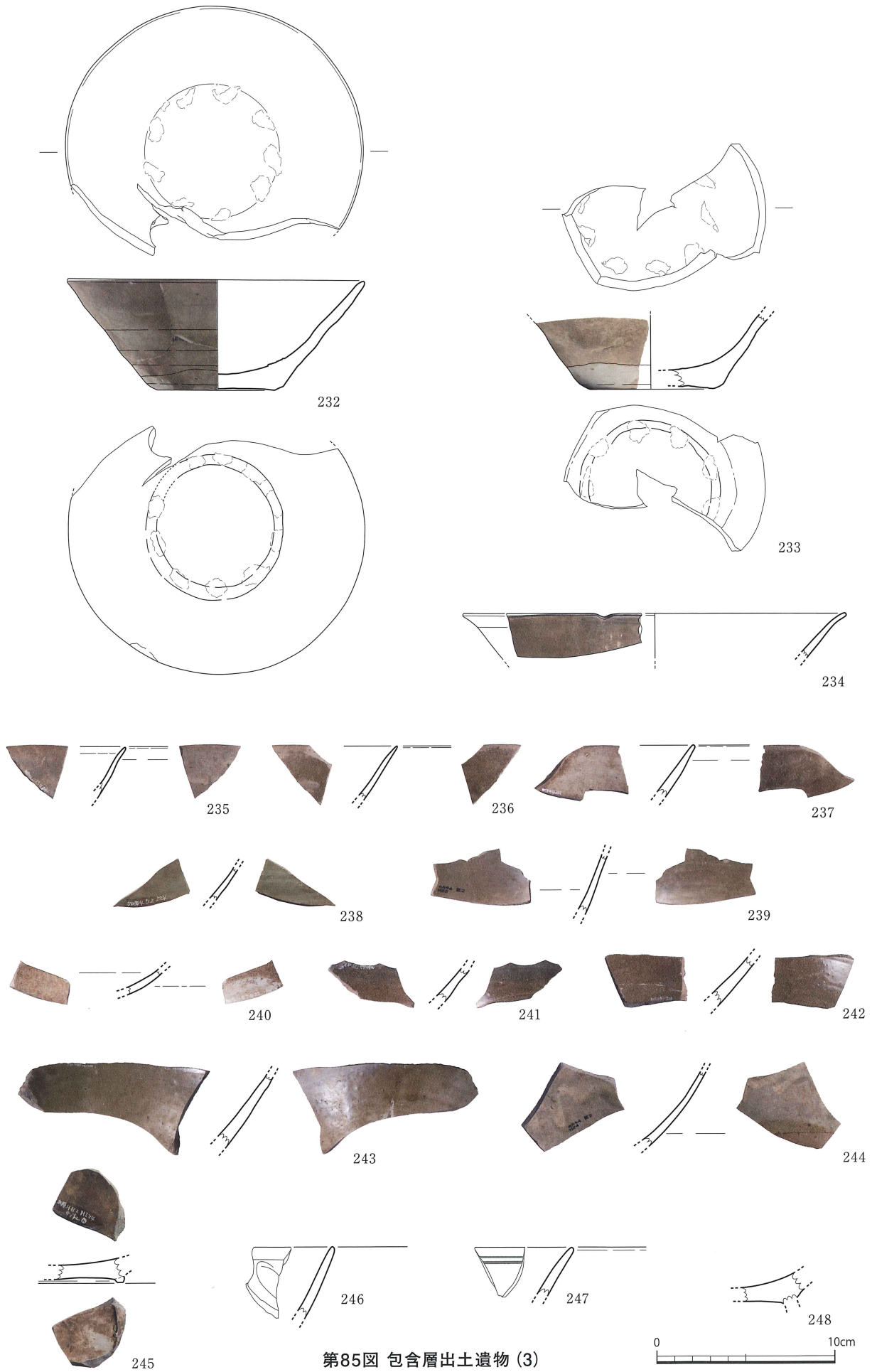
0 10cm



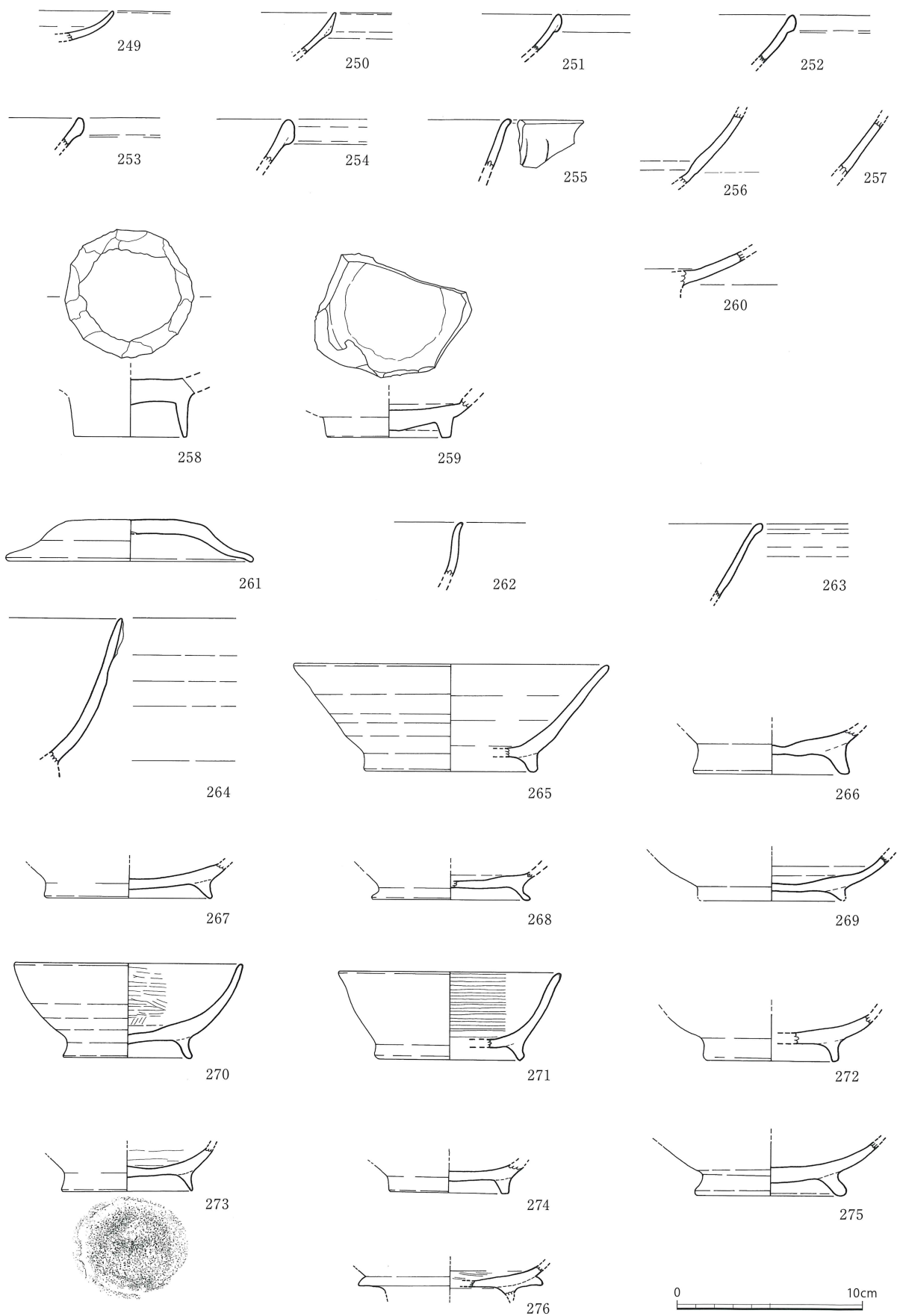
0 10cm

第84図 包含層出土遺物 (2)

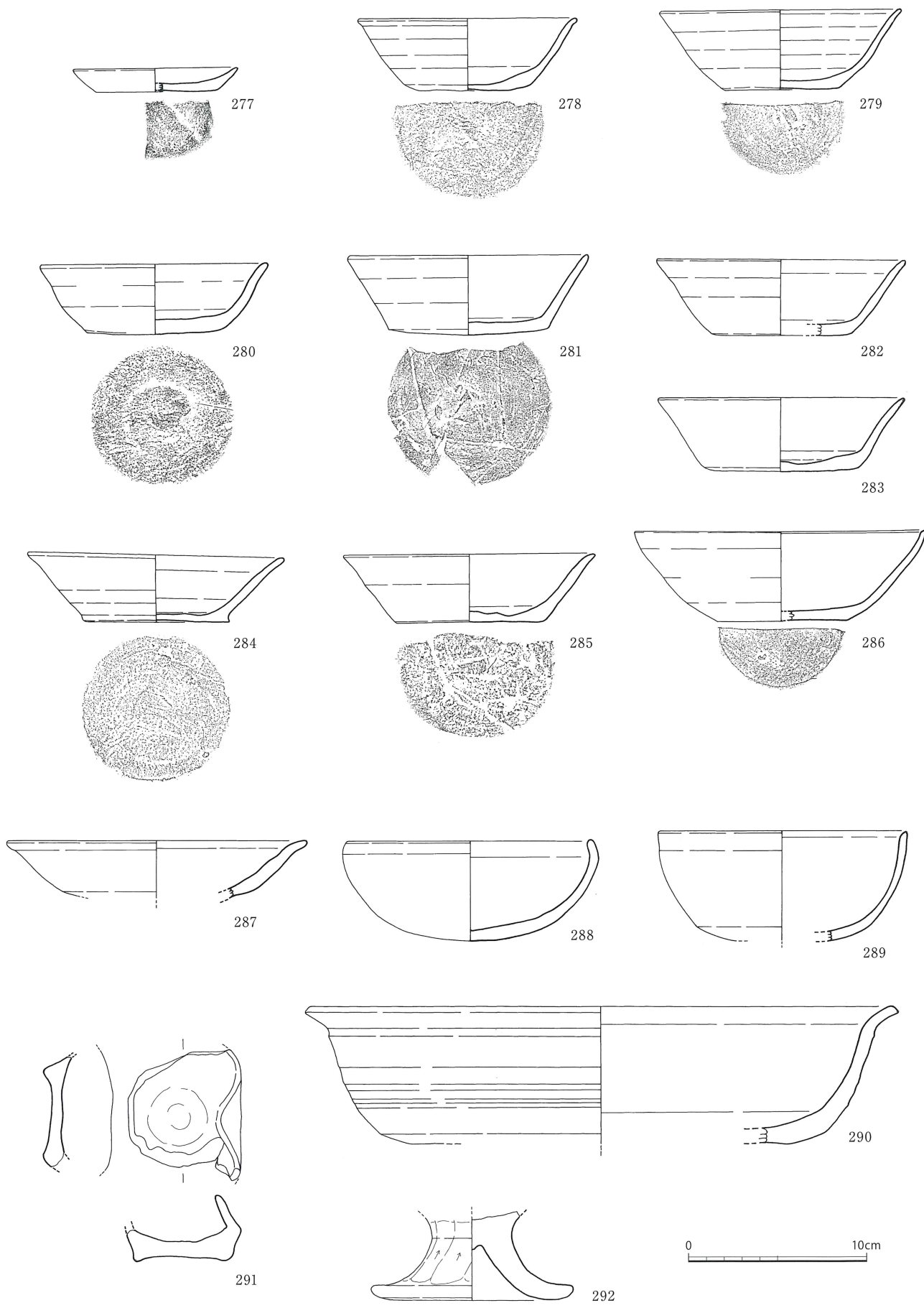




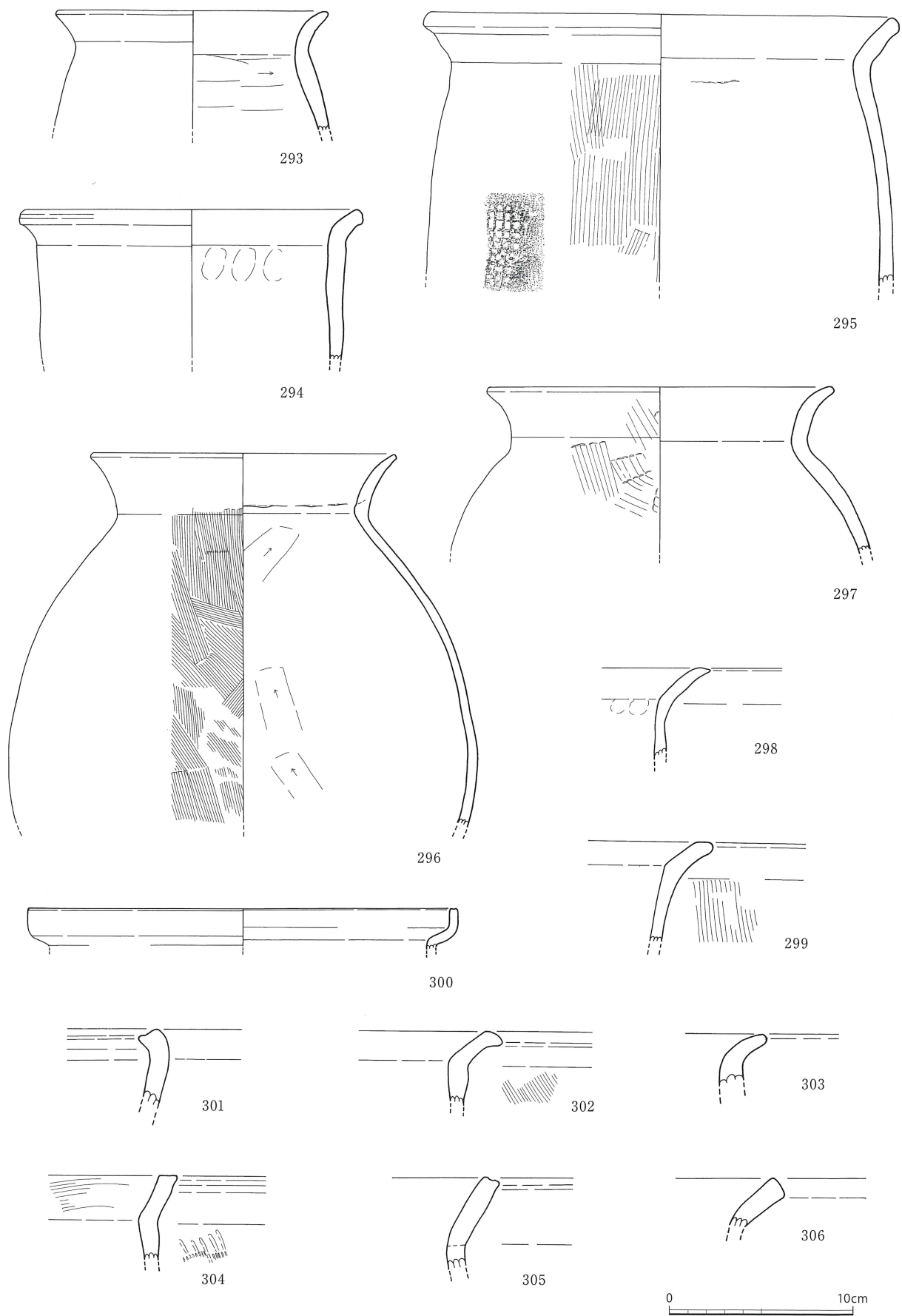
第85図 包含層出土遺物(3)



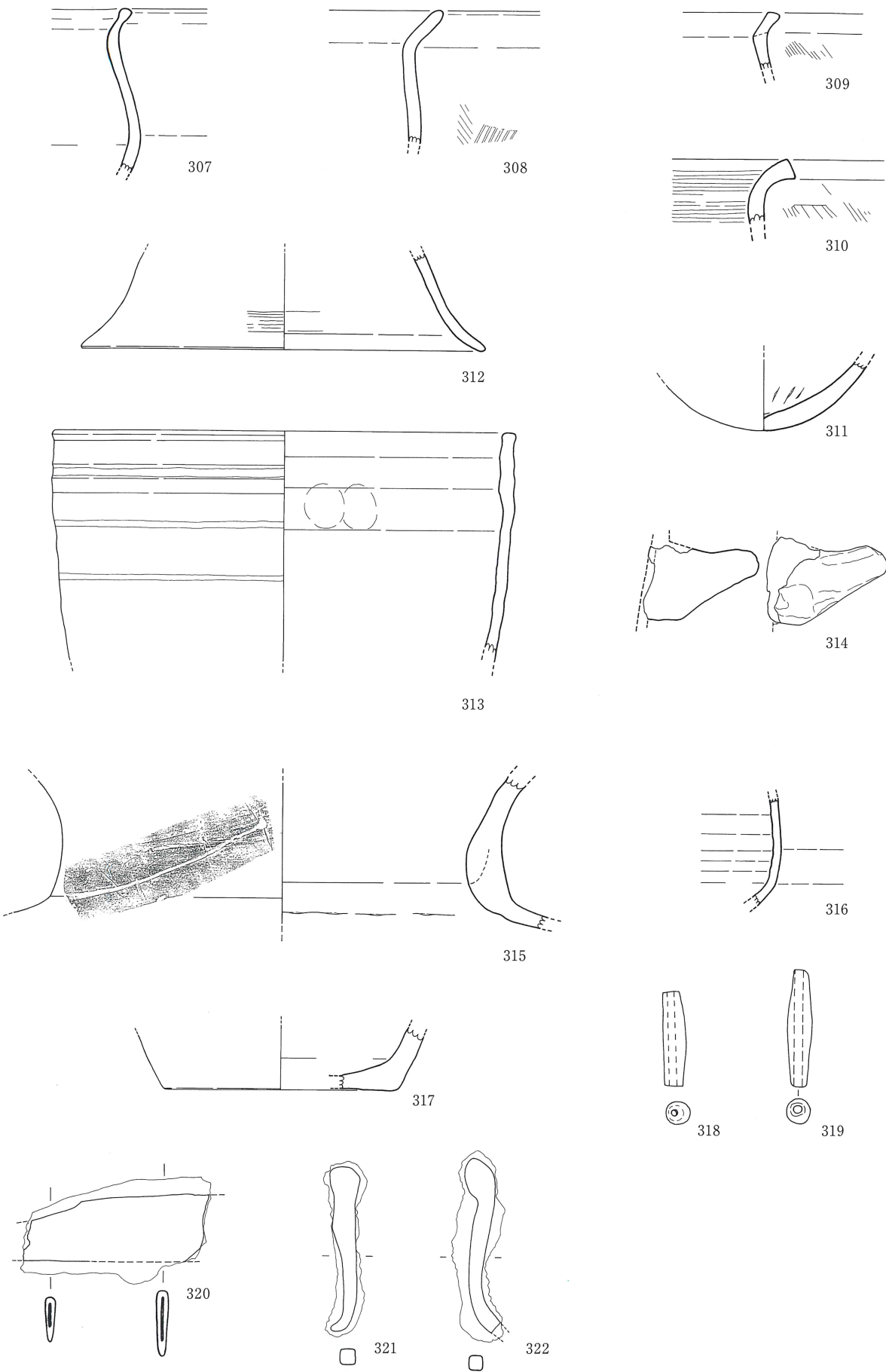
第86図 包含層出土遺物(4)



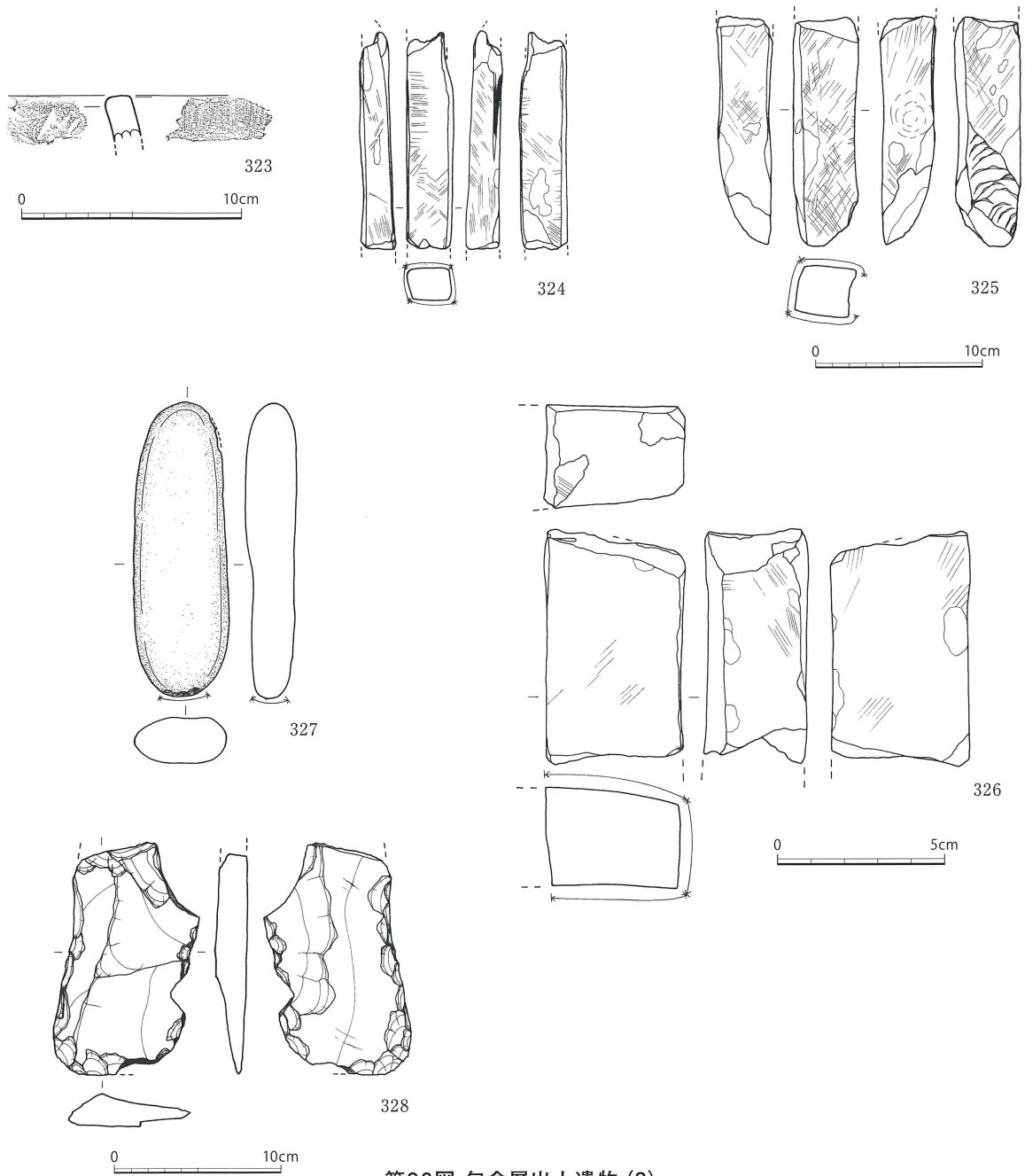
第87図 包含層出土遺物 (5)



第88図 包含層出土遺物 (6)



第89図 包含層出土遺物 (7)



第90図 包含層出土遺物 (8)

10 土層説明

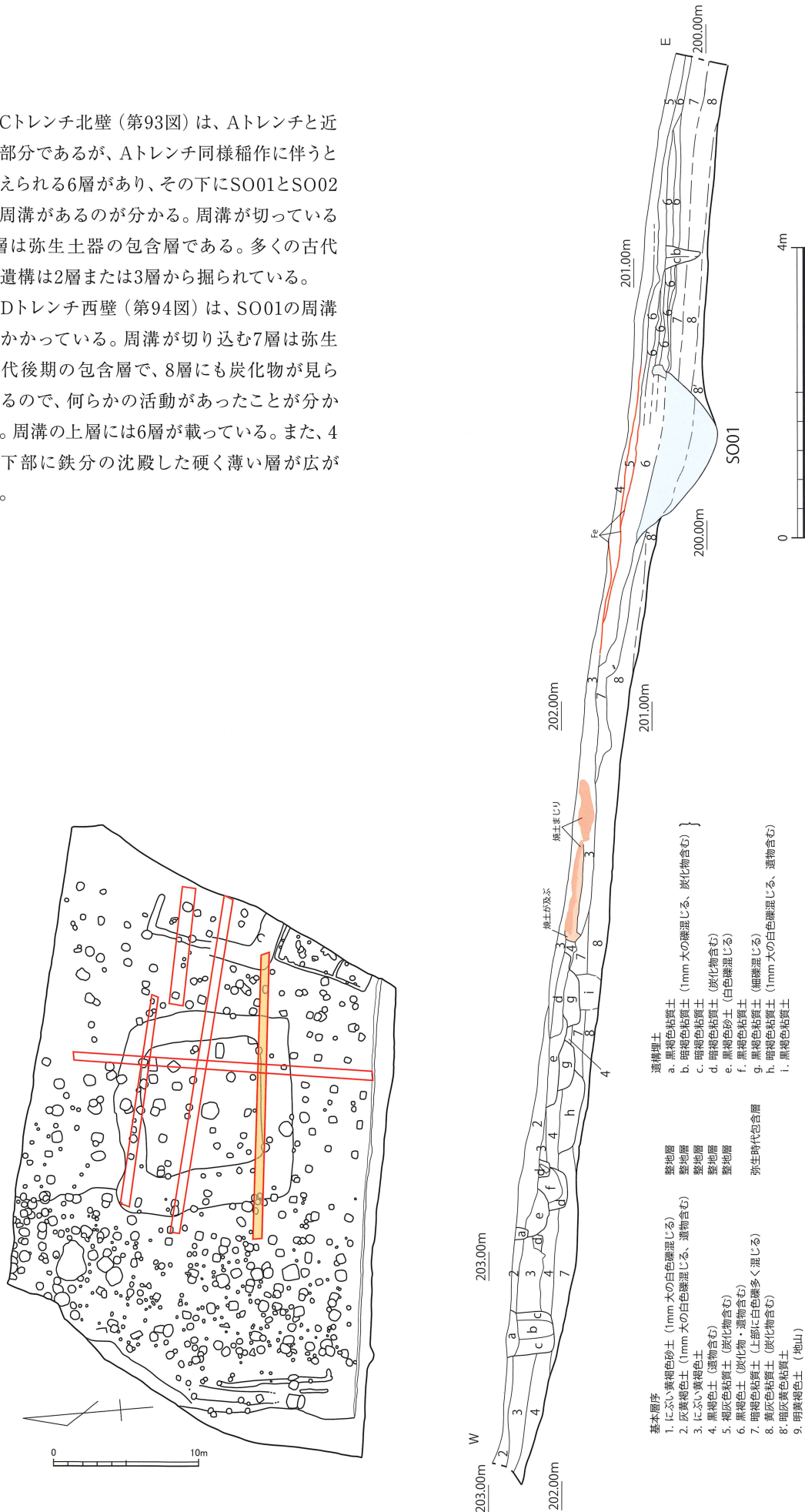
ここでは、6カ所でとった土層の説明をする。第91図から第94図である。いずれも調査前の耕作土を含む上層は除去している。

Aトレンチ北壁 (第91図) は、古代の遺物が包含される層 (3層、4層) が露出した状態である。その下部には中央付近で部分的に焼土の広がりがある (焼土面)。また、下側 (東側) は、SO01の周溝が6層の下から掘り込まれているのが分かる。周溝の上部付近では酸化鉄の沈殿層が認められた。また、5層や6層は肉眼で水田耕作土の可能性があったので、プラントオパール分析をおこなった (詳細は第4章)。その結果、イネの植物珪酸体が多量に含まれることがわかった。古墳構築後に一時期稲作を行ったことが想定できる。

Bトレンチ南壁 (第92図) は、7層下部が平坦になっているのがわかる。これは整地の跡である。その下部にはA、Bトレンチ同様6層があり、その下の7層からは弥生時代後期の土器が出土している。

Cトレンチ北壁(第93図)は、Aトレンチに近い部分であるが、Aトレンチ同様稲作に伴うと考えられる6層があり、その下にSO01とSO02の周溝があるのが分かる。周溝が切っている7層は弥生土器の包含層である。多くの古代の遺構は2層または3層から掘られている。

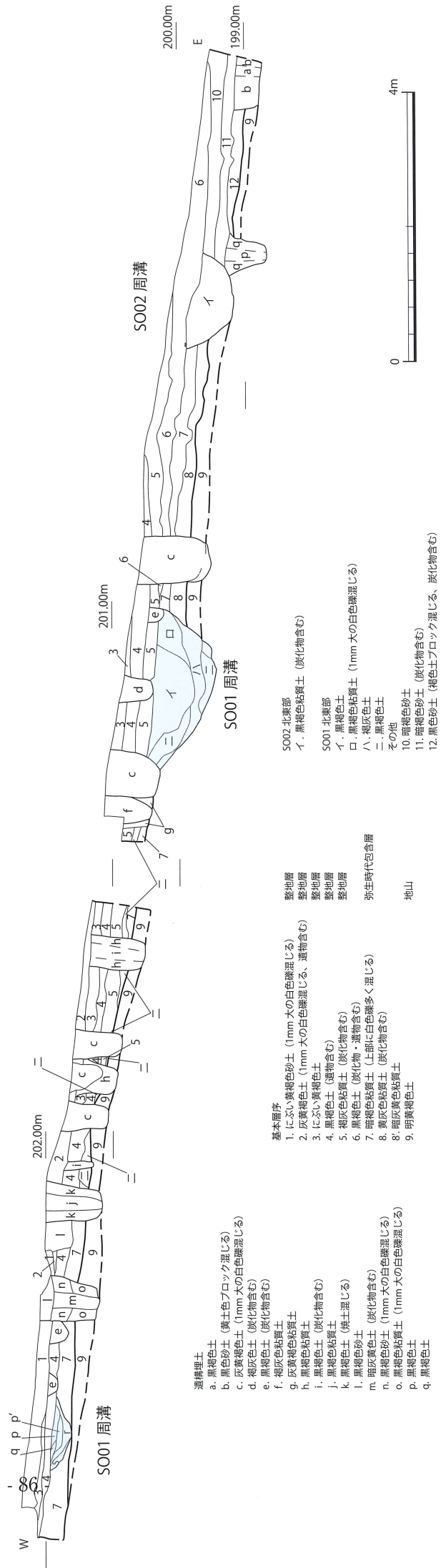
Dトレンチ西壁(第94図)は、SO01の周溝がかかっている。周溝が切り込む7層は弥生時代後期の包含層で、8層にも炭化物が見られるので、何らかの活動があったことが分かる。周溝の上層には6層が載っている。また、4層下部に鉄分の沈殿した硬く薄い層が広がる。



※SO01を認識する前だったため、周溝をとらえられていない。遺構埋土 h を中心とした部分が周溝となるものである。



第92図 Bトレンチ土層図



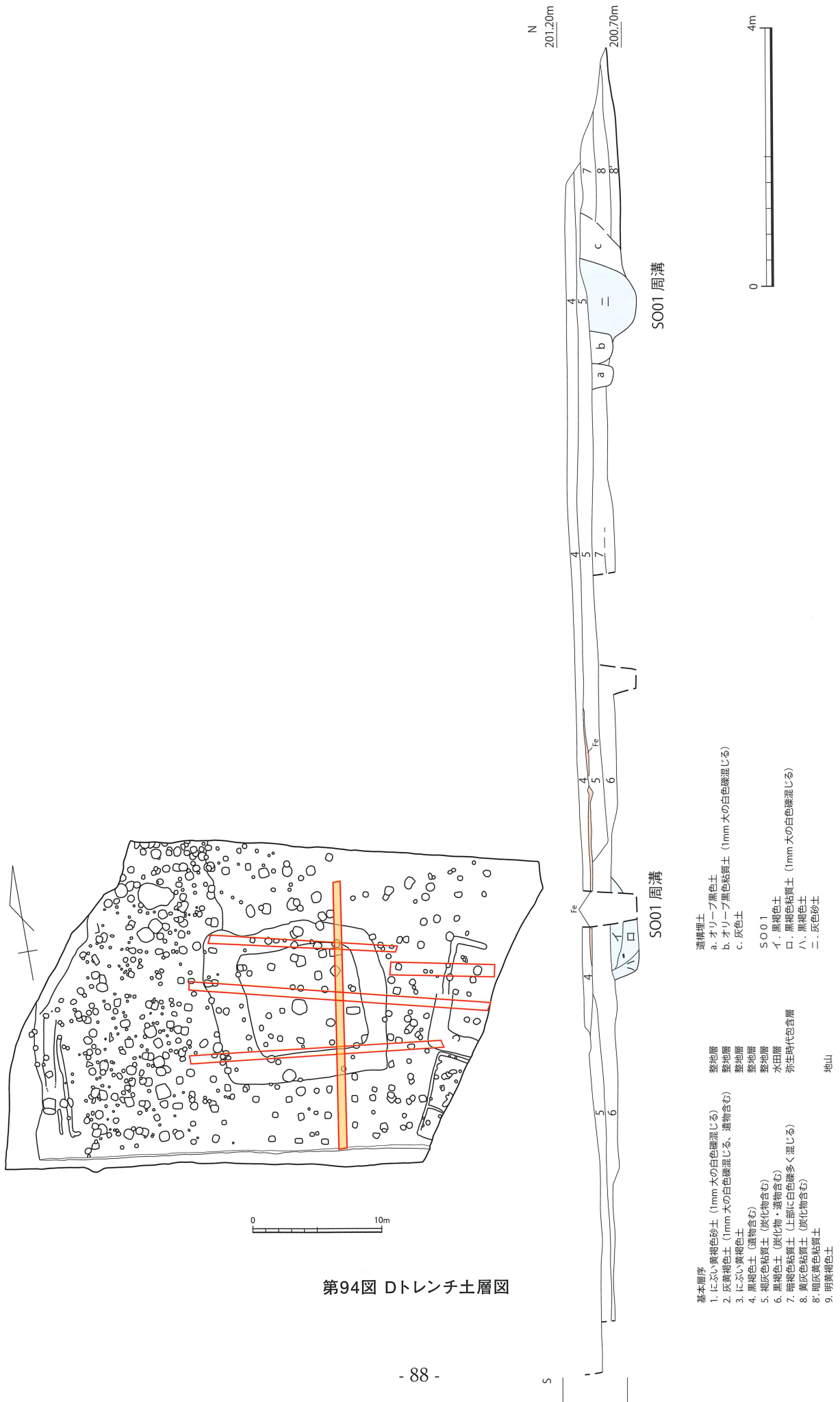
- 遺構埋土
- a. 黒褐色土
 - b. 黒色砂土 (黄土色ブロック混じる)
 - c. 灰黄褐色土 (1mm 大の白色礫混じる)
 - d. 褐灰色土 (炭化物含む)
 - e. 黒褐色土 (炭化物含む)
 - f. 褐灰色粘質土
 - g. 灰黄褐色粘質土
 - h. 黒褐色粘質土
 - i. 黒褐色土 (炭化物含む)
 - j. 黒褐色粘質土
 - k. 黒褐色土 (黄土混じる)
 - l. 黒褐色砂土
 - m. 暗灰黄色土 (炭化物含む)
 - n. 黒褐色砂土 (1mm 大の白色礫混じる)
 - o. 黒褐色粘質土 (1mm 大の白色礫混じる)
 - p. 黒褐色土
 - q. 黒褐色土

- 基本層序
- 1. にふい、黄褐色砂土 (1mm 大の白色礫混じる)
 - 2. 灰黄褐色土 (1mm 大の白色礫混じる、遺物含む)
 - 3. にふい、黒褐色土
 - 4. 黒褐色土 (遺物含む)
 - 5. 褐灰色粘質土 (炭化物含む)
 - 6. 黒褐色土 (炭化物・遺物含む)
 - 7. 暗褐色粘質土 (上部に白色礫多く混じる)
 - 8. 暗灰黄色粘質土 (炭化物含む)
 - 9. 明黄褐色土
- 整地層
- 整地層
 - 整地層
 - 整地層
 - 整地層
- 弥生時代包含層
- 地山

- SO02 北東部
- イ. 黒褐色粘質土 (炭化物含む)
- SO01 北東部
- イ. 黒褐色土
 - ロ. 黒褐色粘質土 (1mm 大の白色礫混じる)
 - ハ. 褐灰色土
 - ニ. 黒褐色土
 - ホ. 暗褐色砂土
 - ヘ. 暗褐色砂土 (炭化物含む)
 - ト. 黒色砂土 (褐色土ブロック混じる、炭化物含む)



第93図 Cトレンチ土層図



第94図 Dトレンチ土層図

基本層序

1. にぶい黄褐色砂土 (1mm 大の白色礫混じる)
2. 灰黄褐色土 (1mm 大の白色礫混じる、遺物含む)
3. にぶい黄褐色土
4. 黒褐色土 (遺物含む)
5. 黒灰色粘質土 (炭化物含む)
6. 黒褐色土 (炭化物・遺物含む)
7. 暗褐色粘質土 (上部に白色礫多く混じる)
8. 黄灰色粘質土 (炭化物含む)
9. 暗灰黄色粘質土
10. 明灰褐色土

遺構埋土

- a. オリーブ黒色土
- b. オリーブ黒色粘質土 (1mm 大の白色礫混じる)
- c. 灰色土

S001

- イ. 黒褐色土
- ロ. 黒褐色粘質土 (1mm 大の白色礫混じる)
- ハ. 黒褐色土
- ニ. 灰色砂土

遺構埋土

- 整地層
- 整地層
- 整地層
- 整地層
- 水田層
- 弥生時代包合層

地山

11 小結

このB区では古墳2基が古く、古墳時代後期と古代の建物群を挟んで、中世の建物群が最も新しい。特に、古代の建物群は、2間×2間の倉庫や束柱を持つ床張りの建物などがあり、C区の古代建物群との関連が考えられる。また、出土遺物で注目されるのは越州窯青磁の碗や香炉で、これほど多量に出土したのは豊後地域ではこの加原遺跡だけである。さらに、隣のC区では1点しか出土していないことを考えると、このB区とC区の建物群の時期、あるいは性格の違いが浮き彫りになる。これらについては、第5章総括であらためて触れることにする。

また、土層説明で触れたが、この地区では稲作に関わる土層が広がっているのが確認された。このことも含めて層序についてまとめておきたい。地山の上には弥生時代後期の包含層があり、その層を切って古墳の周溝が築かれる。そして、その上面を稲作に関わると思われる土層が一定の範囲で覆う。そして、その上部に古代の遺物を含む黒褐色土が堆積する。残念ながら、古墳時代後期の堅穴建物がどの層に築かれたのかは確認できなかった。